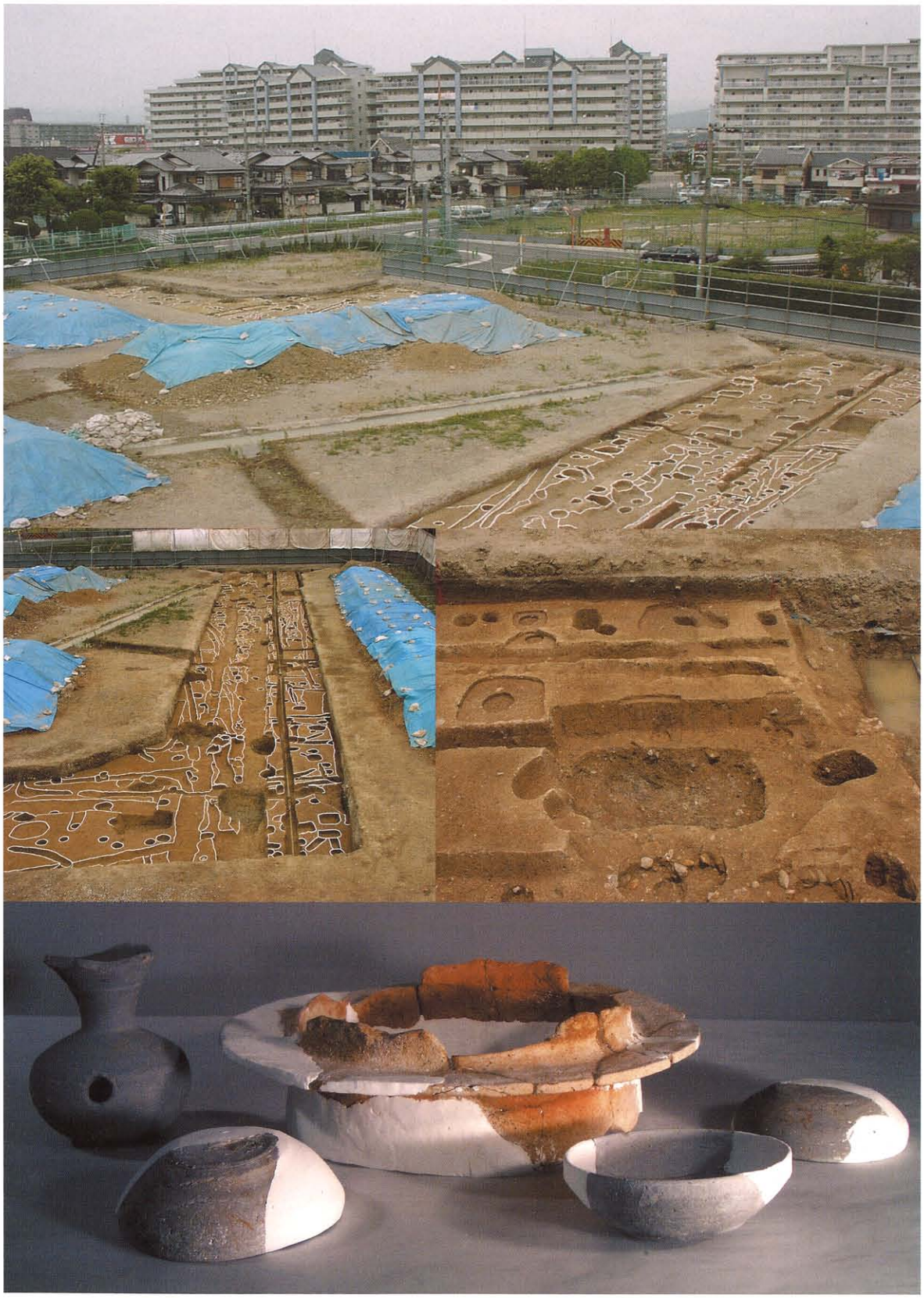
大阪府茨木市

平成17年度発掘調査概報

平成18年3月

茨木市教育委員会



総持寺遺跡　上段：調査地全景（南東から）　中段：左Ａトレンチ全景（南から）
右：SB5全景（南から）　下段：出土遺物　本文27P～

巻頭図版Ⅱ

耳原遺跡　第３遺構面　全景（東から）

耳原遺跡　北調査区（Ｂ・Ｃ地区）全景（東から）

写真上　本文13Ｐ～　　写真下　本文22Ｐ～

はじめに

わたくしたちのまち茨木市は大阪府の北部に位置し、北は京都府と接していて大阪と京都との中程にあり、古代より他の地域の人達との交流の盛んな所であります。

東奈良遺跡では昭和48年に流水紋銅鐸の鋳型等が発見され、他の地域で出土した銅鐸との同一溶笵であることが判明し、さらに平成11年には小銅鐸が発見されるなど、開発事業に伴う発掘調査により、貴重な遺物が出土しています。

しかし、未だ銅鐸については必ずしもその全貌についてあきらかにされているとはいえません。邪馬台国の所在についての近畿説、九州説にも結論がつけられてはいないことなどともあわせ、まだまだ古代については明らかにはなりません。

また、昭和60年に発見された牟礼遺跡では縄文時代晩期といわれる灌漑跡を示す水路と井堰があらわれ、等高線上に水路を配していることなどは、流水紋の文様を思わせ、トンボやサカナ・カエル・トカゲなどの描写が銅鐸の鋳型にも現れていることなど、いかにも農耕によるムラを反映しているものといわれています。

出土された銅鐸の約10%が流水紋銅鐸だと言われていて、この流水紋に似たものが中国の四川・雲南地域にもあると、ある研究者は言っており、また、銅鐸のすがたがある美しさを備えていて規格や大きさについてもあるきまりがあるとも言います。

このような紋様や銅鐸についての解明が古代から国へと形成される過程がどのようなものであったのか、について考えるときの一つの材料になるのではないかと考えています。

この冊子は、平成17年度に行った開発事業に伴う発掘調査についてその概略について述べたものです。調査にあたって、惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝をしますとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温いご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成18年3月31日

茨木市教育委員会
教育長　大橋忠雄

目　　次

はじめに

例　　言

茨木市内遺跡分布図

平成17年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1．春日遺跡（春日一丁目85-1・85-2）…… 1

2．春日遺跡（春日三丁目234-1）…… 10

3．耳原遺跡（南耳原二丁目445-1・85-2）…… 13

4．中条小学校遺跡（駅前三丁目435-1）…… 19

5．耳原遺跡（耳原三丁目地内）…… 22

6．総持寺遺跡（三島丘二丁目216-2・233-3他）…… 27

7．耳原遺跡（耳原一丁目249-2・249-3）…… 58

8．中条小学校遺跡（東中条町398-4他）…… 61

9．東奈良遺跡（東奈良三丁目11-2）…… 64

例　　言

1．この概報は、茨木市教育委員会が平成17年度に実施した発掘調査事業報告です。
2．本書に使用した地図は「茨木市地域計画図－１／2,500」です。

平成17年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1．平成17年度発掘調査事業

茨木市における平成17年度の発掘件数は９件で、埋蔵文化財確認試掘･立会調査件数は195件ありました。発掘調査原因の事業別では、公共事業はなく全て民間事業で、共同住宅建設工事や宅地造成工事・土壌改良工事などでした。

発掘調査件数は前年とほぼ同数で、確認試掘・立会調査件数もほぼ同数です。社員寮の売却や民間企業の土地の売却が進み、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられる傾向は、ほぼここ数年の特徴として続いています。

2．平成17年度発掘調査における主要な調査の概要

平成17年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、総持寺遺跡では平成16年の調査と同じく、大阪府の土地が民間に払い下げになったことによる民間開発の宅地造成工事に伴うもので、出土遺物は少な目とはいえ、府営住宅の建替えに伴う大阪府や文化財センターによる調査面積と合わせて広大である点からも、総持寺遺跡の全体像を捉える上で貴重な調査となりました。

耳原遺跡では、土壌改良工事に伴う発掘調査で、平成16年の宅地造成工事に伴う調査に引き続くものであり、新たに発見された耳原西古墳と同じ敷地内の調査で、10ｍ×10ｍの区画の限られた場所の数か所の調査となりました。

東奈良遺跡は、平成14年から続く東奈良土地区画整理事業に伴う換地部分の調査で、これまでの共同住宅や保育所・老人福祉施設等の建設工事に伴った調査を追認するようなデータがとられました。

銅鐸の鋳型やふいごの羽口、朝鮮半島系とみられるが紋様が施された小銅鐸が舌とともに溝底から出土した、この東奈良遺跡での調査は、吉野ヶ里遺跡や唐古・鍵遺跡等と同様全国的にも重要な遺跡で、また、今後の調査も見込まれ、環濠集落の全体像や遺跡の性格が明らかにされていくものと考えられます。

用語等

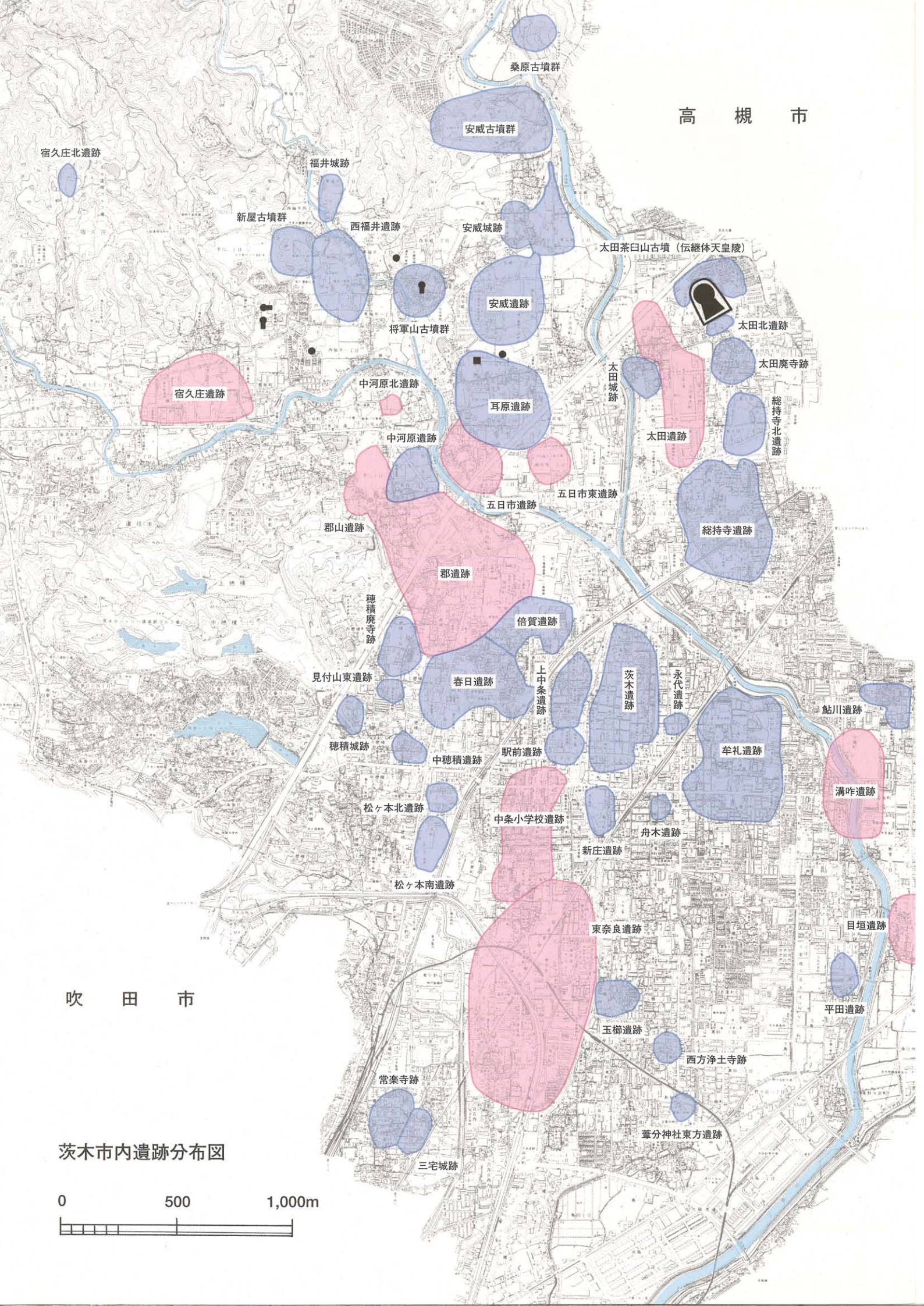
ＳＢ：建物跡・掘立柱建物跡　ＳＥ：井戸　ＳＸ：落込み・不定形土坑
ＳＣ：柱列群　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝・雨落溝
ＳＲ：流路

畿内第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式：畿内から出土する弥生土器を基準とした土器区分で、機種構成やプロポーション（土器の形態）で、おおよそ５つに分けられⅠ様式が弥生時代前期、Ⅱ～Ⅳ様式が弥生時代中期、Ⅴ様式が弥生時代後期の年代観が与えられている。

庄内式併行期：豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時代区分で、おおよそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

図版目次

第１図　春日遺跡遺構平面図
第２図　〃　調査区断面図
第３図　〃　出土遺物（１）
第４図　〃　〃　（２）
第５図　〃　全景写真
第６図　春日遺跡遺構検出状況
第７図　〃　遺構平面図
第８図　耳原遺跡第１遺構面
第９図　〃　第２　〃
第10図　〃　第３　〃
第11図　〃　１～３写真
第12図　中条小学校遺跡遺構図
第13図　〃　写真
第14図　耳原遺跡北調査区遺構図
第15図　〃　南　〃
第16図　〃　北・南遺構写真
第17図　総持寺遺跡調査区全体図
第18図　〃　調査区断面図（１）
第19図　〃　〃　（２）
第20図　〃　建物跡平断面図（ＳＢ２）
第21図　〃　〃　（ＳＢ３）
第22図　〃　〃　（ＳＢ５）
第23図　〃　柵列跡平断面図（ＳＣ１）
第24図　〃　建物跡平断面図（ＳＢ６）
第25図　総持寺遺跡　建物跡平面図断面図（ＳＢ７）
第26図　〃　建物10平断面図
第27図　〃　15　〃
第28図　〃　柱列（ＳＣ４）　〃
第29図　〃　遺物出土状況（ＳＸ２・ＳＰ88）
第30図　〃　土坑平断面図
第31図　〃　遺物出土状況（Ｃ／ＳＰ１）
第32図　〃　出土遺物（１）
第33図　〃　〃　（２）
第34図　〃　〃　（３）
第35図　〃　既往調査区遺構
第36図　〃　〃
第37図　〃　〃
第38図　総持寺遺跡発掘状況（１）
第39図　〃　（２）
第40図　〃　（３）
第41図　〃　（４）
第42図　耳原遺跡遺構面全景
第43図　〃　遺構平断面図
第44図　中条小学校遺跡遺構図
第45図　〃　写真
第46図　東奈良遺跡平面図土層図
第47図　〃　遺構面検出状況


高槻市
吹田市
桑原古墳群
安威古墳群
宿久庄北遺跡
福井城跡
新屋古墳群
西福井遺跡
安威城跡
太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）
安威遺跡
将軍山古墳群
太田北遺跡
太田廃寺跡
宿久庄遺跡
中河原北遺跡
耳原遺跡
太田城跡
総持寺北遺跡
太田遺跡
中河原遺跡
五日市東遺跡
五日市遺跡
総持寺遺跡
郡山遺跡
郡遺跡
穂積廃寺跡
倍賀遺跡
見付山東遺跡
春日遺跡
上中条遺跡
茨木遺跡
永代遺跡
鮎川遺跡
穂積城跡
中穂積遺跡
駅前遺跡
牟礼遺跡
溝咋遺跡
松ヶ本北遺跡
中条小学校遺跡
舟木遺跡
新庄遺跡
松ヶ本南遺跡
東奈良遺跡
目垣遺跡
平田遺跡
玉櫛遺跡
西方浄土寺跡
常楽寺跡
葦分神社東方遺跡
三宅城跡
0
500
1,000m

茨木市内遺跡分布図

平成17年度　埋蔵文化財発掘調査 一覧表

No.	遺　跡　名	調査位置	調査期間	調査面積	調　査　内　容	調査原因
1	春日遺跡	春日一丁目 85-1・85-2	17. 3. 2～17. 3.15	119㎡	古墳時代　飛鳥・奈良時代 平安時代　中世 土坑　溝　柱穴 耕作溝　石器　土師器 須恵器　陶磁器	共同住宅建設
2	春日遺跡	春日三丁目234-1	17. 1.27～17. 2. 3	36㎡	古墳時代　平安時代 柱穴　溝　井戸　土坑 土師器　須恵器　陶磁器	共同住宅建設
3	耳原遺跡	南耳原二丁目 445-1・85-2	17. 4. 1～17. 6.14	1,062㎡	縄文時代　平安時代　中世 鋤溝　柱穴　土坑 石器　縄文土器(晩期浅鉢口縁部片) 土師器　須恵器　陶磁器	倉庫建設
4	中条小学校遺跡	駅前三丁目435-1	17. 4.19～17. 6. 3	512㎡	中世 井戸　溝　柱穴	倉庫兼営業所建設
5	耳原遺跡	耳原三丁目地内	17. 4.26～17. 7.21	1,400㎡	中世　近世 溝　柱穴 土取坑　円形周溝 土師器　須恵器　陶磁器	土壌改良工事
6	総持寺遺跡	三島丘二丁目 216-2・233-3他	17. 5. 9～17. 6.29 17.10.12～17.10.21	681㎡	飛鳥時代　奈良時代　中世 掘立柱建物跡　耕作溝 石器　土師器　須恵器	宅地造成工事
7	耳原遺跡	耳原一丁目 249-2・249-3	16. 4.25～17. 6. 1	471㎡	弥生時代 風倒木痕跡　土坑　ピット 弥生土器　土師器　須恵器	共同住宅建設
8	中条小学校遺跡	東中条町398-4他	16. 5. 9～17. 5.27	188㎡	古墳時代 溝　柱穴　土師器　須恵器	共同住宅建設
9	東奈良遺跡	東奈良三丁目 130・131	17. 7.19～17. 8.10	210㎡	弥生時代　古墳時代 環濠３条　溝10条 井戸２基　柱穴　土坑 石器　弥生土器　土師器 須恵器	共同住宅建設
10	穂積廃寺跡	上穂積二丁目・三丁目地内	18.1.5～	1,444㎡	発掘調査中	土地区画整理事業
11	中条小学校遺跡	新中条町55-4	18.1.5～	845㎡	発掘調査中	共同住宅建設

No.10・No.11についての報告は後日とします。

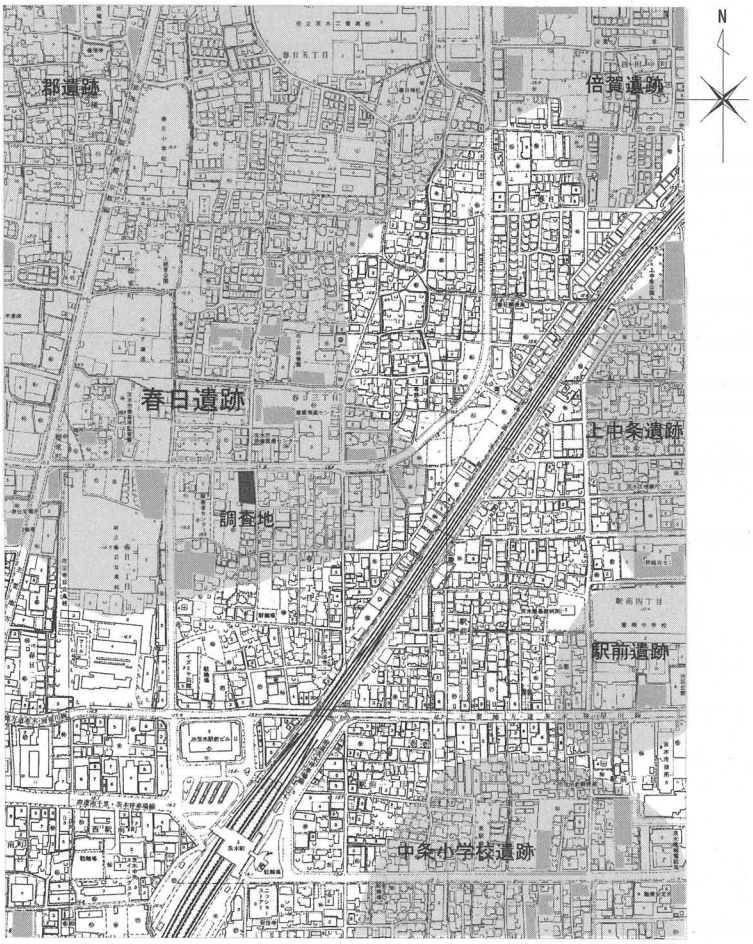
春日遺跡

所 在 地　茨木市春日一丁目
85-1・85-2
調査原因　共同住宅建設事業
調査期間　平成17年3月2日～
平成17年3月15日
調査面積　119㎡
調査担当　黒須　靖之
調査結果

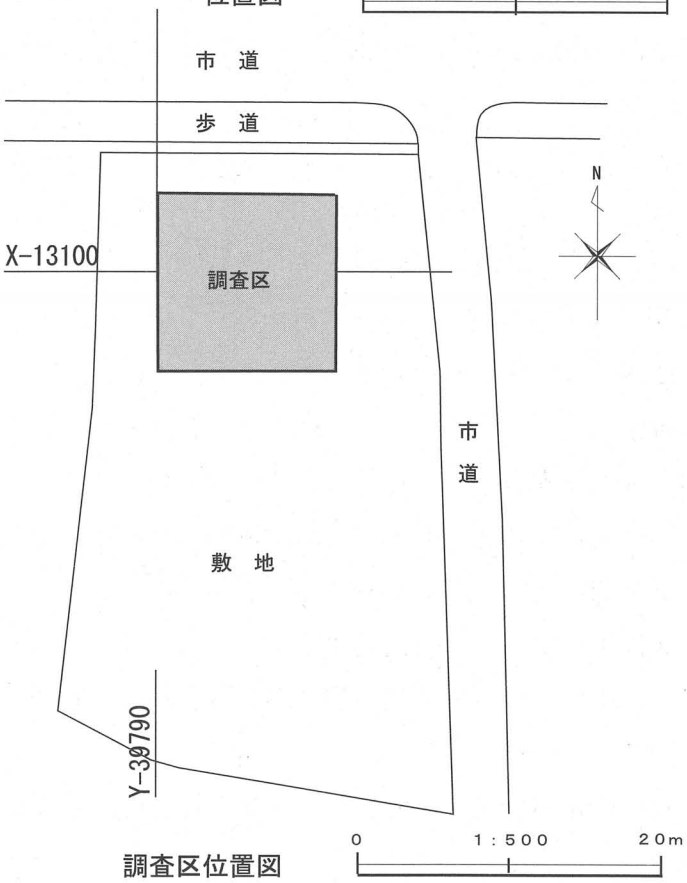
春日遺跡は、千里丘陵から延びる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に立地する集落遺跡である。集落の形成は弥生時代中期に遡り、中近世に至る複合遺跡である。春日遺跡は春日一～三・五丁目・上穂積二丁目・中穂積二丁目に位置し、東西700m、南北600mの範囲を有する。北に郡遺跡、北東に倍賀遺跡が接している。さらに東にはＪＲ京都線を挟んで上中条遺跡や茨木遺跡、西は穂積廃寺跡、見付山東遺跡、南には中穂積遺跡や松ヶ本北遺跡が所在する。春日一～三・五丁目付近は市街地化が早かったこともあり、再開発によって近年発掘調査が相次いで実施されている。

平成16年度には今回の調査も含め、3件の発掘調査を実施しており、KS04-2の春日三丁目の調査では遺跡東端のＪＲ京都線の線路沿いで、トレンチから古墳時代後期(6世紀)の須恵器坏身を伴う竪穴住居跡が検出されている。

また、KS04-1(H16年度発掘調査概



位置図



調査区位置図

報)の春日三丁目の調査では、中近世の鋤溝、古墳時代後期頃の溝２条、ピット、埋没河道２条を検出し、河道の最下層から弥生時代後期の土器が出土し、当該期まで遡る可能性が指摘された。

平成14年度に実施した春日二丁目の調査では、全長40ｍ～、幅1.7から2.2ｍの古代の南北方向の溝(SD-1)が検出され、完形の須恵器坏が出土している。SD-15から完形の須恵器短頸壺が出土している。

同年、北に道路を隔てて斜め向かいの上穂東町の調査では、中世の掘立柱建物跡や東西方向の大溝が検出されている。平成12年度に実施した春日一丁目の調査では、弥生時代中期から中世の遺構群が検出されている。検出遺構は溝・溝状遺構10条・掘立柱建物跡(SB)５棟・土坑(SK)、10基・柱穴320口を数える。SBは１間×４間の東西棟が南北に３棟配置され建て替え等はなく、これらは平安時代後期頃と推定されている。

平成10年度に実施した春日三丁目の調査では、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡･溝10条･井戸２基・土坑８基が検出されている。

平成７年度に実施した春日五丁目の調査では、古墳時代後期の集落跡が確認されており、検出遺構は後期の溝・土坑・柱穴で明確な建物跡はないが５世紀中頃～６世紀後半の遺物が出土した柱穴が検出されている。同年、上穂積一丁目の調査では、古墳時代後期の円墳(１号墳)と奈良時代後半～平安時代前期の自然河道・溝等が検出され、古墳周溝の底から衣笠形埴輪立飾りが出土している。５世紀後半に築造され、既往調査地でも同時期の埋没墳が確認されていることから、千里丘陵の裾に沿って北に分布していると考えられる、とされた。

検出遺構

今回の調査において、検出された遺構は次のとおりである。

第１面の中近世面では、東西方向を基調とした溝や耕作溝(鋤溝)、柱穴、土坑等で耕作地化されている。

第２面では奈良時代後半～平安時代前期と平安時代末～鎌倉時代の遺構を同一面で検出している。幅1.15～2.05ｍの東西方向の溝(SD-1)や楕円・長楕円形を呈する土坑９基、柱穴、耕作溝等が検出された。SD-1からは須恵器の甕、SK-1(土坑)からは須恵器坏、SK-3から内黒の黒色土器椀(Ａ類)、SK-4から須恵器甕や黒色土器片(Ａ類)､SP-2(柱穴)からは須恵器瓶が出土している。また、鋤溝からは土師器皿や瓦器碗が出土している。

基本層序

調査区の基本層序はⅠ～Ⅹ層まで大別される。

Ⅰ層が表土層で0.6～0.9ｍの現代の盛土である。

Ⅱ層は旧耕土で0.2ｍの層厚を測る。

Ⅲ層は床土で0.1ｍの層厚を測る。

Ⅳ層は中世～近世遺物包含層で明黄褐色粘土に褐灰色シルトブロックを含む。層厚は0.1～0.2ｍを測る。

Ⅴ層は中世遺物包含層で２層に細分される。灰色シルトに多量の黄褐色シルトブロック、炭化

物を少量含み、層厚は0.05～0.2ｍを測る。

Ⅵ層は弥生時代～古代の遺物包含層で２層に細分される。灰黄褐色土に褐灰色シルトや明黄褐色粘土ブロックを含み、炭化物をやや多く含む。層厚は0.05～0.25ｍを測る。

Ⅶ層は自然層で調査区北西隅にのみ見られ、地山を削るように落ち込んでいる。２層に細分され、Ⅶ－１層は黄橙色粘土に褐灰色シルトや５㎜未満の礫を多量に含む。Ⅶ－２層は明黄褐色砂壌土ににぶい黄橙色砂礫を多量に含む。層厚は0.45ｍ以上を測り、湧水が見られる。

Ⅷ層は地山層で淡黄色粘土に灰白色砂質シルトを含み。層厚は0.15～0.2ｍを測る。

Ⅸ層は２層に細分され、明黄褐色粘土ににぶい黄橙色粘土ブロックを多量に含む。層厚は0.15～0.45ｍ以上を測る。

Ⅹ層は黄橙色砂質土に灰白色砂壌土や１～５㎜大の砂礫層を互層上に含む。第１面の遺構はⅣ層上面、標高T.P.14.1～14.0ｍ、第２面の遺構はⅥ層およびⅧ層上面、標高T.P.13.8ｍで検出している。

出土遺物(第３・４図１～22)

出土遺物は遺物収納コンテナに１箱で、欠損した磨製石斧、スクレーパーや摩滅した円筒埴輪片、須恵器蓋・坏・瓶・甕、黒色土器椀・土師器椀・皿・羽釜・瓦器椀・灰釉陶器？・陶磁器・龍泉窯系青磁碗・白磁等が出土している。遺構に伴う明確に時期のわかる遺物は少なく、その多くは遺物包含層出土の遺物である。

１は淡黄色を呈する円筒埴輪の破片である。突帯は幅1.7㎝、厚さ0.9㎝を測る。

２は宝珠つまみが付く須恵器坏蓋である。体部がほぼ平坦でかえりが消失していることから、概ね８世紀後葉～９世紀初頭頃(Ⅳ期)のものと思われる。

３は須恵器高台付坏身で口縁部が欠損し、体部下端にヘラケズリを施す。残存高2.8㎝、底径(9.1㎝)、高台高0.8㎝を測り、８世紀後半頃のものと思われる。

４はSD-1出土の須恵器甕の口縁部である。復元口径19.2㎝を測り、８世紀後半頃のものと思われる。

５、６も須恵器甕の口縁部である。

５は復元口径25.7㎝を測り、口唇部直下にリング(沈線)が巡る。

６は復元口径26.6㎝を測り、口縁部外面にナデ前の平行タタキの痕跡が見られる。

７はくの字に外反する短い口縁部を有する須恵器鉢と思われ、復元口径27.9㎝を測る。概ね８世紀末～９世紀初頭頃のものと思われる。

８はオリーブ灰色を呈する龍泉窯系青磁碗である。残存高4.2㎝、口径14.0㎝～、底径5.8㎝、高台高0.9㎝を測る。残存高4.2㎝、口径14.0㎝～、底径5.8㎝、高台高0.9㎝を測る。12世紀後半～13世紀前葉頃のものと思われる。

９は白磁碗の底部で、内面に蛇の目が見られる。

10は灰釉陶器の底部と思われる。底径6.7㎝、高台高1.2㎝を測る。

11は明緑灰色を呈する磨製石斧であるが、先端を欠損している。残存長4.6㎝～、幅4.1～5.4㎝、

厚さ4.0～4.3㎝を測る。

12は暗灰色を呈するサヌカイト製の掻器である。縦横3㎝、厚さ0.4～0.7㎝で方形を呈し背面1側縁に刃部調整を施す。

13も暗灰色を呈するサヌカイト製の削器である。全長2.3㎝、幅0.9～2.3㎝、厚さ0.35㎝を測る。背面2側縁に刃部調整を施す。

14は布目痕跡が見られる平瓦で、厚さ1.6～1.8㎝を測る。

15はSD-1出土の須恵器甕の体部である。

16は平行沈線が3条巡る須恵器片である。

17～20も須恵器甕の体部である。

17はSD-2、18はSP-5出土である。

21は外面平行タタキが見られる陶器甕、22も陶器片である。

まとめ

今回の調査では、SD-1(溝)やSK(土坑)-1・2・4、柱穴などの奈良時代後半～平安時代前期の集落を構成する遺構群が検出された。また、平安時代後期～鎌倉時代を中心とする耕作溝(鋤溝)が多数確認された。

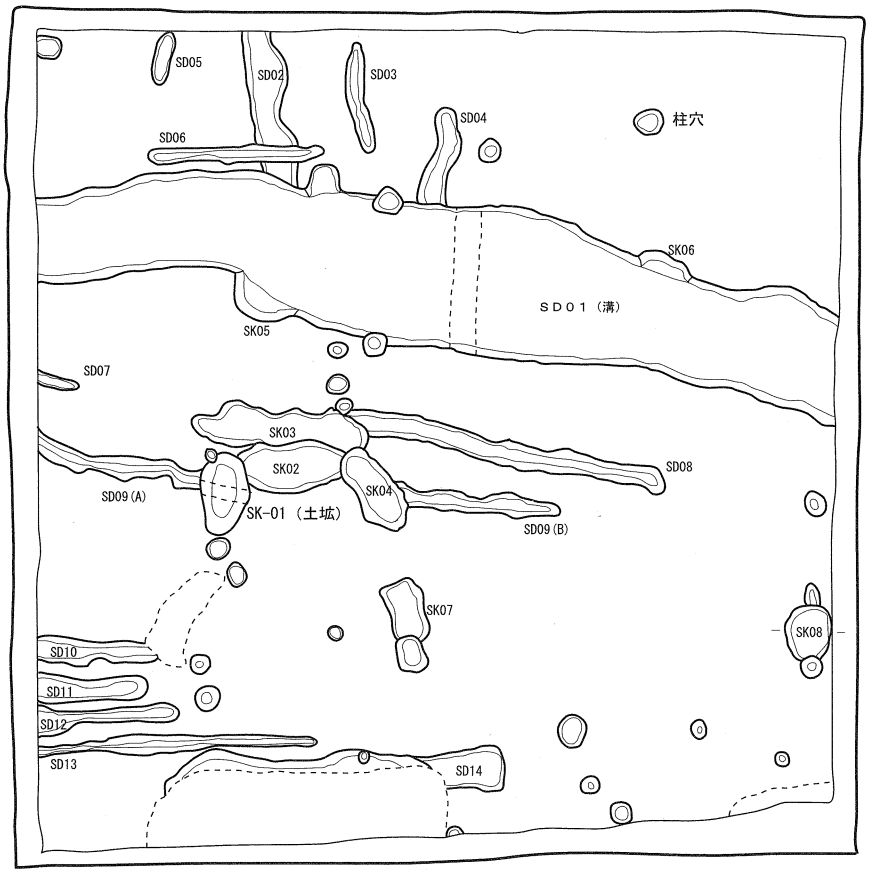
奈良時代後半～平安時代前期の遺構については、当調査区より西へ100ｍ程離れたＨ14年度の春日二丁目の調査で溝や土坑、柱穴を検出した他に、Ｈ17年度の上穂積一丁目の調査でも溝・自然河道を検出した。

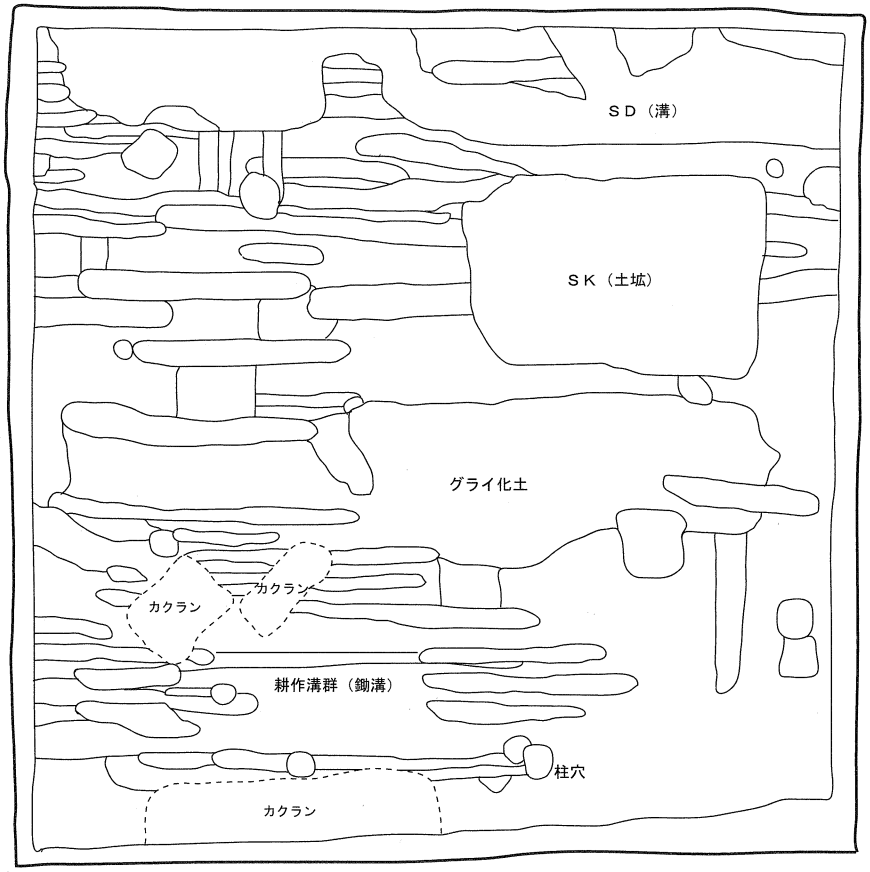
平安時代後期～鎌倉時代の遺構については、北に200ｍ程離れたＨ９年度の春日三丁目の発掘調査で古墳時代後期の溝・柱穴以外に、当該期の井戸や柱穴などの集落遺構を検出しており、前述したKS04-2の調査でも井戸を多数検出している。また、南東に100ｍのＨ10年度の春日三丁目の調査等でも集落遺構を多数検出していることから、平安時代後期～鎌倉時代の集落は春日遺跡全域に展開していることがわかる。

今回の調査では調査区北西側に落込みが確認されたが、Ｈ14年度の上穂東町の調査でも南側の道路に向かって落込みが確認されており、平安時代後期～鎌倉時代には現道路の直下に東西方向の自然河道または大溝等が存在しており、中世集落との関連が注目される。

なお、今回の調査では埴輪片が出土しているが、Ｈ12年度の春日一丁目の調査でも多数の埴輪片や5世紀後半～6世紀前葉の須恵器坏が出土している。このことからも、周辺では埋没した古墳時代後期の古墳が多数存在しており、新たに発見される可能性が高い。

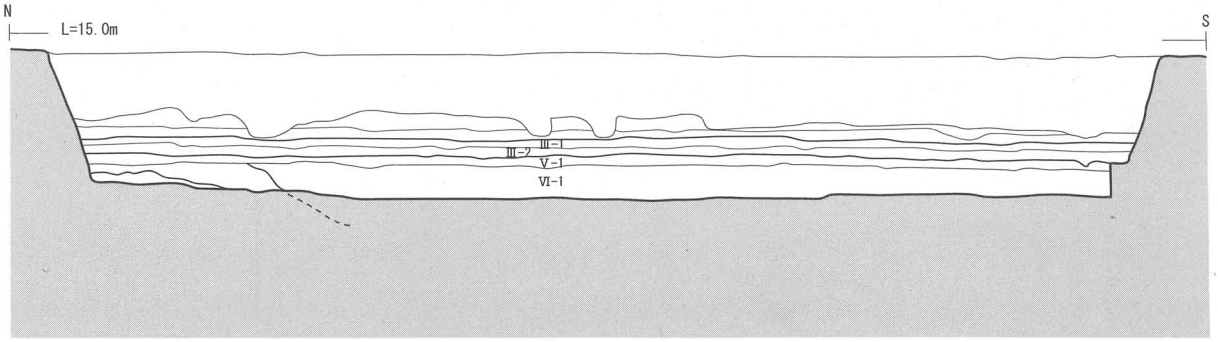
以上のように春日遺跡は弥生時代～中世にいたるまで、各時期にわたって土地利用されてきたことが徐々に明らかになりつつある。特に古墳時代後期における古墳群の分布や集落との関係、奈良時代後半～平安時代前期頃の集落のあり方、平安時代末～鎌倉時代の様相など未だ明らかになっていない。今後の調査事例の増加を待って再検討する必要があろう。





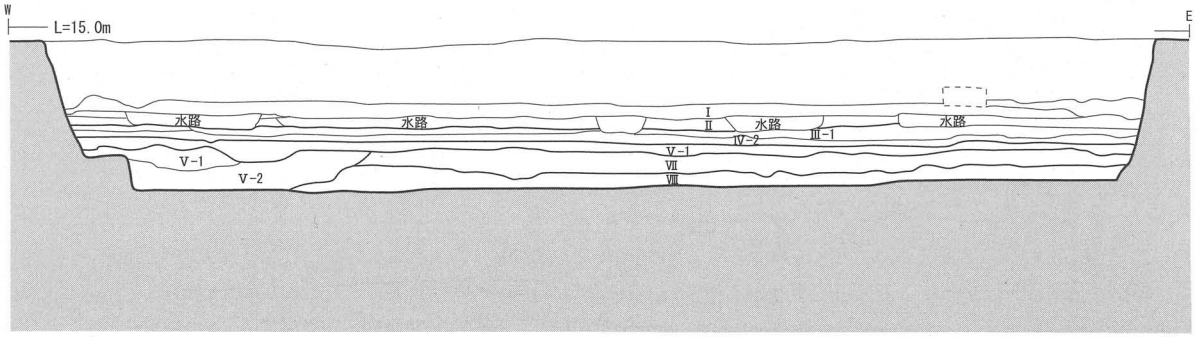
第１図　　春日遺跡（KS04－３）遺構平面図／古代（上）・中世（下）

調査区東壁断面図



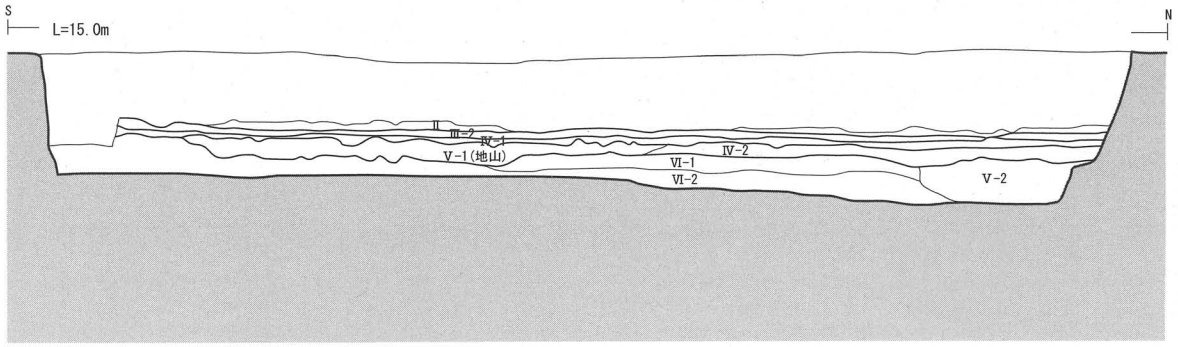
土層注記
床土：SiIN6/0,HC2.5Y6/8 層状 30-40% 中ー硬　中ー密　灰色シルトに明黄褐色粘土
Ⅲ-1：SiIN4/0,SiI2.5Y5/4 0.5～1cm大ブロック 30-40%　中ー硬　中ー密　0.5cm大炭化物少量含。灰色シルトに黄褐色シルト
Ⅲ-2：SicI2.5Y5/3,SiIN4/0 粉　40%　中ー硬　密
Ⅴ-1：HC2.5Y8/3,Sic2.5Y8/1 10-15%　地山

調査区北壁断面図



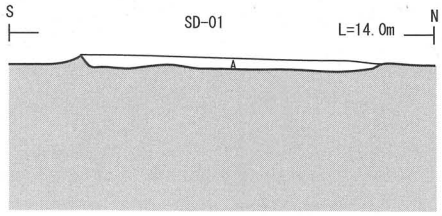
土層注記
水路：SiI5BG7/1,HC2.5Y6/8層状　（明青灰色シルト）
Ⅱ（包含層1）：HC10YR6/8,SiI10YR6/1 ～1cm大ブロック　中ー硬　中ー密　中世土師器皿出土
Ⅴ-2：Sic10YR6/2,SL10YR7/1 粒～層状 40%　軟　疎
Ⅷ：LS10YR7/8,～0.5cm大レキ SL10YR8/2,～0.2cm大レキ～層状 30-40%　軟　疎

調査区西壁断面図

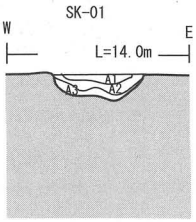


土層注記
Ⅲ-2層：SiI10YR5/1(褐灰色シルト)
Ⅳ-1層：SicI10YR4/2,HC10YR6/8 ～0.5cm大ブロック 30% SiI10YR5/1 粒 25% 中ー硬 中ー密 ～0.3cm大炭化物中量含む。
Ⅳ-2層：SicI10YR4/2,SiI10YR5/1 粒 20-30% 中ー硬 中ー密 ～0.3cm大炭化物中量含む。土器出土。
Ⅴ-1層：HC10YR7/8,Sic10YR6/1 粒～1mm 30-40% ～5mm大白色レキ中～多量、中ー軟 中ー疎。
Ⅴ-2層：SL10YR6/8,LS10YR7/2 1～2mm大レキ 50-60% 軟　疎　（湧水）河道
Ⅵ-1層：HC10YR7/6,HC10YR7/2 ブロック 40%　中ー軟　密
Ⅵ-2層：HC10YR7/6,HC10YR7/2 ブロック 20-30% 中ー硬　密

0　1：80　4m



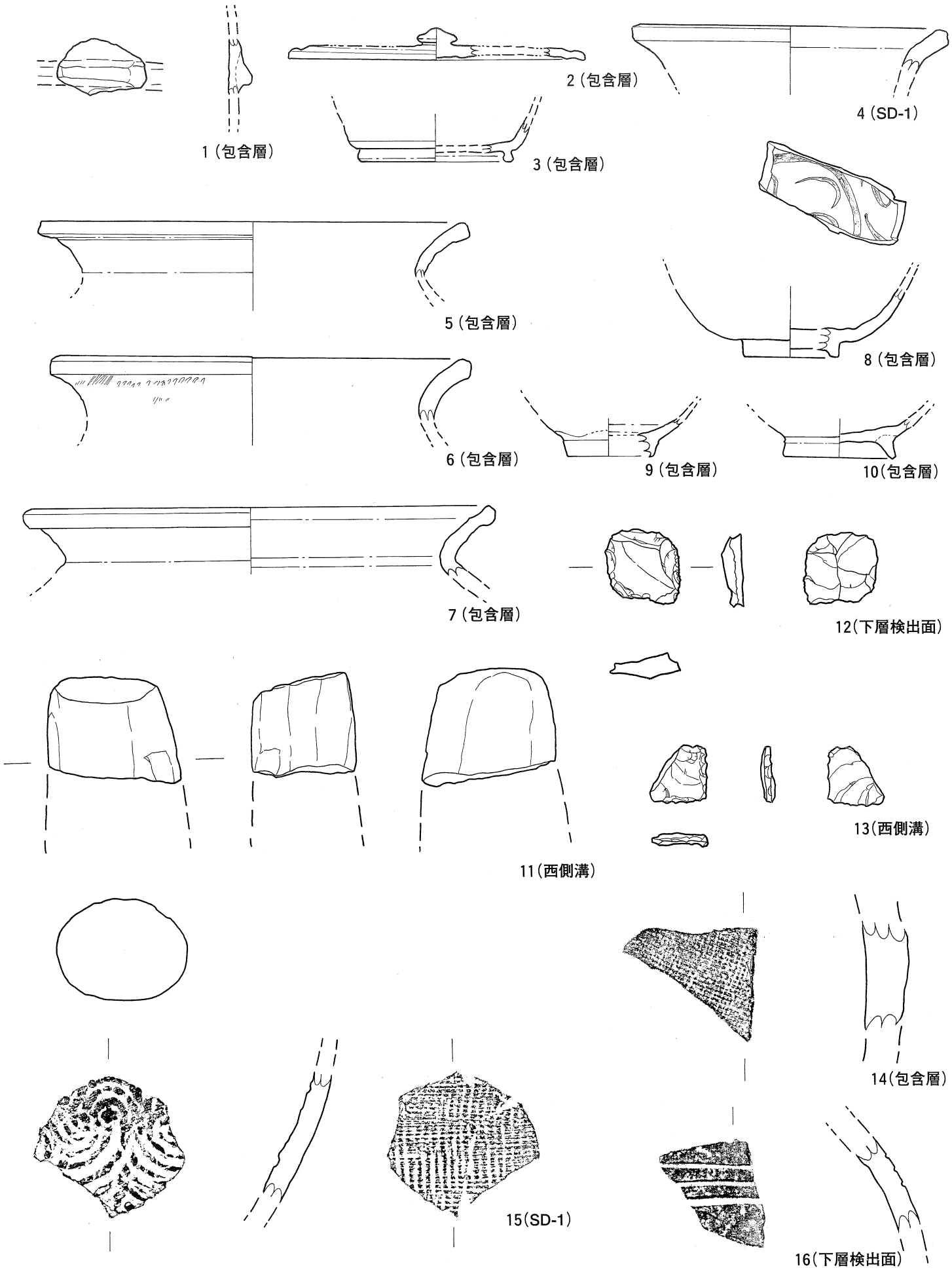
A:SicI10YR3/2,HC2.5Y7/1 粉 40% ～0.3cm大白色レキ少～中量　マンガン含。



0　1：50　2m

SK-01
A1:SicI10YR3/2,SiI10YR6/1 粉 20-25% 中-硬 中-密 ～0.3cm大白色レキ やや多く含。
A2:SicI10YR3/2,SiI10YR6/1 粉 10% 中-硬 密 ～0.3cm大白色レキおよび～0.3cm大炭化物少量含。
A3:SicI10YR3/2,SiI10YR6/1 粉 15% 中-硬 密 ～0.3cm大炭化物少量含。

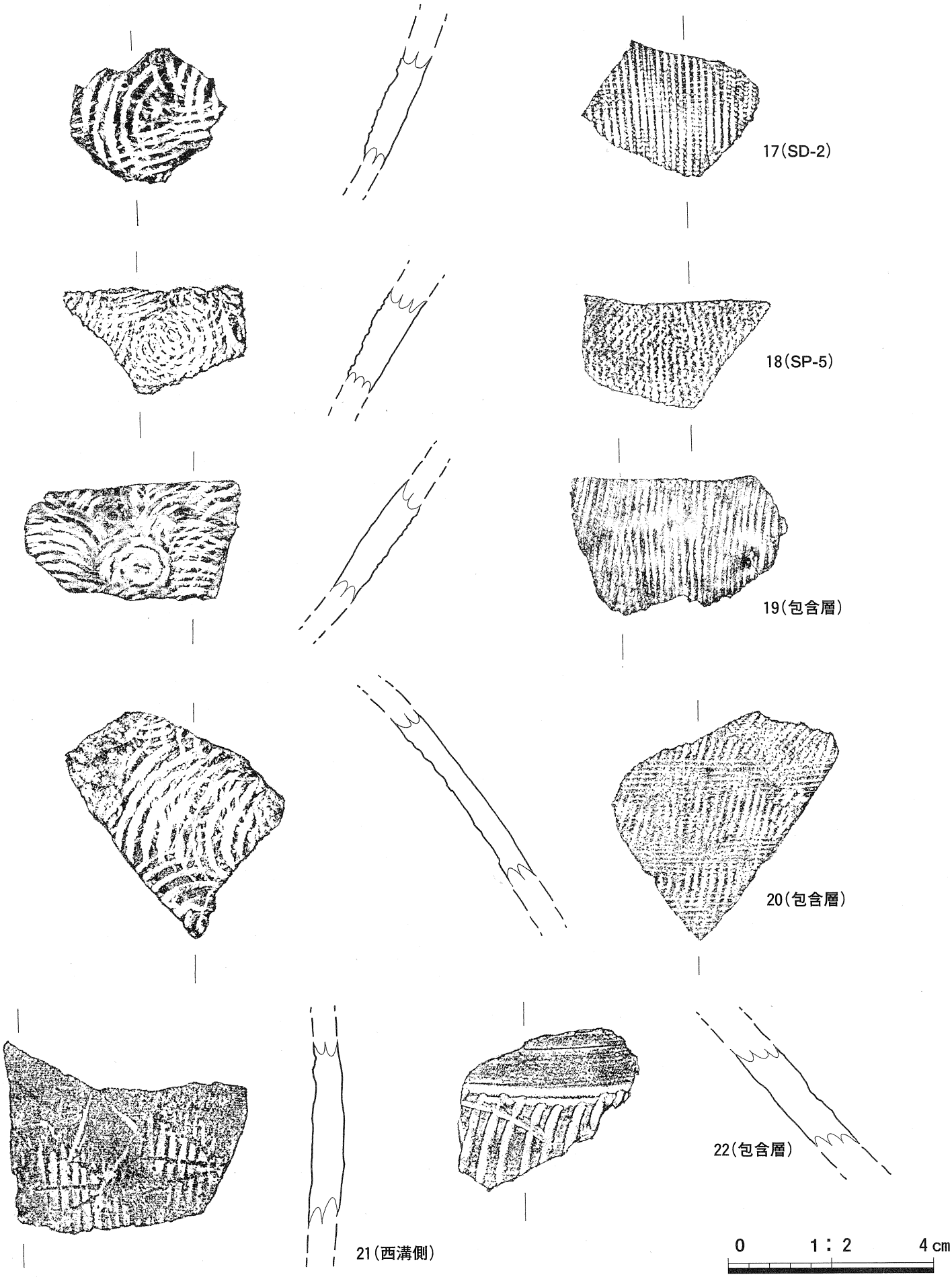
第２図　春日遺跡（KS04－3）調査区断面図・遺構断面図



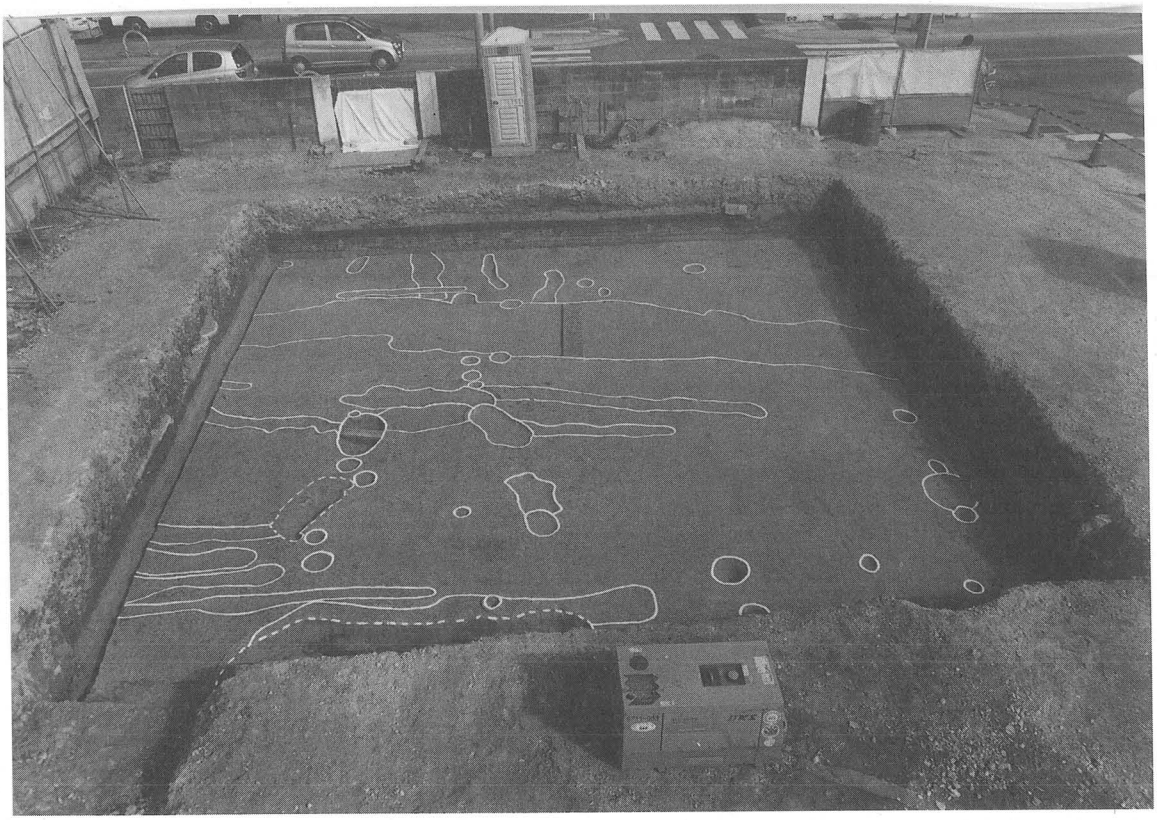
第３図　春日遺跡（KS04－3）出土遺物（１）

※　11～16は１/２

0　1：3　10cm



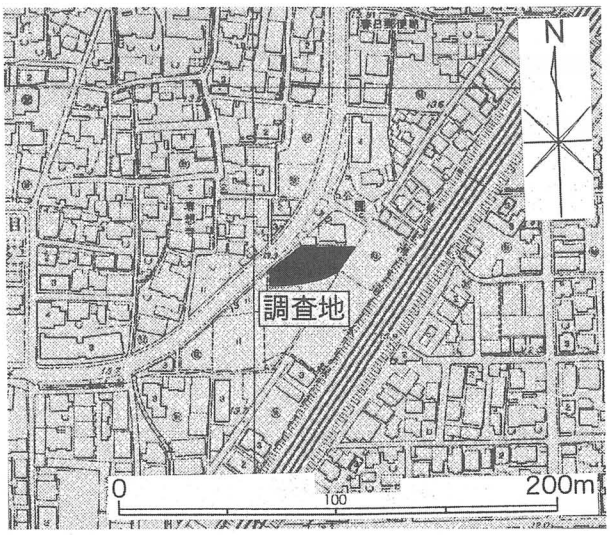
第4図　春日遺跡（KS04－3）出土遺物（2）



上：中近世面全景（南から）　　下：古代～中世面全景（南から）
第５図　春日遺跡（KS04－３）

春日遺跡

所 在 地　茨木市春日三丁目234－1
調査原因　共同住宅建設事業
調査期間　平成17年1月27日～平成17年2月3日
調査面積　約35.8㎡
調査担当　宮本　賢治



位置図

調査結果

春日遺跡は、弥生時代から中・近世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。周辺の遺跡には、北方には弥生時代から古墳時代にかけての集落があった倍賀遺跡があり、また西方には弥生時代から中世頃にかけての上中条遺跡が存在する。この他には、南東には弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。ここ数年にかけては、春日周辺において開発事業が多く行われ、それに伴い本発掘調査も実施されている。

調査地は、春日遺跡の包蔵地の南東に、また上中条遺跡の北限の西方付近に位置しており、遺跡の包蔵地としての存在が知られていない空白地帯であった。しかし、今回共同住宅の建設に伴い、事前に現地においてトレンチを設定し試掘調査を行った結果、古墳時代から平安時代にかけての生活の痕跡を示す遺物および遺構を多数検出した。

調査の区割りとして、まず東西方向に幅約1ｍ×長さ約9ｍの大きさにトレンチを設定した。(南北トレンチ調査区)その後、南北方向に幅約1ｍ×長さ約27.5ｍの大きさにトレンチを設定し(東西トレンチ調査区)Ｌ字形の調査区トレンチ内にて調査を実施した。

今回の調査は、古墳時代から平安時代にかけて営まれた生活面を同一面にて検出した。

基本層序

基本層序については、第１層～第６層に大別する事ができる。上層より順に、現代の盛土層(約1ｍ、既存の駐車場の盛り土を含む)、黒色(5Y2/1)、粘質土層(約20cm)、灰色(5Y4/1)、砂層(約６cm)、黒褐色(10Y3/1)、粘質土層(約４～16cm中世遺物包含層)、オリーブ黒色(5Y3/2)、粘質土層(約20cm 古墳～中世遺物包含層)、黄褐色(10Y5/6)、砂質土層(地山層)に分ける事ができる。

検出遺構

検出された遺構は、柱穴遺構約40基、ピット状遺構約約25基、井戸遺構２基、溝状遺構３基、土坑遺構９基、落込み状遺構１基である。特に、落込み状遺構に関しては、調査区の隅において検出された事から上記の遺構として捉えたのであるが、全容を捉えると住居跡の可能性もでてく

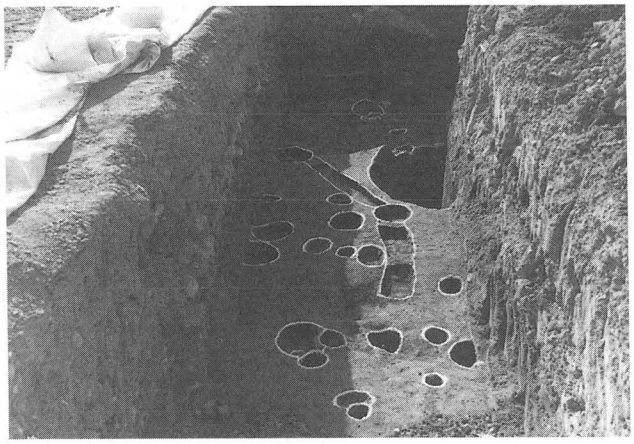
るのではないかと考えている。

出土遺物

出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14×横36×奥行き56cm)に換算して2箱分である。その種類と内訳は、古墳時代の須恵器や平安時代の頃の須恵器や土師皿などの遺物が出土している。これらの中で特筆すべきものに、東西トレンチ調査区と南北トレンチ調査区の交差するところにおいて検出された落込み状遺構内より、6世紀頃の土器形式の特徴を持つ古墳時代の須恵器の杯身が出土した。また、南北トレンチ調査区の西側付近において井戸(SE-01)が検出されたのであるが、その中から11世紀頃のものと考えられる「ての字形口縁」の特徴を持つ土師皿が10数枚重なった状態で出土している。これは井戸を利用しなくなり埋める際に、地鎮祭を行ったものだと考えている。

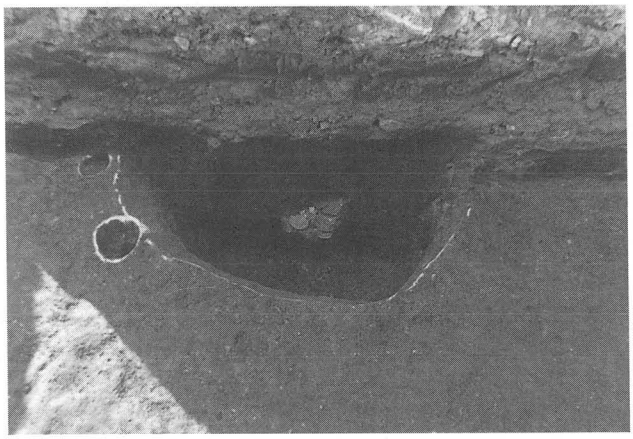
まとめ

今回の調査から、古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡である春日遺跡の包蔵地範囲の南東への集落の広がりがみられる事となった。今後の周辺での調査および成果に期待するものである。

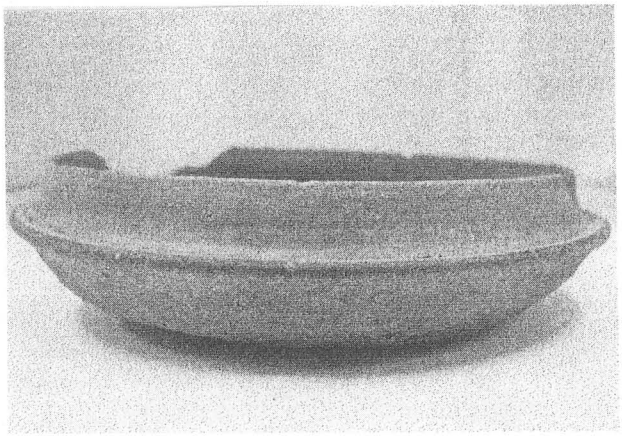


南北調査区トレンチ　遺構面検出状況（北から）

東西調査区トレンチ　遺構面検出状況（東から）

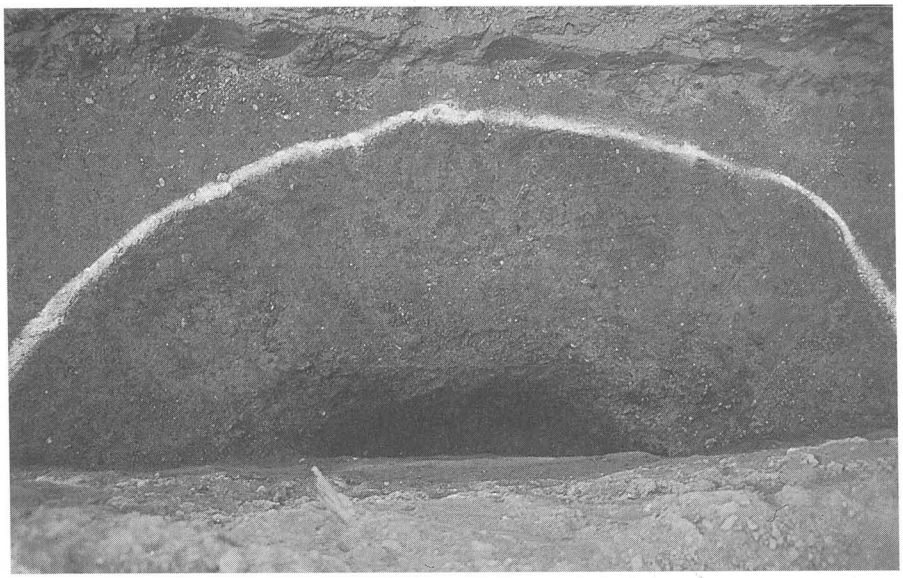


南北調査区トレンチ　SE-01内土師皿出土状況(東から)

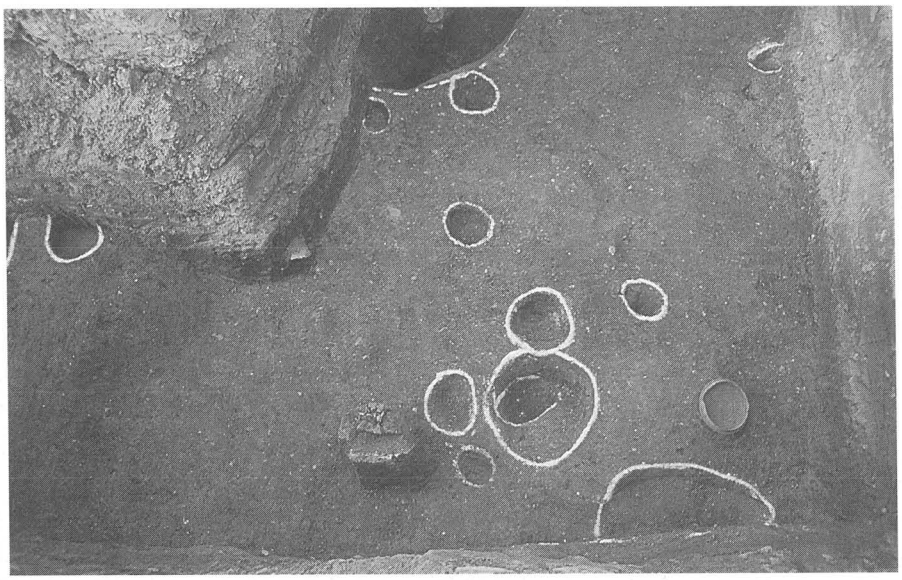


落ち込み状　遺構内出土　須恵器杯身

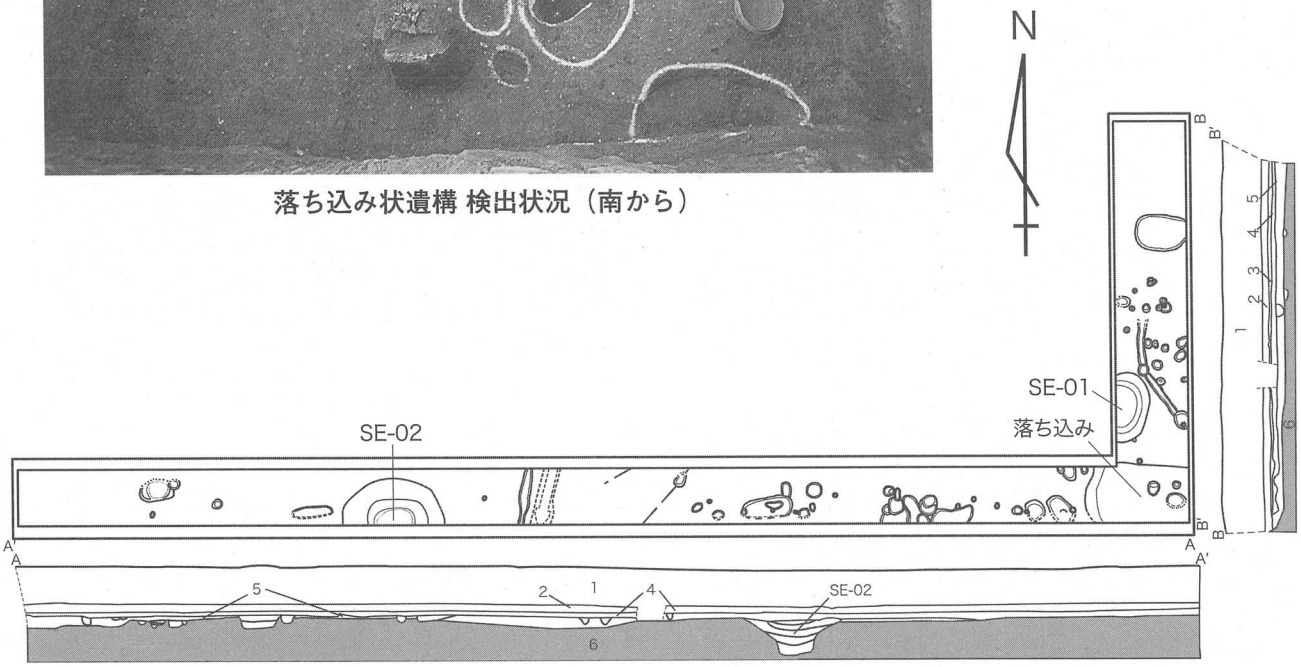
第6図　　春日遺跡　遺構検出状況



東西調査区トレンチSE-02検出状況（南から）



落ち込み状遺構 検出状況（南から）

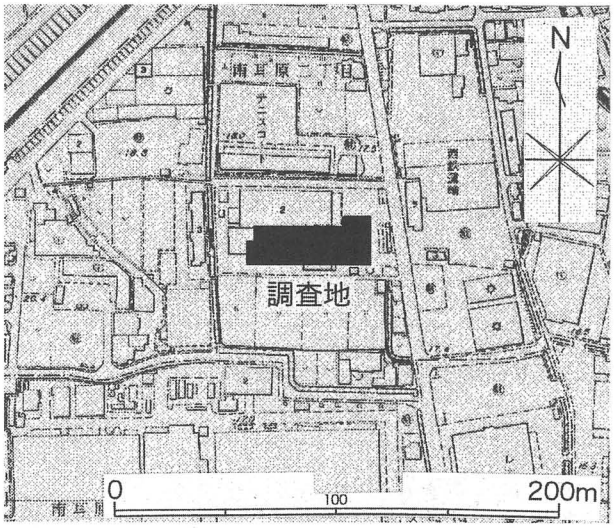


1.盛土層
2.黒色(5Y2/1)粘質土
3.灰色(5Y4/1)砂
4.黒褐色(10Y3/1)粘質土(中世遺物包含層)
5.オリーブ褐色(5Y3/2)粘質土(古墳～中世遺物包含層)
6.黄褐色(10Y5/6)砂質土(地山層)

第７図　春日遺跡　遺構検出状況（上）平面図および断面図（下）

耳原遺跡

所 在 地　茨木市南耳原二丁目445－１、85－２
調査原因　倉庫建設事業
調査期間　平成17年４月１日～平成17年６月14日
調査面積　1,123㎡
調査担当　宮本　賢治



位置図

調査結果

耳原遺跡は、三島平野を南北に流れる安威川によって形成された扇状地の氾濫低地や丘陵部、台地に立地している。段丘部においては地形分類によると下位段丘に分類される。また、当調査地は安威川と佐保川(茨木川)の間に形成された舌状の台地上に位置する場所である。

今回の調査地は耳原遺跡の南限と五日市東遺跡の北限との中間にあたる、遺跡包蔵地の空白地の箇所であった。試掘調査を実施した結果、中世の遺物を含む包含層や地山層上面におけるピット状遺構を検出した事から本発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序については、第１層から第11層に大別する事ができる。上層より順に、現代の盛土層(約1.2ｍ～1.8ｍ、撹乱など、以前の既存建物の基礎構造物を含む)、旧耕土(約10cm)、床土(約５cm)、オリーブ褐色(5YR4/4) 砂質土(約４cm)、褐色(10YR4/6) 砂(約10cm)、オリーブ褐色(2.5Y4/6) 砂質土(約10cm 中世遺物包含層)、オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質土(約８cm 古代～中世遺物包含層)、黄褐色(2.5Y5/3) 砂に黒色(7.5Y2/1)砂粒混じる(約８cm)、にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト(約30㎝)、褐色(10YR4/4)と橙色(5YR6/8)砂質土の混合土(約20㎝ 縄文時代晩期遺物包含層)、暗灰黄色(2.5Y5/2)砂(約26㎝ 地山層)に分けられる。

検出遺構

第１遺構面においては、調査区の全域において中世の鋤溝を多数検出している。この鋤溝のほぼ９割は東西方向のものが検出されている。第２遺構面においては、小動物の足跡遺構を多数検出した。

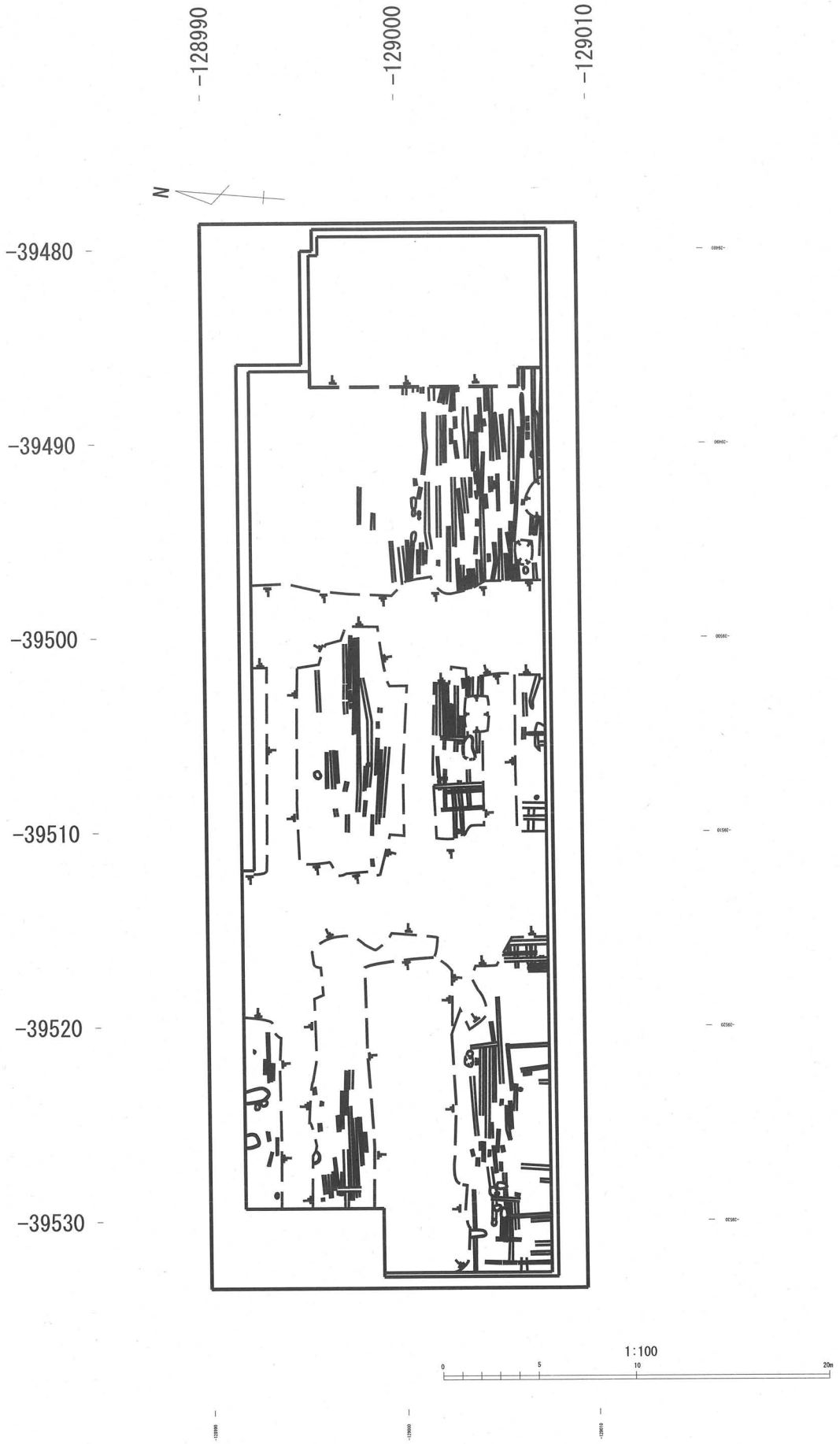
第３遺構面(最終遺構面)においては、縄文時代晩期のピット状遺構や土坑状遺構、溝状遺構、不明遺構を検出している。

出土遺物

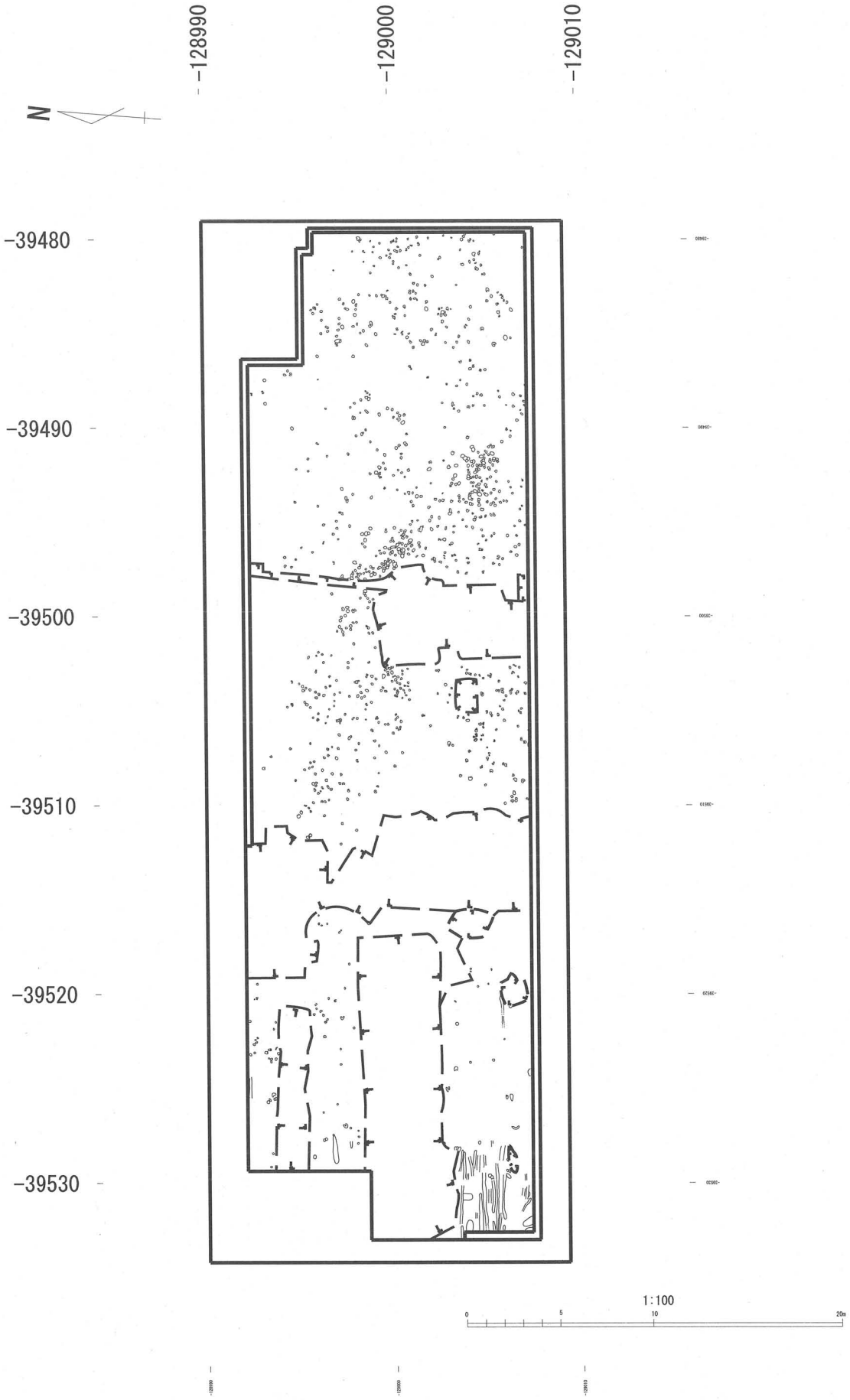
遺物の出土量は、コンテナパッドに5箱であった。その内訳は、第1・第2遺構面を中心とした古代から中世の遺物の量が半数を占めた。代表的なものに、盛りつけ用の三足土器や須恵器の坏身などである。また、第3遺構面において今回の調査で特筆すべき遺物は、縄文時代晩期の浅鉢の口縁から体部にかけて破片が見つかった事である。これは、青森県の土器の編年標識にもなっている縄文時代後期から晩期にかけて文化が広まった亀ヶ岡文化の亀ヶ岡式土器の文様の様式と類似した点が見られる。亀ヶ岡式土器の土器様式は広く近畿圏内にまで広がっていたため、茨木のこの地においても人々との交流や土器などの物の交換といった事が行われていたものだと考えられる。この他の遺物には、第3遺構面の上層にあたる縄文時代晩期の遺物包含層内において、石槍を含む石器が数点出土している。

まとめ

今回の調査は試掘調査の結果、縄文時代晩期の遺跡包蔵地の存在が新たに分かった事からもその意義は大きい事と考えている。特に、縄文時代晩期の遺物および遺構を検出できてその遺構の性格から耳原遺跡の南東限の広がりが認められた事がいえる。また、今回の調査でちょうど調査区の東半部から遺構は認められず、植物遺体層が全体に広がっていた事から生活域とその東半部の低湿地帯との境あたりが検出した事が伺えるのではないかと考えている。今後の周辺での調査の成果を期待したい。



第８図　　耳原遺跡　第１遺構面平面図

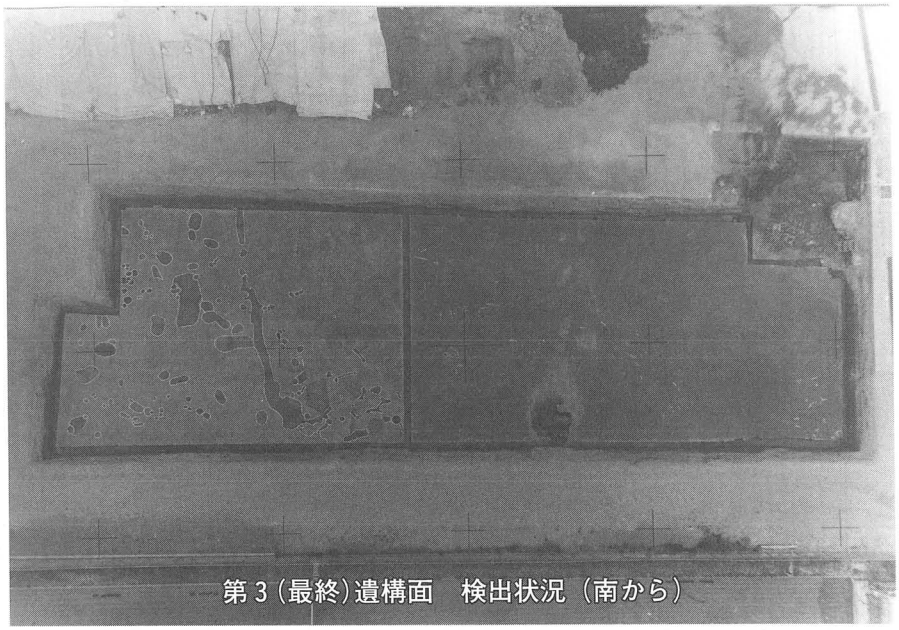


第９図　　耳原遺跡　第２遺構面平面図

第10図　　耳原遺跡　第３(最終)遺構面平面図

第１遺構面　検出状況（東から）

第２遺構面　検出状況（北から）

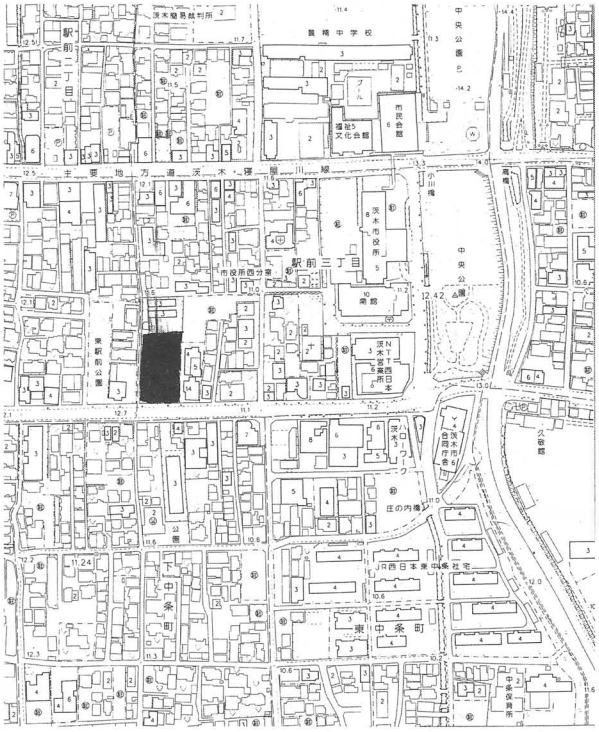


第３（最終）遺構面　検出状況（南から）

第11図　　耳原遺跡　第１～３遺構面

中条小学校遺跡

所 在 地　茨木市駅前三丁目435－1
調査原因　倉庫兼事務所建設
調査期間　平成17年4月19日～平成17年6月3日
調査面積　512㎡
調査担当　宮脇　薫
調査結果



位置図

当該地は、中条小学校遺跡の北端部と駅前遺跡南半部に挟まれた地域である。

調査地の土層は、盛土が約40～45㎝、耕土約25㎝、床土5～10㎝、約15㎝ の中世～近世の遺物を含む褐色土の包含層があり、井戸、柱穴、土坑等の遺構が黄色土上で検出された。

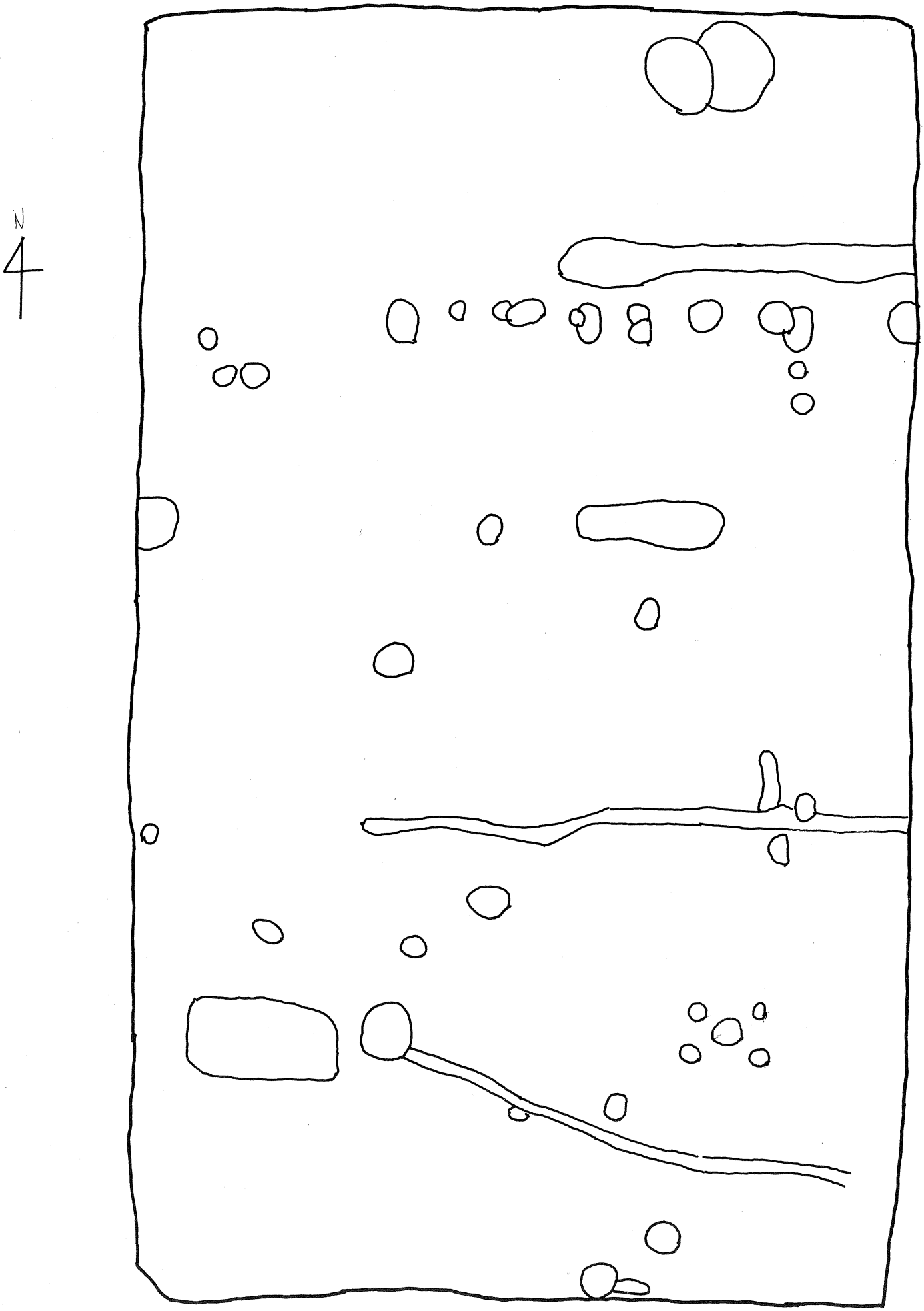
井戸は2基検出された。井戸-1は調査の関係から一部分の検出である。径が約1.25ｍ、深さ約1ｍの円形状の素堀りの井戸である。井戸内及び堀方から遺物は出土しなかった。

井戸-2は、長径2.7ｍ、短径約2.45ｍ、深さ1.73ｍの楕円形の井戸である。井戸枠として造られた大形の瓦が1段に4枚使われ、底から2段組まれていた。井戸内の出土遺物から近世に掘られて使用されていたと考える。

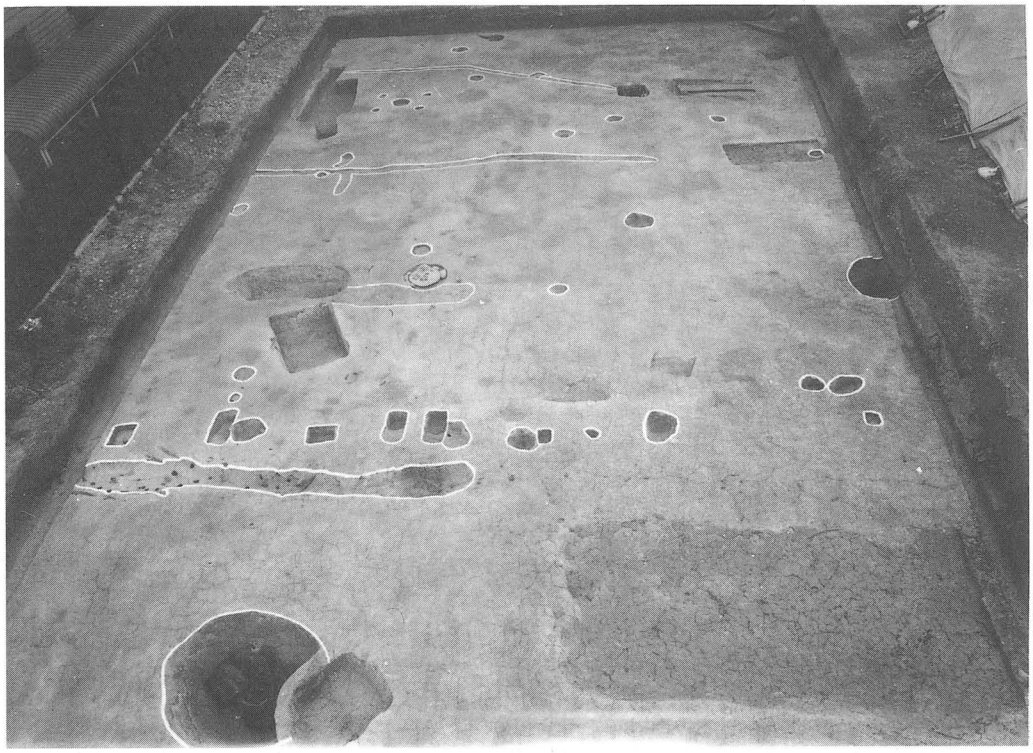
柱穴は径が大きい方では約35㎝のもの、小さい方では約20～30㎝の柱穴が検出された。柱穴より瓦器、土師器、陶器片が出土している。

土坑-1から派生した状態で溝-1が検出された。溝の堆積土から瓦器、土師器、陶器片が出土している。

遺構内から出土した遺物は中世末～近世の集落の北端にあたり、一時的に利用されたにすぎず、その後再び田等の耕作に利用されたものと考えられる。



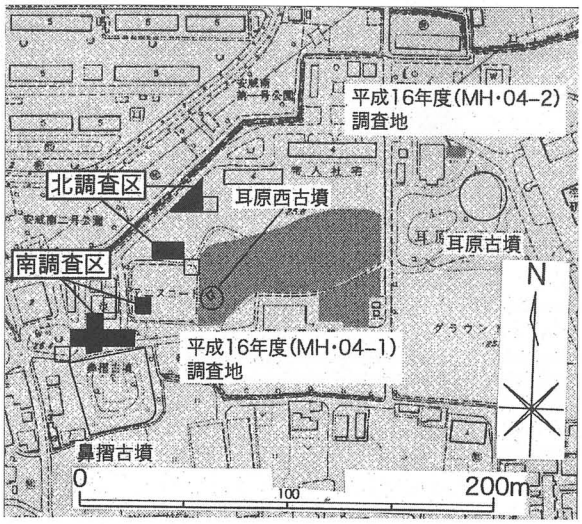
第12図　　中条小学校遺跡遺構図



上：（北から）　　下：（南から）
第13図　中条小学校遺跡発掘状況

耳原遺跡

所在地　茨木市耳原三丁目地内
調査原因　土壌改良工事に伴う掘削工事事業
調査期間　平成17年４月26日～平成17年７月21日
調査面積　1,400㎡
調査担当　宮本　賢治



位置図

調査結果

耳原遺跡は、三島平野を南北に流れる安威川によって形成された扇状地の氾濫低地や丘陵部に立地している。

今回の調査地については、平成16年度の調査をおこなった耳原遺跡(MH04-1)および耳原西古墳墳(MHN04-1)(新発見)の調査地のすぐ西に隣接した場所である。その昨年度の調査においては、耳原遺跡では平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡が検出された。また、耳原西古墳については６世紀後半頃のものと考えられる横穴式石室を伴った円墳や５世紀後半頃のものと思われる円筒埴輪、金製環やガラス小玉といった遺構・遺物を検出した。

この調査地の一部の場所については、６世紀から７世紀にかけての時期に築造されたものと考えられる鼻摺古墳の方墳のすぐ北側の調査であった。

調査方法として、今回は土壌改良工事に伴う掘削工事という事から１区画100㎡の調査地をその対象の場所において、合計14箇所をそれぞれ調査していく事にした。ただし、土壌改良の必要な箇所において遺跡の包蔵地のある場所まで深さが達していない箇所については、本発掘調査をおこなわず保存する形を採る事とした。

なお、今回の調査の地区割りとして北から順にＡ地区～Ｇ地区を北調査区、Ｈ地区～Ｎ地区を南調査区とした。

基本層序

北調査区における基本層序については、第１～５層に大別する事ができる。上層より順に、盛土層(約１ｍ60cm)、旧耕土(約10cm)、にぶい黄褐色(10YR4/3、約20cm)、砂質土（約10cm)、黒褐色(10YR3/1)、粘質土(約16cm)、褐灰色(10YR5/1)、粘土(地山層）に分ける事ができる。

南調査区における基本層序については、第１～４層に大別できる。上層より順に、盛土層(約１ｍ30cm)、褐色(10YR4/4)、砂礫(約10～30cm)、にぶい黄褐色(10YR4/3)、砂質土(約10cm、遺物包含層)、褐色(7.5Y4/6)、粘質土(地山層)となる。ただ、両調査区にいえる事は、それぞれの時代とともに後世の撹乱を受けている。

検出遺構

遺構は、地山層の残存する地区が北調査区においてはA、B、C、E、F地区で、また南調査区においてはH、K、N地区にて遺構を検出した。この他の地区に関しては、撹乱などの影響を受け、遺物は出土しているが遺構は検出できなかった。北地区においては、いつの時期の遺構かは現段階では不明であるが、暗渠や土取り坑と考えられる遺構や、溝や円形周溝遺構(不整形遺構)などを検出した。暗渠に関しては、幅約2cm、深さ約5cmの規模の溝の底に木樋を敷きその上に小石を敷き詰めた状態で検出された。暗渠と土取り坑と考えられる遺構の切り合い関係に関しては、土取り坑が暗渠を切っている。また、C地区の土取り坑の東側において、土留めをしたと考えられる石がいくつも出土している。南調査区においては、溝や柱穴、ピット状遺構などを検出した。

出土遺物

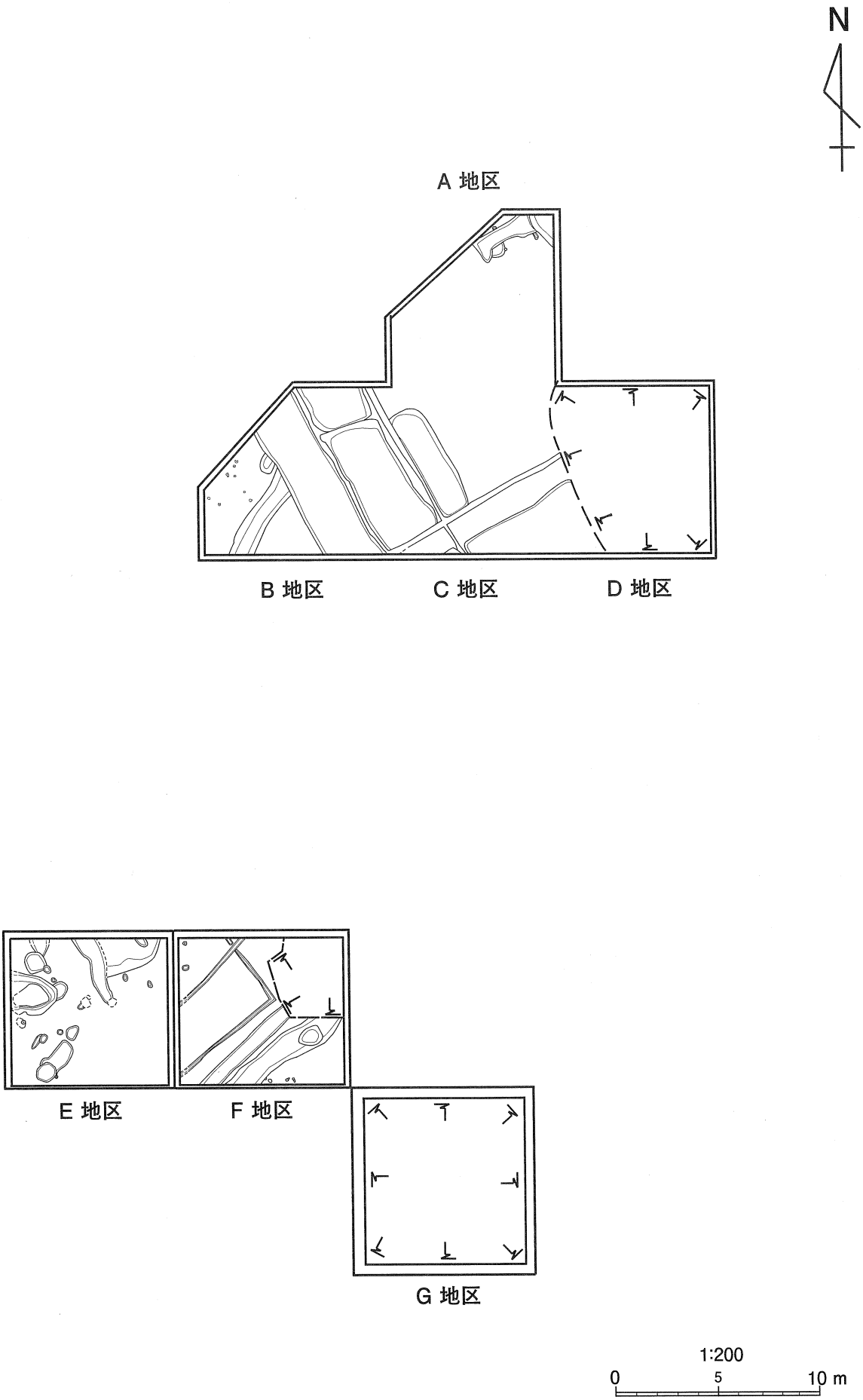
コンテナに3箱の出土量であった。先程も述べたように、いくつかの時代ごとに撹乱や削平を受けており出土した土器は様々である。北調査区においては、弥生土器の壷の破片や須恵器、土師器といったものや、陶磁器や近世のものと考えられる面子などが出土している。また、南調査区においては、須恵器や土師器に加え、古墳時代の須恵器の台付き有形壷の一部が出土している。

まとめ

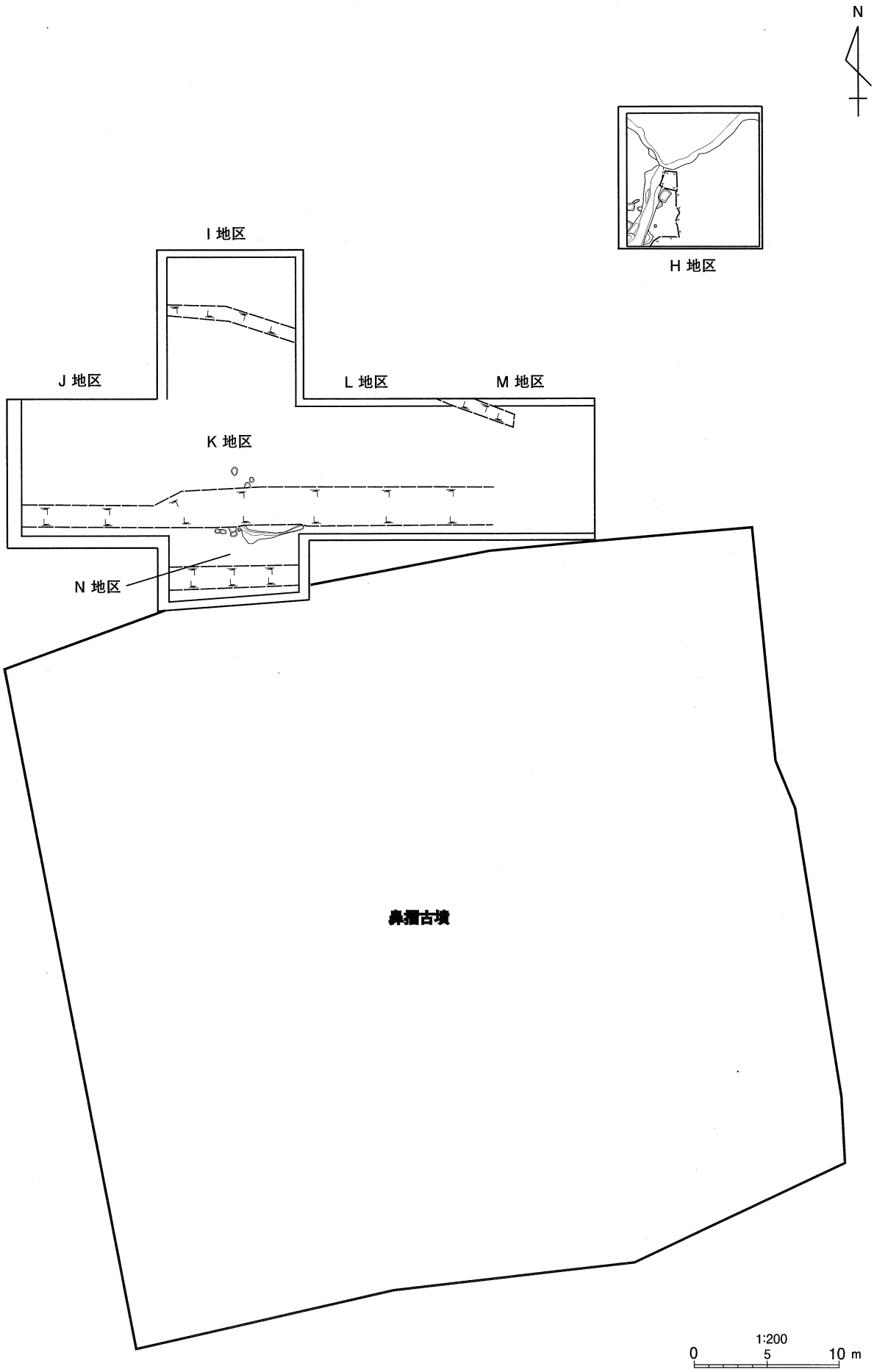
今回の調査の結果、北調査区からは、灌漑や排水などに利用した水路と考えられる暗渠や土取り坑、溝といった遺構を複数基検出した。また、南調査区からは、後世の撹乱を大きく受けている事もあるが、溝やピット状遺構など数は少ないながらも検出できた。今後の周辺の調査および成果に期待したい。

参考

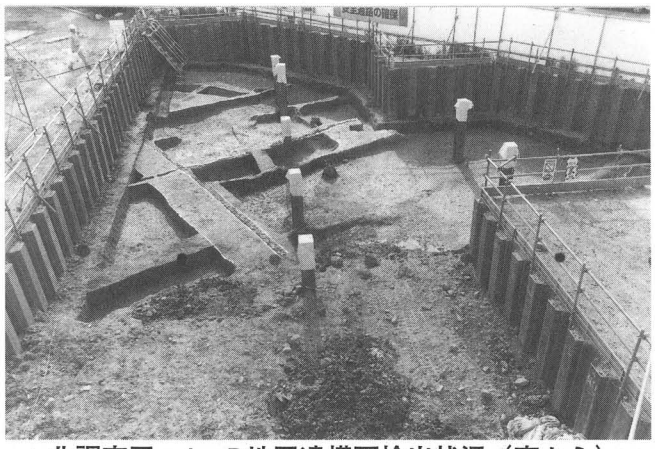
茨木市教育委員会編「平成16年度発掘調査概報」平成17年3月



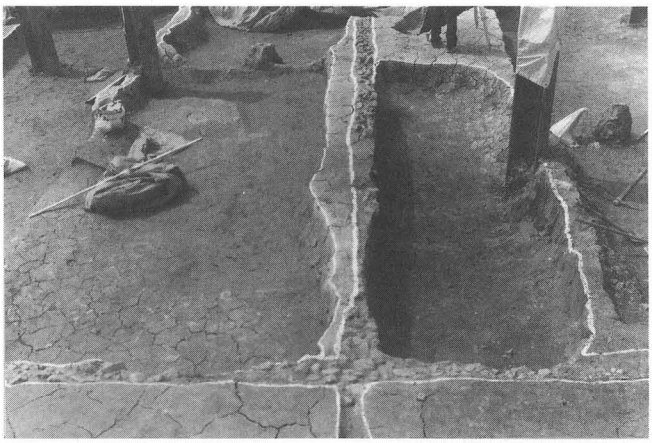
第14図　耳原遺跡　北調査区遺構平面図



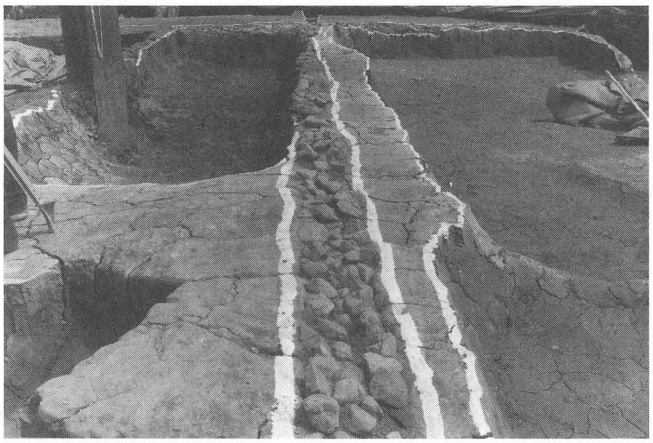
第15図　耳原遺跡　南調査区遺構平面図



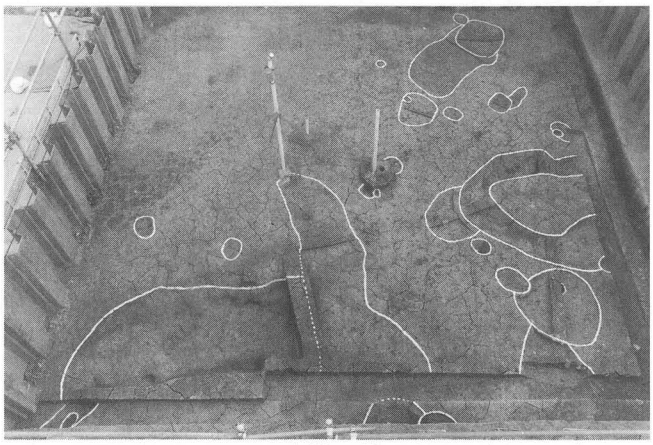
北調査区　A～D地区遺構面検出状況（東から）



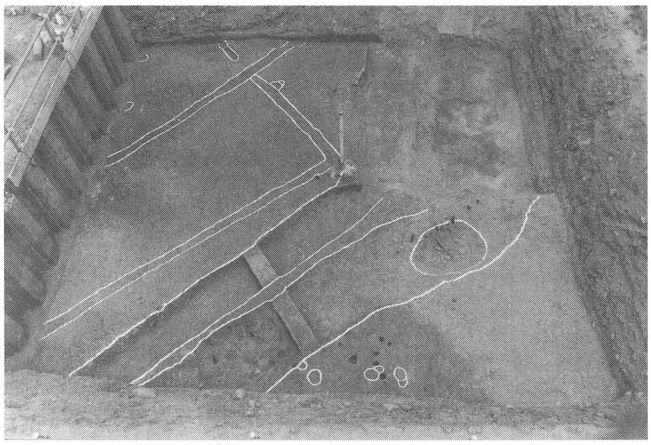
北調査区　C地区内暗渠検出状況（南から遠景）



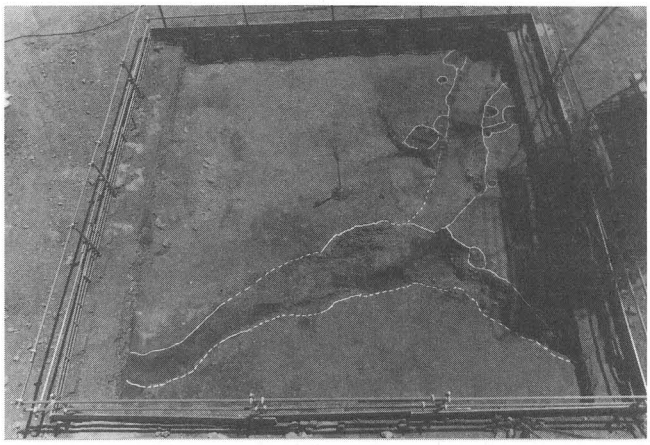
北調査区　C地区内暗渠検出状況（北から近景）



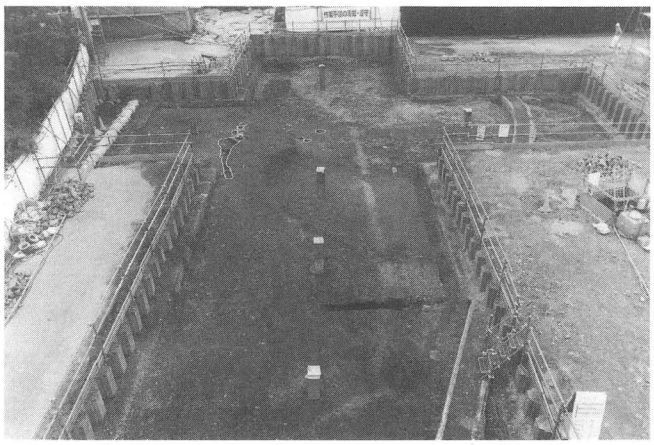
北調査区　E地区遺構面検出状況（北から）



北調査区　F地区遺構面検出状況（南から）



南調査区　H地区遺構面検出状況（北から）



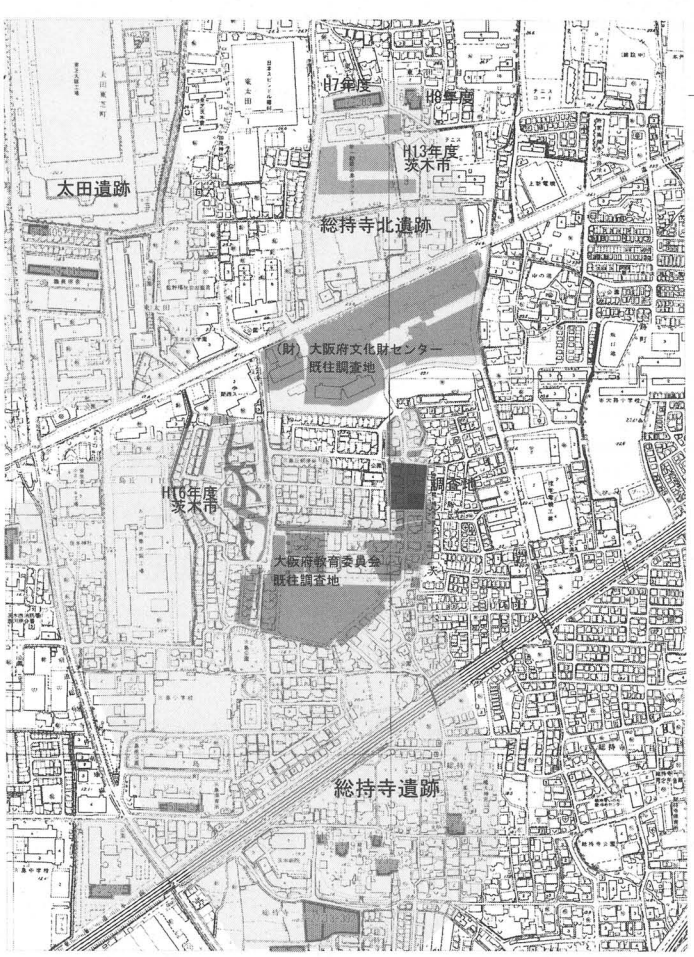
南調査区　I～N地区遺構面検出状況（東から）

北調査区より耳原西古墳を望む（北西から、中央下はG地区）

第16図　耳原遺跡　北・南調査区遺構面検出状況

総持寺遺跡

所 在 地　茨木市三島丘二丁目
216-２、233-３他
調査原因　宅地造成事業
調査期間　平成17年５月９日
～平成17年６月29日
平成17年10月12日
～平成17年10月21日
調査面積　681㎡
調査担当　黒須　靖之
調査結果



位置図　0　1:10,000　400m

総持寺遺跡は北摂山地から派生した下位段丘状の「富田台地」と呼ばれる上に立地している。この富田台地は南東に向かって緩く傾斜しながら大きく舌状に張り出し、東西約2㎞、南北約2.5㎞の広大な段丘面を形成し、標高は15～30ｍを測る。遺跡の西側には比高５～６ｍの段丘崖を介して安威川が造りだした沖積地が広がり、東側は女瀬川・芥川が開折し、同じく南側には沖積平野が広がる。総持寺遺跡は安威川左岸の富田台地の南西部分に位置する。遺跡の範囲は東西約450ｍ、南北約750ｍに及び、古墳時代から古代・中世に至る一連の当地域を考慮すると、総持寺北遺跡との関連性が強く伺えることから、総持寺北遺跡をその領域に含めると、南北に約1.2㎞の遺跡範囲となり、その遺跡総面積は約43万㎡にも及ぶ。

さらに、上記の理由から太田遺跡や太田廃寺を含めるとその領域(太田茶臼山古墳は除く)は約91万㎡にもなり、富田台地が約500万㎡であることから、その広さが伺える。(この数字は埋蔵文化財包蔵地の広さの目安として掲示した。)

総持寺遺跡が立地する富田台地上の遺跡には、古墳時代になると三島地域を代表する多くの著名な古墳が数多く築造される。前期には全長80ｍの前方後円墳の郡家車塚古墳、前方後円墳の闘鶏山古墳、中期には台地の奥部に石山古墳・中期中葉～後半の全長226ｍを測る太田茶臼山古墳(継体天皇陵)や高槻市に所在する後期前半の全長190ｍを測る今城塚古墳のように巨大な前方後

円墳が築造されている。そしてこれら大古墳に主として埴輪を供給した新池埴輪製作遺跡が存在する。

総持寺遺跡においても新池窯産の埴輪を伴った方墳を主体とする中期の古墳群が存在する。さらに飛鳥・奈良時代の律令制下においては、それまで『日本書紀』雄略9年の条にも「三島」と謳われたこの地域は、大化の改新を経て奈良時代には嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の3郡に編成される。

現在の高槻市と茨木市境は本遺跡の東側に隣接しており、少なからず古代の郡界によって影響されていることは明らかである。編成後は概ね高槻市側を嶋上郡、茨木市側が嶋下郡になっていたとされる。

嶋上郡衙は富田台地の東端に所在する郡家川西遺跡に比定されている。また、嶋上郡衙跡と郡家今城遺跡からは、路面幅約10mで道路側溝を持つ古代の計画直線道路遺構が西国街道に沿って検出され、平城京を基点とする古代山陽道とみられている。

なお、嶋下郡衙は郡遺跡や郡山遺跡など地名から候補地が推定されているが、未だ嶋下郡衙たる確証が得られていない。嶋下郡が文書に初見されるのは和銅4年(711)のことである。この前後、太田廃寺跡が創建されており塔心礎と舎利容器一式が出土し、この地域の有力氏族の氏寺と考えられている。

平安時代になると9世紀後半に富田台地の先端部に清和天皇の蔵人頭を勤めた中納言藤原山蔭が創建したとされる総持寺が建立された。この地域は特に10世紀後半～11世紀中頃に藤原氏による摂関政治が隆盛を極めると同時に藤原氏のもとに荘園が集中した。

その後、藤原氏の勢力が衰え、摂関家領は氏神を祭る春日大社や氏寺の興福寺に荘園領主が移り、15世紀中頃まで荘園支配が続いた。摂関家や興福寺・春日大社の領地が多かったことは史料にも見られ、さらに茨木市では春日神社が多いことも藤原氏との縁が深かったことの裏付けと言えよう。

このように総持寺遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡として周知されており、これまでに大阪府教育委員会および(財)大阪府文化財センター(これより以後は府教委及びセンターと呼称する。)により大規模な発掘調査が近年実施され、総持寺遺跡の全容および富田台地を中心とする遺跡間同士の関連性などが徐々に明らかになりつつある。

当該地周辺(総持寺遺跡・総持寺北遺跡)では既にこれまで60,000㎡にも及ぶ発掘調査が実施されている。大阪府営三島丘住宅の建替えに伴い平成6(1994)～13(2001)にかけて府教委が約23,500㎡に及ぶ発掘調査を実施したのをはじめ、遺跡の北辺部を住宅・都市整備公団(現　独立行政法人都市再生機構)の住宅建設に伴い、センターが平成6年(1994)～平成9年(1997)にかけて約25,500㎡の発掘調査を実施している。また、府営住宅整備関連に伴う道路拡幅及び新設にかかる調査を平成14(2002)年度に約2,037㎡、平成15(2003)年度に約1,076㎡をセンターが発掘調査をしている。

茨木市では総持寺北遺跡北半部を平成7(1995)・8(1996)・13(2001)年度に約4,500㎡、府教委・

センター調査に隣接する総持寺遺跡北東部を平成16(2004)年度に1,860㎡ ほど発掘調査を実施している。

茨木市が実施した平成7(1995)・8(1996)年の調査では奈良時代末～平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)頃のSB(建物跡)を2棟検出している。うち1棟は総柱建物で倉庫と考えられている。

また、SK(土坑)12からは7世紀後半の須恵器杯身・蓋や土師器の羽釜・移動式竈が出土し、包含層から太田廃寺所用と見られる単弁蓮華文軒丸瓦や平瓦が出土している。

平成13(2001)年の調査でもSE(井戸)1から太田廃寺所用と見られる重弧文軒平瓦が出土している。他に同SE-1から10世紀後半頃の須恵器・土師器・緑釉陶器、SP-283からは円面硯が出土している。

検出遺構は7世紀後半頃のSE(井戸)や奈良時代末～平安時代初頭頃のSD(区画溝)で囲まれたSB群(建物跡)、平安時代後期(11世紀)のSB(建物跡)・SE(井戸)等が検出されている。SBは14棟ほど復元されており、平安時代後期の建物は1棟で他は古代7世紀後半～9世紀初頭頃に属するものとしている。

平成16(2004)年度の調査では古墳時代後期(6世紀)に属する建物跡2棟、飛鳥時代の竪穴住居跡5棟、飛鳥時代～奈良時代を中心とする建物跡16棟、柱列2条、溝、土坑、12世紀後葉～13世紀の建物跡4棟、柵列といった集落遺構が検出された。

出土遺物は須恵器・土師器が大半を占め、SA-5(竪穴住居跡)とSB-1(総柱建物)、SA-3とSB-8(大型庇付建物)といった竪穴と建物との関連性が指摘された。

また、府教委が実施した発掘調査では、弥生時代後期後半の土器棺墓・周溝墓といった墓域が段丘崖に接する屋根状地形の南先端部分に築かれ、古墳時代になると前期に尾根筋に竪穴住居主体の集落が営まれ、中期には尾根上の段丘崖を望む付近に方墳主体の総持寺古墳群が展開する。

形象埴輪の多くと円筒埴輪の一部が高槻市新池埴輪製作遺跡産と分析されている。後期にも竪穴住居主体の集落が東西の谷筋に営まれる。古代の7世紀前葉～中葉(飛鳥時代)においても引き続き竪穴住居が営まれ、古代の建物は31棟の掘立柱建物を復元し、8世紀後半から9世紀にかけて存続したものと考えられる、としている。

センターが実施した平成6(1994)～8(1996)年度の発掘調査では、古代7世紀～10世紀前半にかけてのSB(建物跡)を中心とした集落跡が展開し、断続して13世紀前後に再び中世集落として機能を開始させている。検出された遺構はSB(建物跡)が153棟、SC(柵列)が51条、他にSD(溝)・SE(井戸)・SK(土坑)などがある。集落は8～9世紀、特に9世紀後半に最盛期をむかえたであろうことが遺物の出土の傾向からうかがえる、としている。

また、集落はSD(溝)・SC(柵列)・空閑地により正方位を意識した方形の区画を基に数グループにわかれ形成されていることも指摘されている。出土遺物には硯・墨書土器・灰釉陶器・緑釉陶器・石製巡方(角型帯飾)・圏足円面硯・塼等がある。

センター平成14(2002)－1調査区では弥生時代後期、7～10世紀、12世紀後葉～13世紀の遺構が検出されている。

7世紀代の遺構は7世紀前葉～中葉頃と推定される竪穴住居7棟、7～8世紀代の遺構は復元された13棟の掘立柱建物や柱列を主としてSD(溝)、落込み等が調査区南部で確認されている。

10世紀代の遺構は調査区南部の小規模なピット群で、12世紀後葉～13世紀の遺構は柵や溝、柱穴等を調査区北部や北端部で検出したとされている。

出土遺物は弥生時代後期の壷・高坏や古墳時代後期の包含層出土の須恵器坏、7～8世紀代の遺物は調査区全域で普遍的に認められ出土遺物の大半を占めているとされる。

ほかに古代後期～中世のものは緑釉陶器、黒色土器椀、土師器皿、瓦器椀、白磁碗等が出土している。

センター平成15(2003)-1調査区では古代を中心とするSB群(建物跡)13棟やSD(溝)・SK(土坑))等を検出している。特にSD(溝)16からは7世紀中頃の土器が多数出土し、西隣のSB(建物跡)14と主軸を同じくする。

出土遺物はほぼ7～8世紀の範疇に収まるとされ、7世紀代の遺構は調査区東部に集中し、調査区西部中央の遺構群は全体的に東部よりもやや新しい傾向を示しており、建物の方位が7世紀代には地形に規制されて西に振れていたが、より新しい時期には正方位に近いものになったことが想定できる、としている。

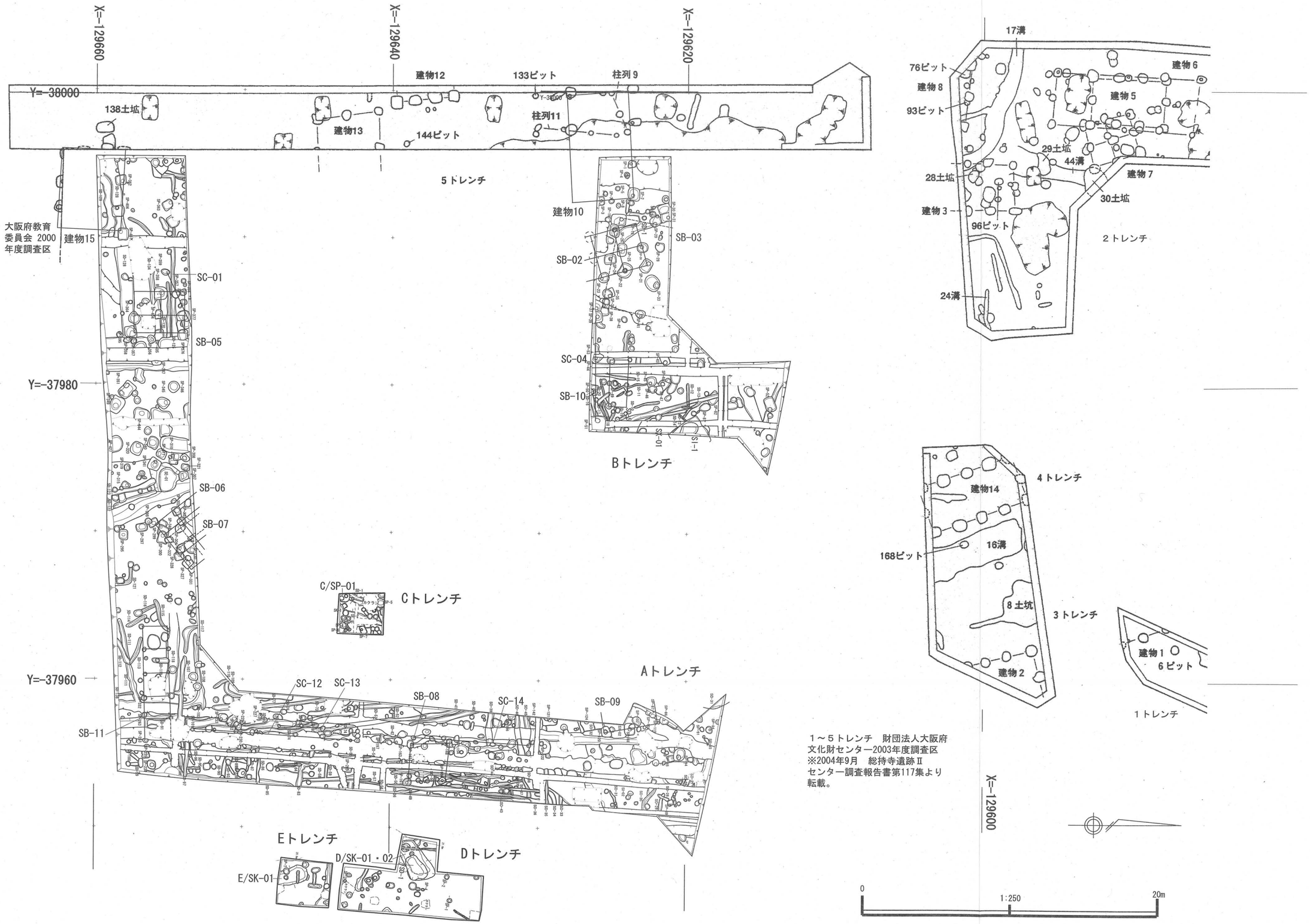
調査概要（第17図）

今回の調査は平成12(2000)年度府教委調査区および平成15(2003)年度(東部03-1)にセンターが実施した道路調査部分に隣接した区域の開発に先立ち計画道路及び地盤改良部分の発掘調査を実施した。調査区はA～Eトレンチに分かれ、A・Bトレンチは計画道路、C～Eトレンチは地盤改良部分である。

検出された遺構は掘立柱建物跡(SB)11棟(推定復元)と柱列(SC)5条、竪穴住居跡(SI)1棟、溝(SD)約110条、土坑(SK)3基、井戸(SE)1基、落込み2か所、柱穴(Pit)400～500口程である。SB11棟のうち、建物10・15は既往府教委調査区およびセンター調査区と同一遺構(遺構名はセンター03-1を使用)であり、SB10･11は11世紀(平安時代後期)以降の建物と考えられる。それ以外のSBはいずれも7世紀前半～9世紀前半頃のものと考えられる。また、SDは100条以上検出されているが、区画溝や雨落溝、耕作溝といった機能が考えられる。出土遺物はコンテナ3箱分で古代の須恵器･土師器が大半を占める。 今回の調査では遺構検出面が浅く埋設管等による撹乱を多く受けており、さらに、遺構から出土した遺物も少量であることから、遺構の性格・所属時期、特に建物跡の復元は困難であった。したがって、遺物が出土しながらも建物に出来なかった柱穴も多数あることから、さらに復元可能な建物等が存在する可能性が高いが最低限の復元に留めている。

基本層序（第18～19図）

上から表土層(第Ⅰ層)10～60cm、耕作土1(第Ⅱ層ー灰黄褐色土)10～20cm、耕作土2(第Ⅲ層ー黒褐色土)5～10cm、中世遺物包含層(第Ⅳ層ー明黄褐色シルトに粗砂少量含む。)5～15cm、古代遺物包含層(第Ⅴ層ー黒褐色土で2層に細分される。)5～20cm、地山漸移層(第Ⅵ層ー灰黄

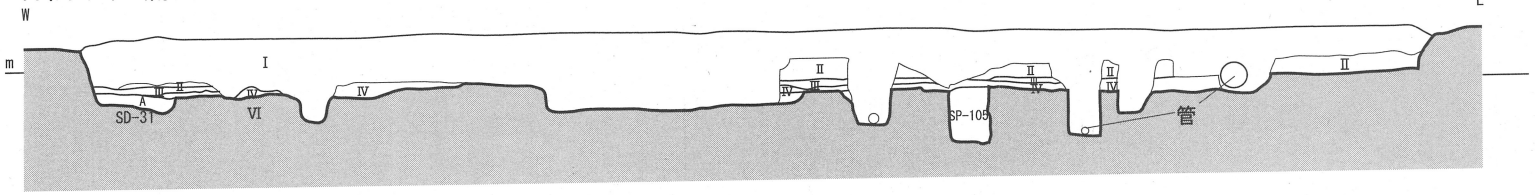


1～5トレンチ　財団法人大阪府文化財センター2003年度調査区
※2004年9月　総持寺遺跡Ⅱ
センター調査報告書第117集より
転載。

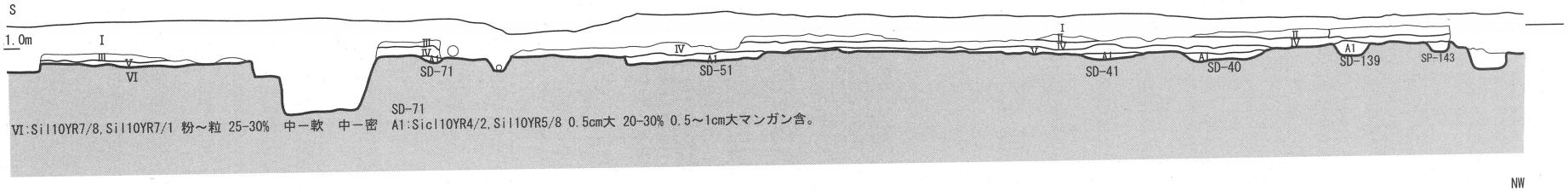
第17図　　総持寺遺跡(SJ05-01)調査区全体図

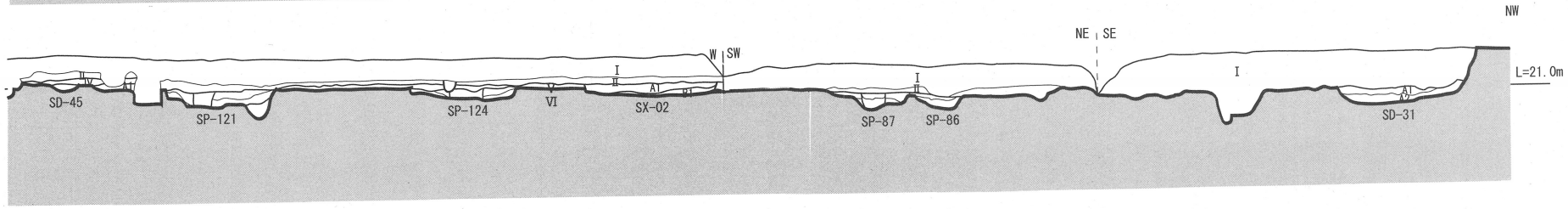
第18図　総持寺遺跡（SJ05－1）調査区断面図（1）

Aトレンチ（南北）北壁断面図

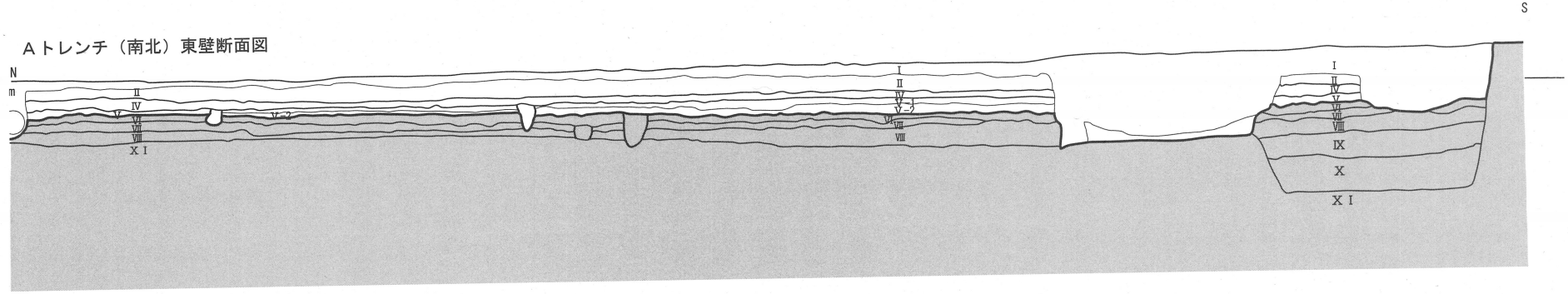


Aトレンチ（南北）西壁断面図

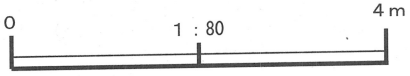




Aトレンチ（南北）東壁断面図

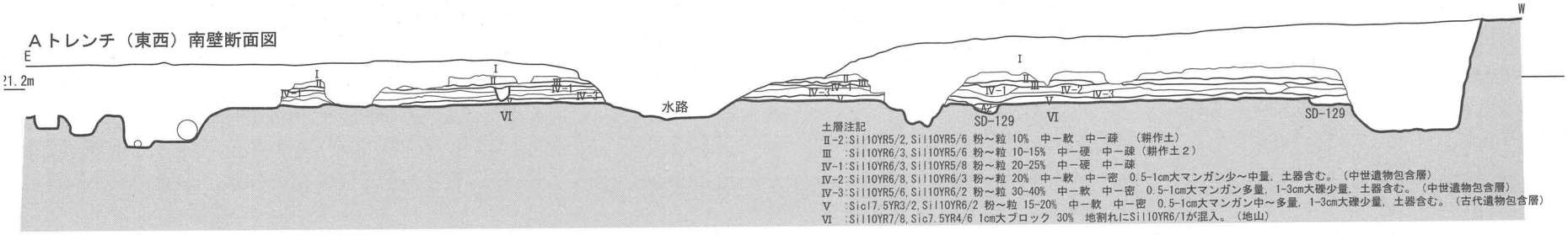


基本層序
Ⅰ:表土（盛土）
Ⅱ:Sicl10YR5/2(耕作土)
Ⅲ:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/6 1cm大 20-30% 中一硬 中一密。(耕作土２)
Ⅳ:Sil10YR6/6,Sil10YR5/6 ～0.5cm大 10-15% 硬 密 ～0.05cm大白色粒少～中量, ～0.5cm大炭化物尾およびマンガン少量含む。土師器皿出土。（中世遺物包含層）
Ⅴ-1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/6 粒～0.5cm大 15-20% 硬 密 ～0.05cm大白色粒少～中量。（古代遺物包含層）
Ⅴ-2:Sicl10YR4/2,Sil10YR8/8 粉 40-50% 中一硬 密 マンガン多量に含む。（古代遺物包含層）
Ⅵ:Sil10YR5/2,Sil10YR8/8 粒 20-30% 中一軟 中一密 マンガン中～多量に含む。（地山漸移層）
Ⅶ:HC10YR8/8,HC10YR8/2 0.3～1cm大 15-20% 中一硬 密 マンガン少～中量含む。（地山）
Ⅷ:HC1oYR8/2,Sil10YR6/6 粉～1cm大 30-40% 中一硬 密 1cm大レキ少～中量含む。（自然堆積層）
Ⅸ:HC10YR8/1～8/2,HC10YR6/1 10-15% 中一硬 密 0.2～0.3cm大白色レキ少量含む。ややグライ化。（自然堆積層）

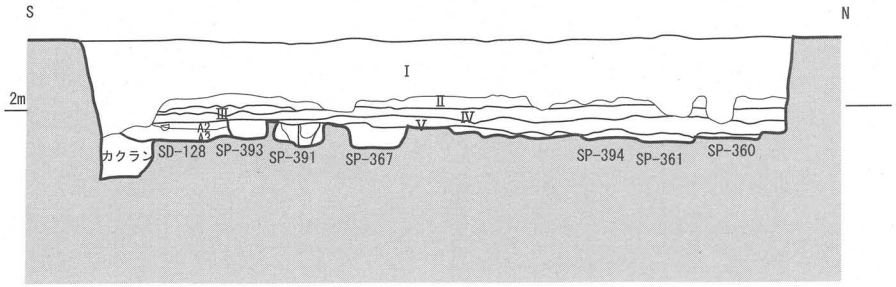


第19図　総持寺遺跡（SJ05－1）調査区断面図（2）

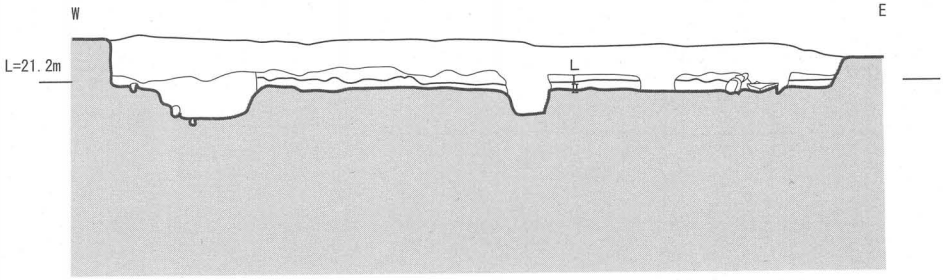
Aトレンチ（東西）南壁断面図



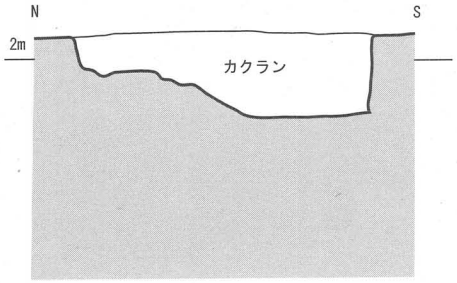
Aトレンチ（東西）西壁断面図



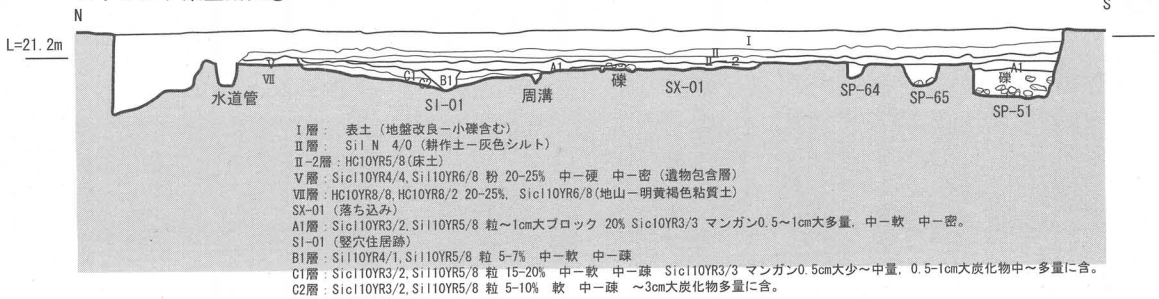
Bトレンチ北壁断面



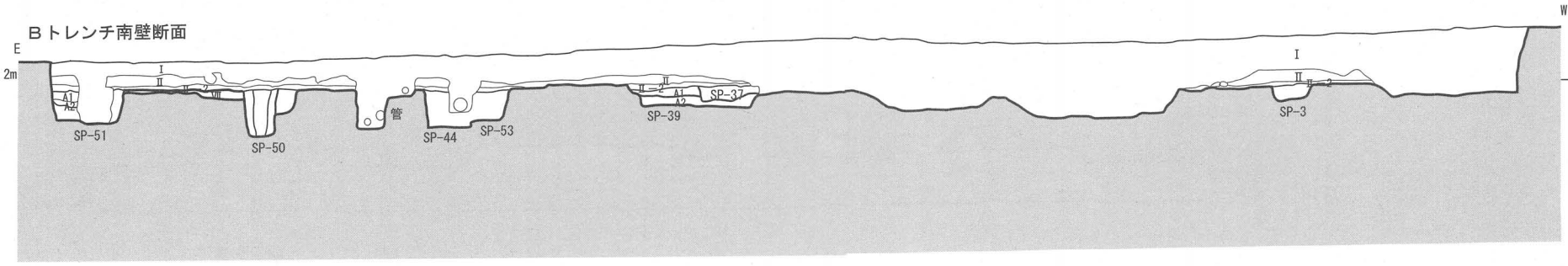
Bトレンチ東壁断面①



Bトレンチ東壁断面②



Bトレンチ南壁断面



0　1：80　4m

褐色シルト）5～15cm、地山（第Ⅶ層－黄橙色粘土）10cm、自然層（第Ⅷ層－灰白色粘土に明黄褐色シルトを含む。）5～30cm、自然層（第Ⅸ層－灰白色粘土に褐灰色粘土を含む。）30cm、自然層（第Ⅹ層－灰白色粘土に褐灰色シルトを含む。）40cm、自然砂礫層（第XI層－10cm未満の砂礫多量に含む。）Bトレンチの南北方向にのみ遺物包含層は見られず、耕作土直下が地山である。

調査区は北西から南東へ向かって地形が緩やかに傾斜しており、遺構検出面はBトレンチおよびAトレンチ西端がT.P.21.1m、Aトレンチ南東端がT.P.20.7mで比高差0.4mを測る。

また、ここで注目されるのは、Bトレンチ西側では砂礫層（第XI層）がT.P.20.7mで検出されるのに対し、Aトレンチ南東端ではT.P.19.6mで検出され、比高差は1.1mを測る。

このことは遺跡東端部に存在する南北方向の谷地形｛センター平成6（1994）～平成8（1996）年度調査｝を埋めるような形で第Ⅶ～Ⅹ層の粘土質の土砂が徐々に堆積していった様相を呈するものである。

さらに等高線も東側の谷地形に沿うような形であることも裏付けとなろう。遺構の掘込面もⅦ～Ⅹ層にはないことから7世紀代には、ある程度谷筋が埋没し、この辺りまではなだらかな地形を呈していたことが伺える。

検出遺構（第17・20～31図）

遺構は前述のとおり、7世紀前半（飛鳥時代）～9世紀前半頃（平安時代前期）の掘立柱建物跡（SB）群を主とした構成の集落跡と11～12世紀代（平安時代後期）の集落がある。

出土遺物を中心に埋土・主軸等を考慮した結果、7世紀代の遺構は、SI（竪穴住居跡）-01、SX（落込み）-01、SB（建物跡）-2・6・7・9、SC（柵列）-01、SE（井戸）-01、SK（土坑）-D1・2、E1、SD（溝跡）-5・40・41・51・76・122・123・129等が考えられる。

8世紀～9世紀前半頃の遺構はSB-3・5・8・建物10・15、SC-04、SD-1・36・42・85・97・118・125・128・130等が考えられる。

11～12世紀代の遺構はSB-10・11、SC-12～14、SD-97・107・117・121等が考えられる。

竪穴住居跡

竪穴住居跡はBトレンチ北側に1棟検出され、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN34°Wで1辺2.0～2.3mを測り、一部に周溝が見られるが柱穴はない。重複関係は落込み（SX-01）より古く、埋土はC層のみで黒褐色土に多量の炭化物を含む。床面までの深さは10～20cmと浅く、床面は中央部分がややくぼむ。出土遺物は7世紀後半頃の須恵器坏蓋・甕・土師器片等がある。

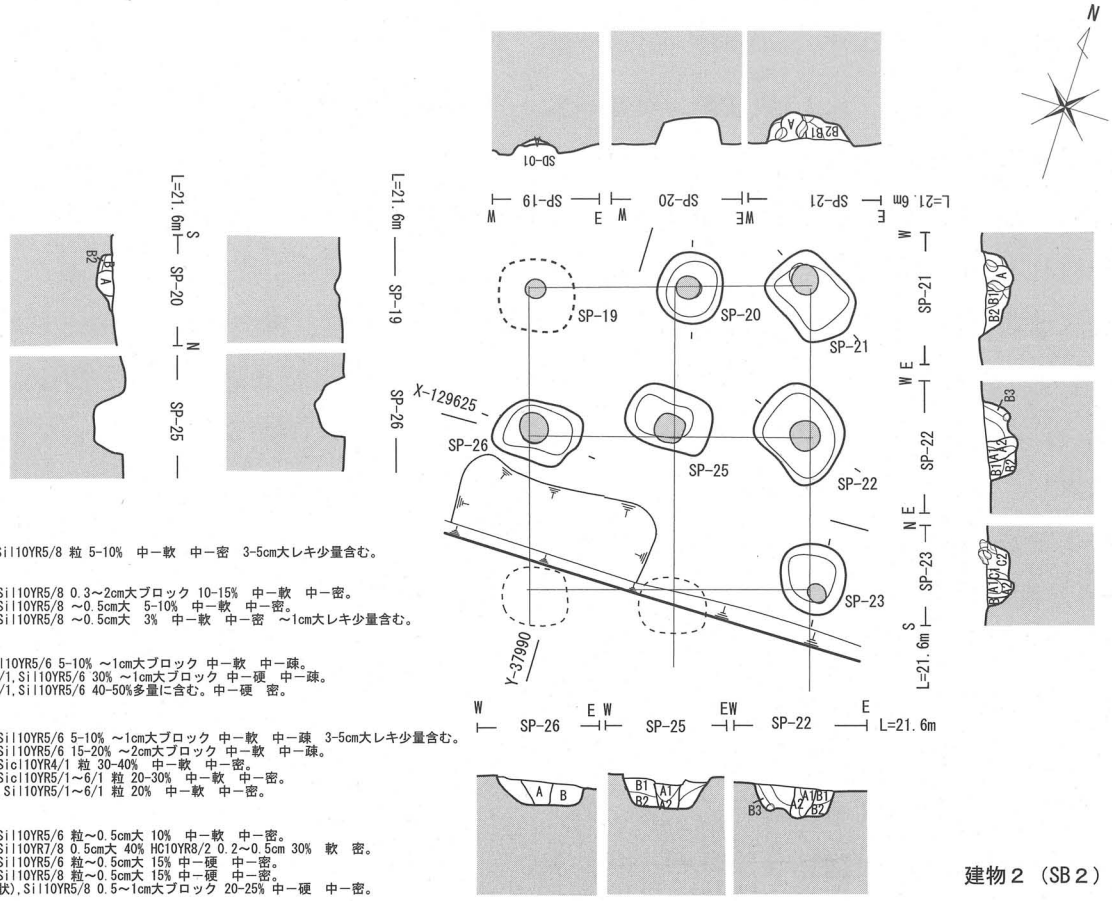
建物跡・柵列

建物跡（SB）は復元できるもので11棟、柵列（SC）は5条を数える。

SC1（第23図）は2間～で主軸はN65°Eである。規模は4.0m～、柱の掘方は方形で長軸0.6m、短軸0.4～0.5mで柱痕跡は直径0.2m、柱の深さは0.2～0.3mを測る。

SB5（SP356B・377）に切られる。SP357B・359からは土師器甕、416からは刀子の中茎が出土している。

SB2（第20図）は2間×3間～（南北棟）の総柱で主軸はN16°Wである。平面規模は3.0m×3.3m～、



SP-19
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 粒 5-10%　中ー軟　中ー密　3-5cm大レキ少量含む。

SP-20
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 0.3～2cm大ブロック 10-15%　中ー軟　中ー密。
B1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 ～0.5cm大　5-10%　中ー軟　中ー密。
B2:Sicl10YR3/1,Sil10YR5/8 ～0.5cm大　3%　中ー軟　中ー密　～1cm大レキ少量含む。

SP-21
A1:HC10YR4/1,Sil10YR5/6 5-10% ～1cm大ブロック 中ー軟　中ー疎。
B1:HC10YR4/1～5/1,Sil10YR5/6 30% ～1cm大ブロック 中ー硬　中ー疎。
B2:HC10YR4/1～5/1,Sil10YR5/6 40-50%多量に含む。中ー硬　密。

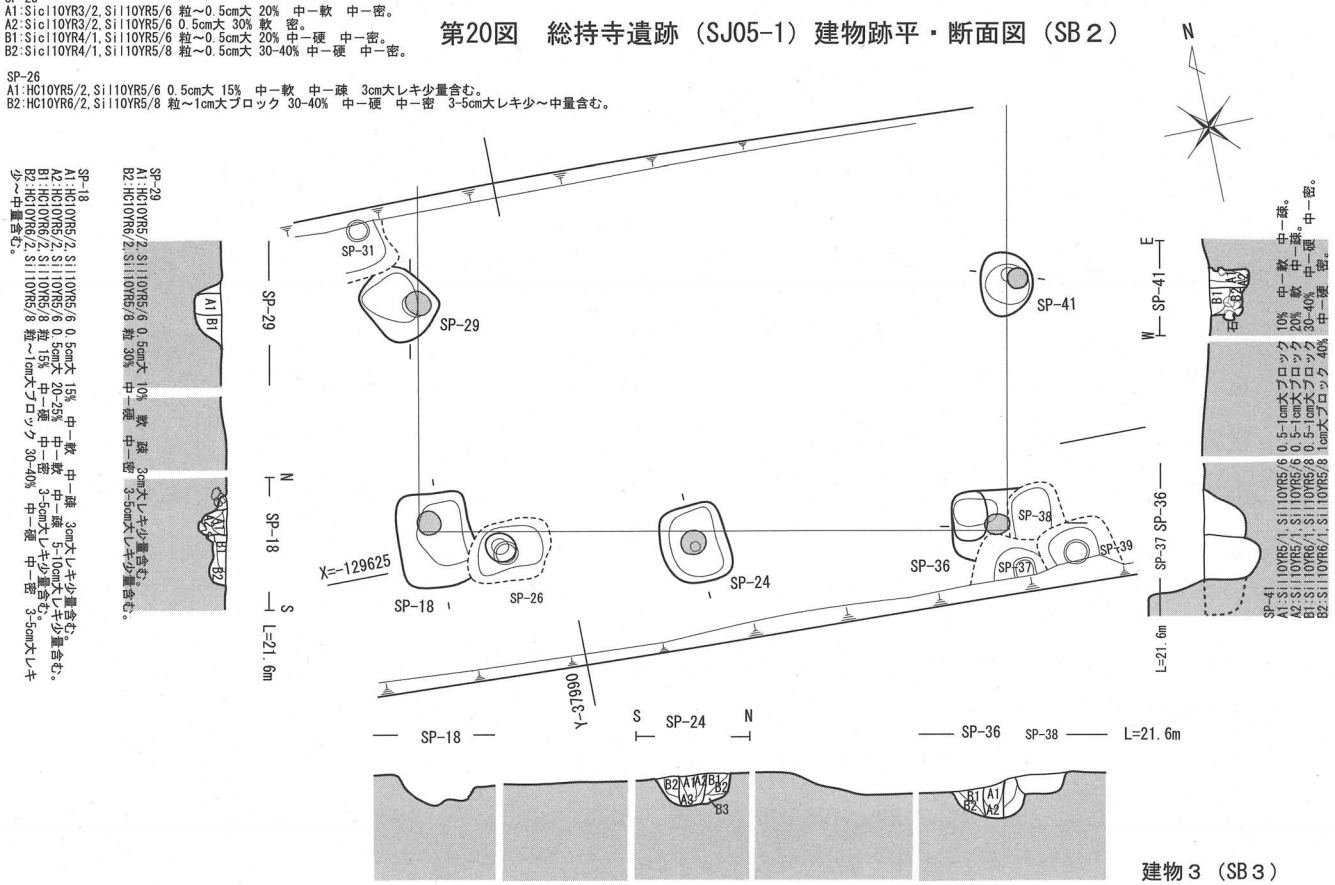
SP-22
A1:Sicl10YR4/1,Sil10YR5/6 5-10% ～1cm大ブロック 中ー軟　中ー疎　3-5cm大レキ少量含む。
A2:Sicl10YR4/1,Sil10YR5/6 15-20% ～2cm大ブロック 中ー軟　中ー疎。
B1:Sicl10YR4/6,Sicl10YR4/1 粒 30-40%　中ー軟　中ー密。
B2:Sicl10YR4/6,Sicl10YR5/1～6/1 粒 20-30%　中ー軟　中ー密。
B3:Sicl7.5YR2/3,Sil10YR5/1～6/1 粒 20%　中ー軟　中ー密。

SP-23
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/6 粒～0.5cm大 10%　中ー軟　中ー密。
A2:Sicl10YR3/2,Sil10YR7/8 0.5cm大 40% HC10YR8/2 0.2～0.5cm 30%　軟　密。
B1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/6 粒～0.5cm大 15% 中ー硬　中ー密。
C1:Sicl10YR3/3,Sil10YR5/8 粒～0.5cm大 15% 中ー硬　中ー密。
C2:HC10YR4/1(層状),Sil10YR5/8 0.5～1cm大ブロック 20-25% 中ー硬　中ー密。

SP-25
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/6 粒～0.5cm大 20%　中ー軟　中ー密。
A2:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/6 0.5cm大 30%　軟　密。
B1:Sicl10YR4/1,Sil10YR5/6 粒～0.5cm大 20% 中ー硬　中ー密。
B2:Sicl10YR4/1,Sil10YR5/8 粒～0.5cm大 30-40% 中ー硬　中ー密。

SP-26
A1:HC10YR5/2,Sil10YR5/6 0.5cm大 15%　中ー軟　中ー疎　3cm大レキ少量含む。
B2:HC10YR6/2,Sil10YR5/8 粒～1cm大ブロック 30-40%　中ー硬　中ー密　3-5cm大レキ少～中量含む。

第20図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物跡平・断面図（SB２）



SP-18
A1:HC10YR5/2,Sil10YR5/6 0.5cm大 15%　中ー軟　中ー疎　3cm大レキ少量含む。
A2:HC10YR5/2,Sil10YR5/6 0.5cm大 20-25%　中ー軟　中ー疎。
B1:HC10YR6/2,Sil10YR5/8 粒 15%　中ー硬　中ー密。
B2:HC10YR6/2,Sil10YR5/8 粒～1cm大ブロック 30-40%　中ー硬　中ー密　3-5cm大レキ少～中量含む。

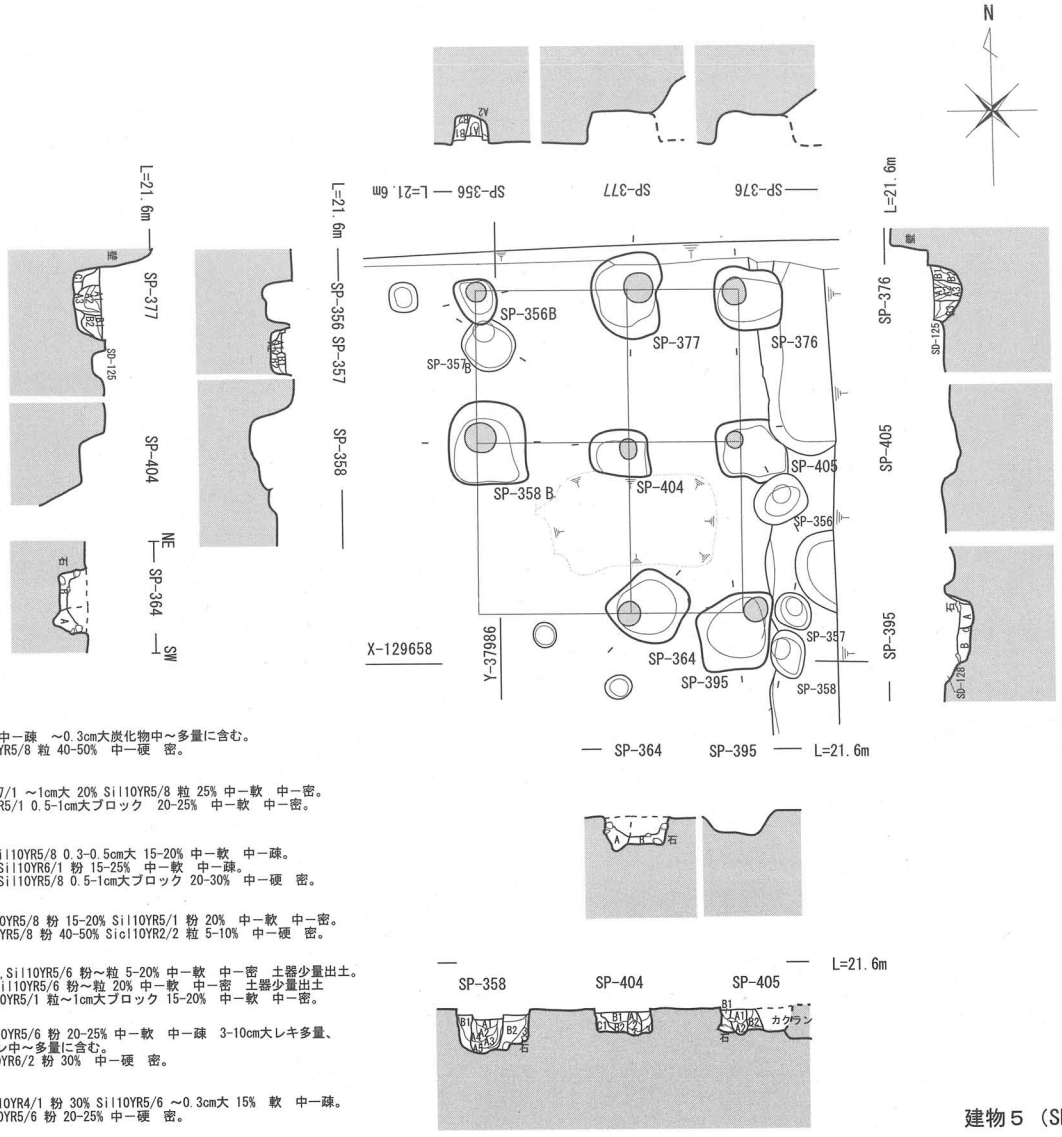
SP-29
A1:HC10YR5/2,Sil10YR5/6 0.5cm大 10%　軟　疎　3cm大レキ少量含む。
B2:HC10YR6/2,Sil10YR5/8 粒 30%　中ー硬　中ー密　3-5cm大レキ少量含む。

SP-41
A1:Sil10YR5/1,Sil10YR5/6 0.5-1cm大ブロック 10%　中ー軟　中ー疎。
A2:Sil10YR5/1,Sil10YR5/6 0.5-1cm大ブロック 20%　軟　中ー疎。
B1:Sil10YR6/1,Sil10YR5/8 0.5-1cm大ブロック 30-40%　中ー硬　密。
B2:Sil10YR6/1,Sil10YR5/8 1cm大ブロック 40%

SP-24
A1/2:Sicl10YR3/2,Sil10YR6/8 1cm大ブロック 10%　軟　疎
A3:Sicl10YR3/2,Sil10YR6/8 1～3cm大ブロック 30%　軟　中ー疎。
B1～3:Sil10YR6/8 ブロック（B2ー1cm大炭化物やや多く含）

SP-36
A1/2:Sicl10YR3/2,Sil10YR6/8 0.5-1cm大ブロック 10-20%　軟　疎
B1/2:Sil10YR6/8,Sicl10YR3/2 -0.5cm大 10-15%　中ー硬　密

第21図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物跡平・断面図（SB３）



建物５（SB５）

SP-356
A:Sicl10YR2/1,軟　中一疎　～0.3cm大炭化物中～多量に含む。
B:Sil10YR6/2,Sil10YR5/8 粒 40-50%　中一硬　密。

SP-364
A:HC10YR4/1,HC10YR7/1 ～1cm大 20% Sil10YR5/8 粒 25% 中一軟　中一密。
B:HC10YR8/1,Sil10YR5/1 0.5-1cm大ブロック　20-25%　中一軟　中一密。

SP-358
A1/5:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/8 0.3-0.5cm大 15-20% 中一軟　中一疎。
A2～4:Sicl10YR3/2,Sil10YR6/1 粉 15-25%　中一軟　中一疎。
B1～3:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 0.5-1cm大ブロック 20-30%　中一硬　密。

SP-376
A:Sicl10YR2/1,Sil10YR5/8 粉 15-20% Sil10YR5/1 粉 20%　中一軟　中一密。
B:Sil10YR5/1,Sil10YR5/8 粉 40-50% Sicl10YR2/2 粒 5-10%　中一硬　密。

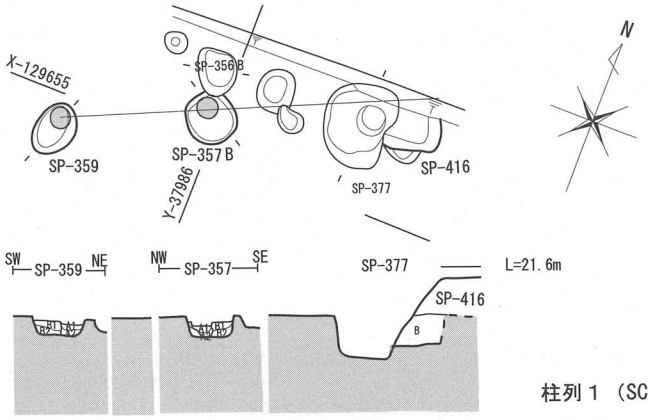
SP-377
A1～A3:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/6 粉～粒 5-20% 中一軟　中一密　土器少量出土。
B1/2:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/6 粉～粒 20% 中一軟　中一密　土器少量出土
C1:Sil10YR5/8,Sil10YR5/1 粒～1cm大ブロック 15-20%　中一軟　中一密。

SP-395
A:Sicl10YR3/3,Sil10YR5/6 粉 20-25% 中一軟　中一疎　3-10cm大レキ多量、
～0.3cm大マンガン中～多量に含む。
B:Sil10YR5/6,Sil10YR6/2 粉 30%　中一硬　密。

SP-404
A:Sicl10YR3/2,Sil10YR4/1 粉 30% Sil10YR5/6 ～0.3cm大 15%　軟　中一疎。
B:Sil10YR5/1,Sil10YR5/6 粉 20-25% 中一硬　密。
C:Sil10YR5/6。

SP-405
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR4/1 粉 20% Sil10YR5/6 ～0.5cm大 10%　軟　中一疎。
A2:Sicl10YR3/2,Sil10YR4/1 粉 10% Sil10YR5/6 ～0.5cm大 20%　軟　中一疎。
B1:Sil10YR5/1,Sil10YR5/6 粉 20-25% 中一硬　密。
B2:Sil10YR5/1,Sil10YR5/6 粉 40% 中一硬　密。

第22図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物跡平・断面図（SB5）



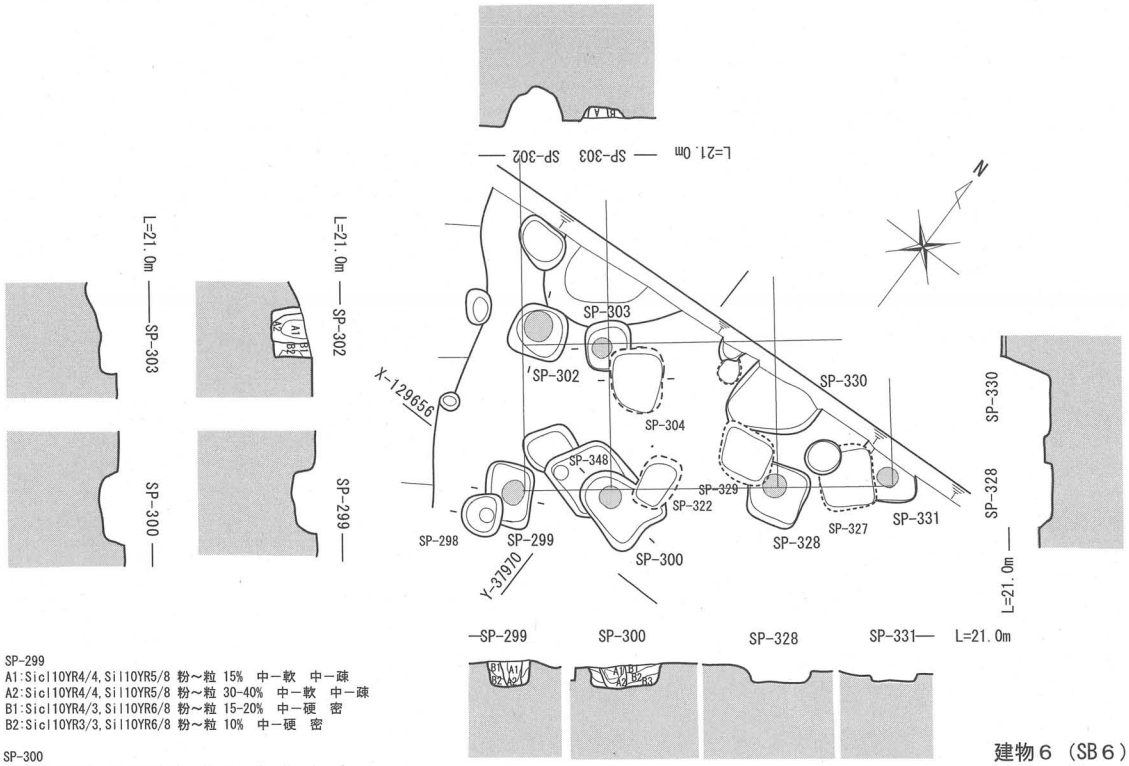
柱列１（SC１）

SP-357
A1:Sicl10YR2/1,軟　中一疎　～0.3cm大炭化物中～多量に含む。
A2:Sicl10YR2/1,軟　疎　0.3-0.5cm大炭化物中～多量に含む。
B1:Sil10YR6/2,Sil10YR5/8 粒 40-50%　中一硬　密。
B2:Sil10YR6/2,Sil10YR5/8 粒 20%　中一硬　中一密。

SP-359
A1:Sicl10YR2/1,Sil10YR4/1 粉 10-15%　軟　中一疎
A2:Sicl10YR2/1,Sil10YR4/1 粉 20%　軟　中一疎
B1:Sil10YR6/8,Sicl10YR2/2 粒 15-20% 0.5-1cm大マンガン中～多量に含
B2:Sil10YR6/8,Sicl10YR3/2 粒 20-30% 0.5-1cm大マンガン中量

SP-416
B1/2:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/6 粉～粒 20-30% 中一軟　中一密　刀子中茎出土

第23図　総持寺遺跡（SJ05-1）柵列跡平・断面図（SC1）



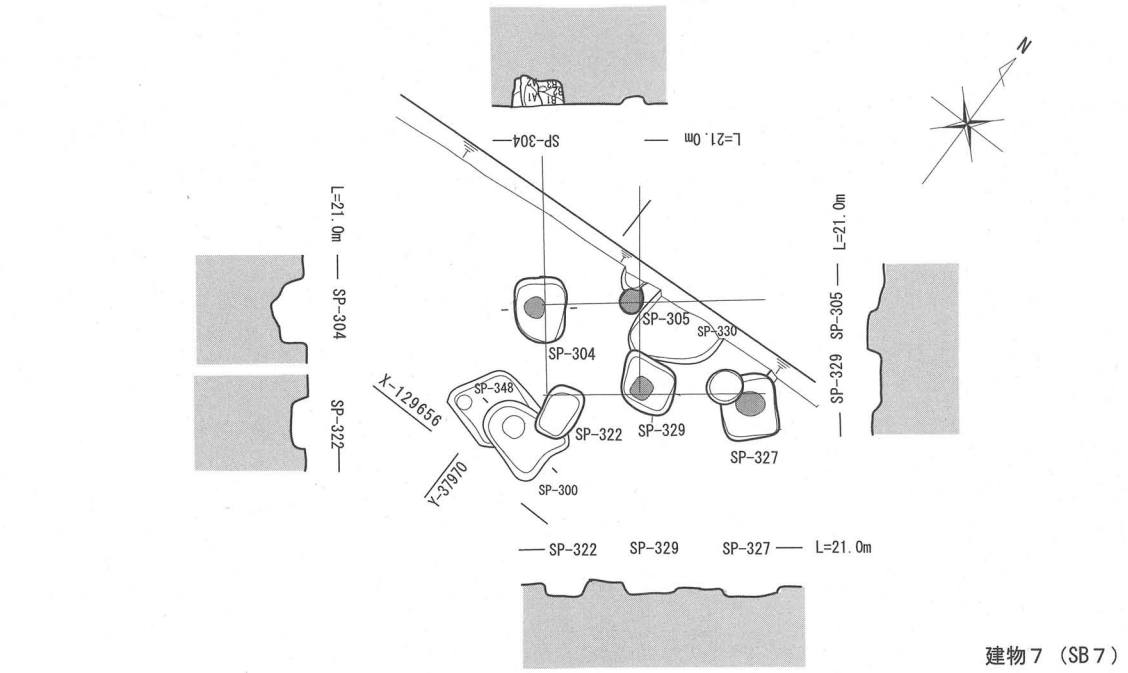
SP-299
A1:Sicl10YR4/4,Sil10YR5/8 粉～粒 15% 中一軟 中一疎
A2:Sicl10YR4/4,Sil10YR5/8 粉～粒 30-40% 中一軟 中一疎
B1:Sicl10YR4/3,Sil10YR6/8 粉～粒 15-20% 中一硬 密
B2:Sicl10YR3/3,Sil10YR6/8 粉～粒 10% 中一硬 密

SP-300
A1:Sicl10YR4/3,Sil10YR5/8 粉～粒 15% 中一軟 中一疎
A2:Sicl10YR4/3,Sil10YR5/8 粉～粒 30-40% 中一軟 中一疎
B1:Sicl10YR3/3,Sil10YR6/8 粉～粒 5% 中一硬 密
B2:Sicl10YR3/3,Sil10YR6/8 粉～粒 30-40% 中一硬 密
B3:Sicl10YR3/3,Sil10YR6/8 粉～粒 30% 中一硬 密 HC10YR8/1ブロック土 20%含

SP-302
A1:Sicl10YR4/4,Sil10YR5/8 粉～粒 15% 中一軟 中一疎
A2:Sicl10YR4/4,Sil10YR5/8 粉～粒 30-40% 中一軟 中一疎
B1:Sicl10YR4/3,Sil10YR6/8 粉～粒 15-20% 中一硬 密
B2:Sicl10YR3/3,Sil10YR6/8 粉～粒 10% 中一硬 密 Sil10YR6/1 1cm大ブロック 15%含。

SP-303
A:Sicl10YR4/1～5/1,HC10YR6/1 1-3cm大ブロック 30% 2-5cm大レキ多量に含む。
B:Sicl10YR4/1～5/1,HC10YR6/1 1-3cm大ブロック 50% Sil10YR6/8 粉 30%。

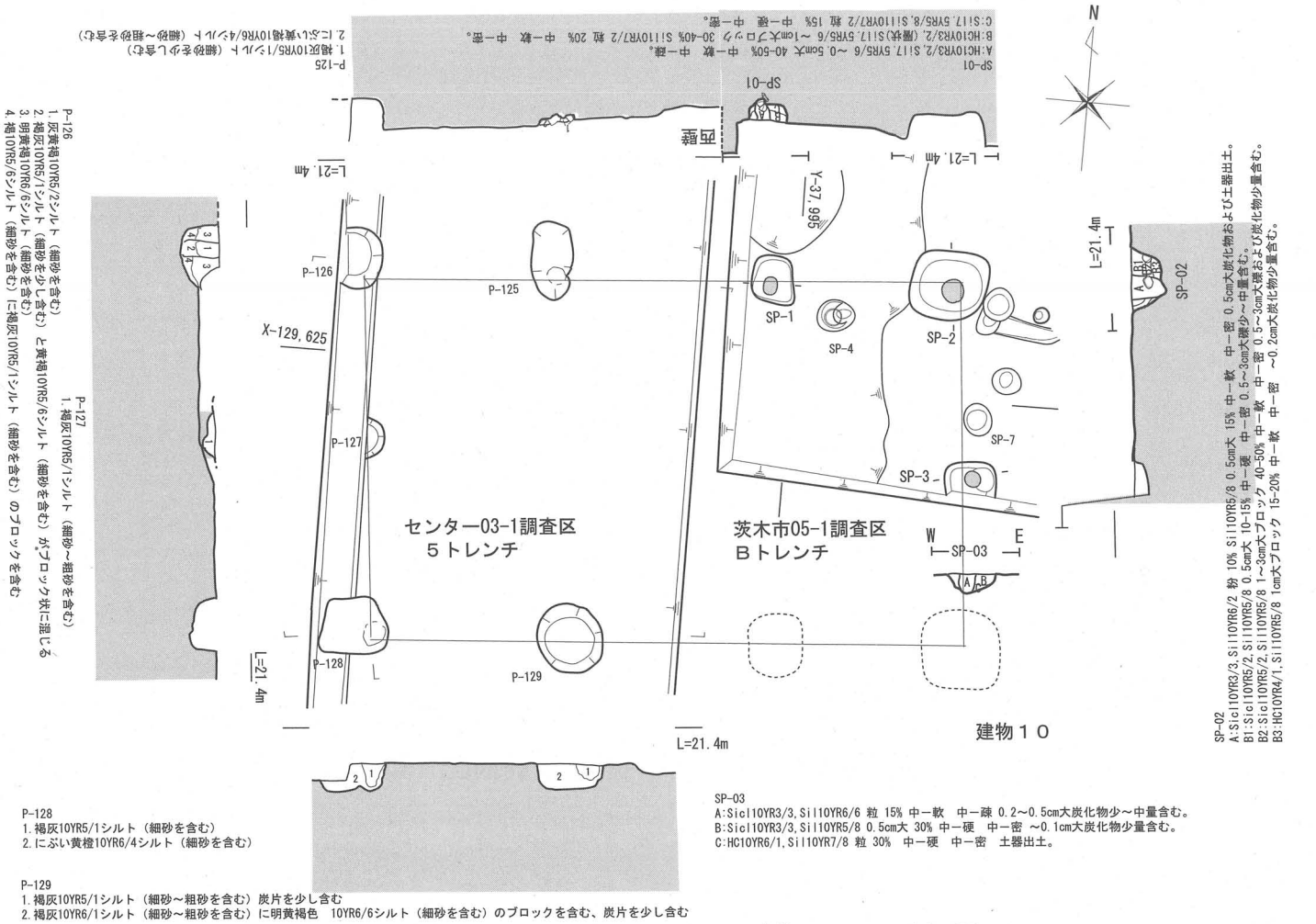
第24図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物跡平・断面図（SB６）



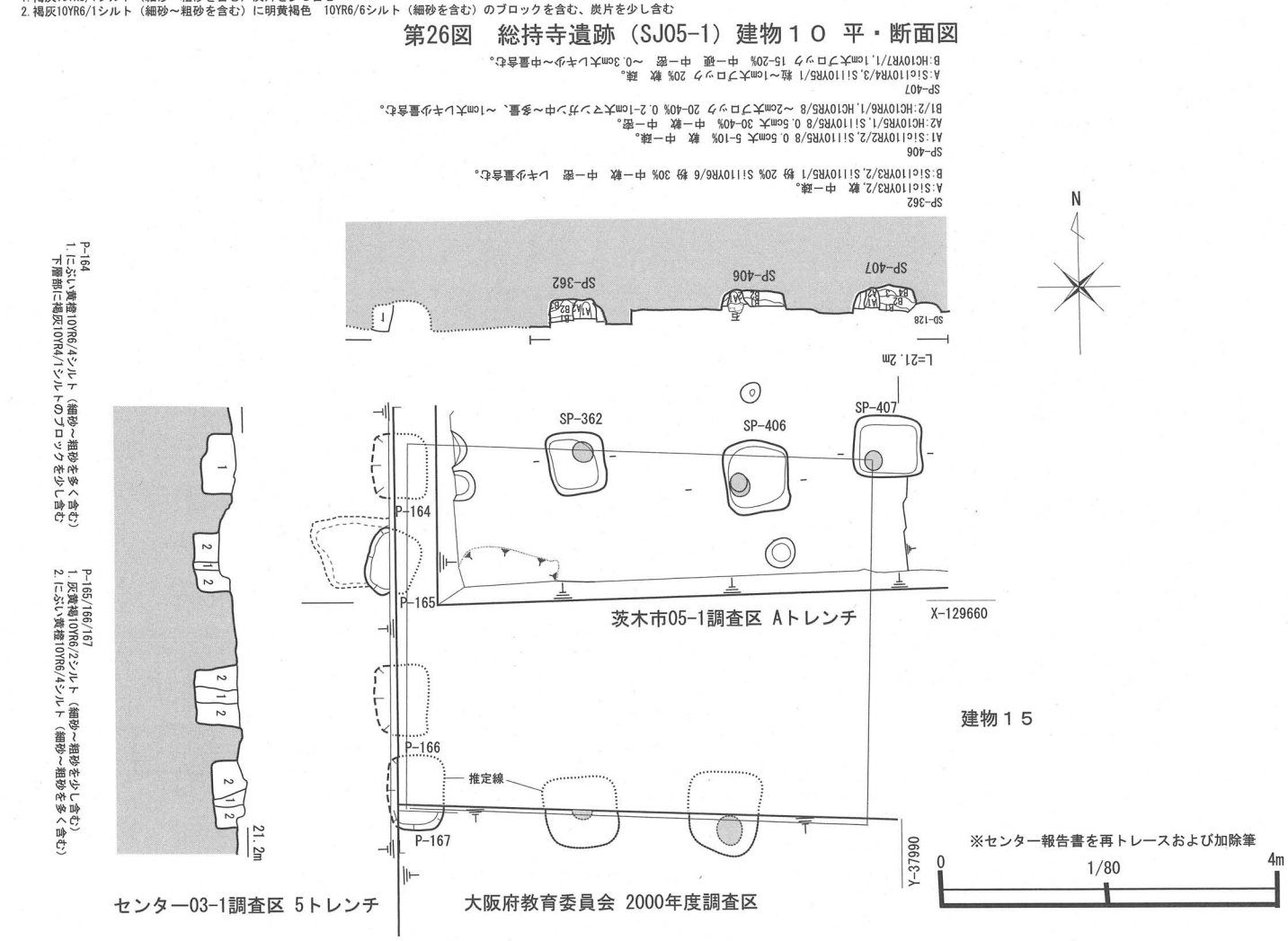
SP-304
A1/2:Sicl10YR4/3,Sil10YR5/1,粒15-20% 中一軟 中一疎。
B1:Sicl10YR4/3～3/3,HC10YR6/1 粒 20%。中一硬 中一密。5-10cm大レキ多量。
B2:Sicl10YR4/3～3/3,HC10YR6/1 粒 40-50%。中一硬 中一密。5-10cm大レキやや多い。
B3:Sicl10YR4/3～3/3,HC10YR6/1 粒 10-20%。中一硬 中一密。

0　1/80　4m

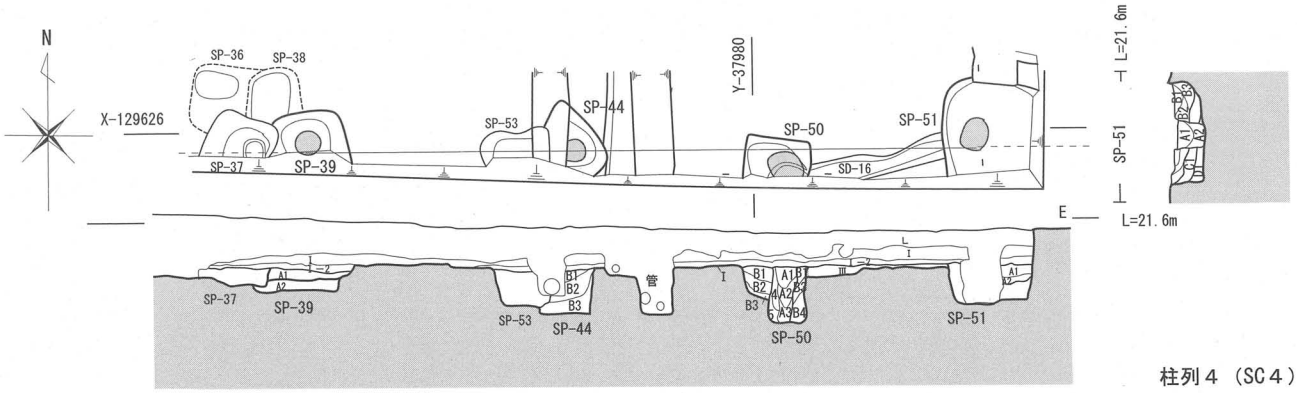
第25図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物跡平・断面図（SB７）



第26図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物１０ 平・断面図



第27図　総持寺遺跡（SJ05-1）建物１５ 平・断面図



SP-39
A1:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 0.3-0.5cm大 20% 0.3-3cm大レキ中ー多量に含，土器出土。
A2:Sicl10YR3/2,Sil10YR5/8 0.5cm大 10% 0.5-5cm大レキ中量含。

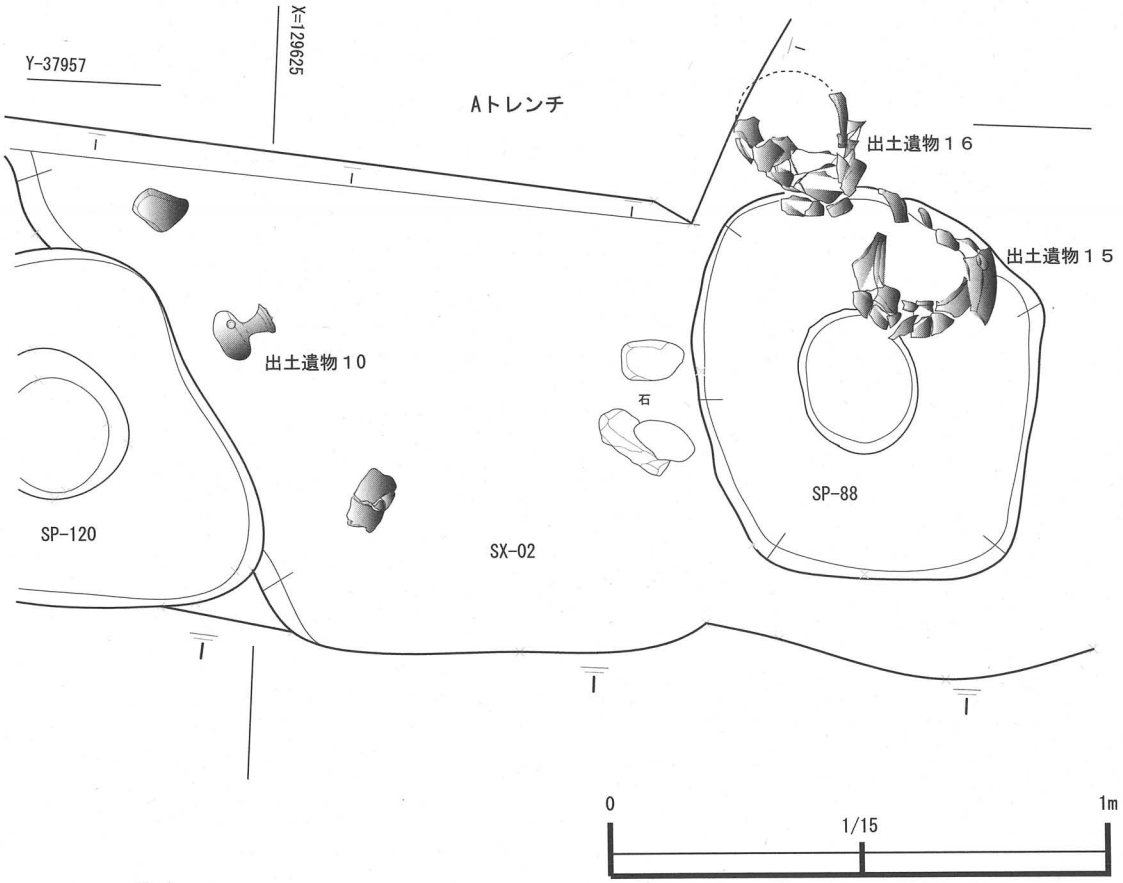
SP-44
B1:Sicl10YR4/3,Sil10YR6/8 粉 20% 中ー硬 中ー密 ～1cm大レキ中量含む。
B2:HC10YR6/8,Sil10YR4/3 粉 20% 中ー軟 中ー密 0.5cm大レキ少～中量含む。
B3:HC10YR6/8,Sil10YR4/3 粉 10% 中ー硬 中ー密。

SP-50
L3:Sil10YR4/1。
Ⅰ:Sil5Y6/2,Sicl2.5Y5/4 中ー硬 密（遺物包含層）。
A1:Sicl10YR4/3,Sil2.5Y6/8 0.3～0.5cm大 20-25% 中ー硬 中ー密 土器出土。
A2:Sicl10YR4/3,Sil2.5Y6/8 0.3～0.5cm大 15% 中ー軟 中ー密 5-10cm大レキ少量,Sil10YR7/1 粉 15-20%。
A3:Sil10YR5/1,Sil10YR7/8 1cm大ブロック 30% 軟 中ー疎。
A4:Sil10YR5/1,Sil10YR7/8 1～2cm大ブロック 20-30% 軟 中ー疎。
B1:Sicl10YR4/3,Sil10YR6/1 粉 15-20% 中ー硬 中ー密 ～1cm大レキ少～中量含む。
B2:HC10YR6/8,Sil10YR6/1 粉 10% 中ー軟 中ー密 0.5cm大レキ少～中量含む。
B3:HC10YR6/8,Sil10YR6/1 粉 5-10% 中ー硬 中ー密。
B4:Sil10YR5/1～6/1,HC10YR6/8 0.5～1cm大ブロック 30% 軟 中ー疎。

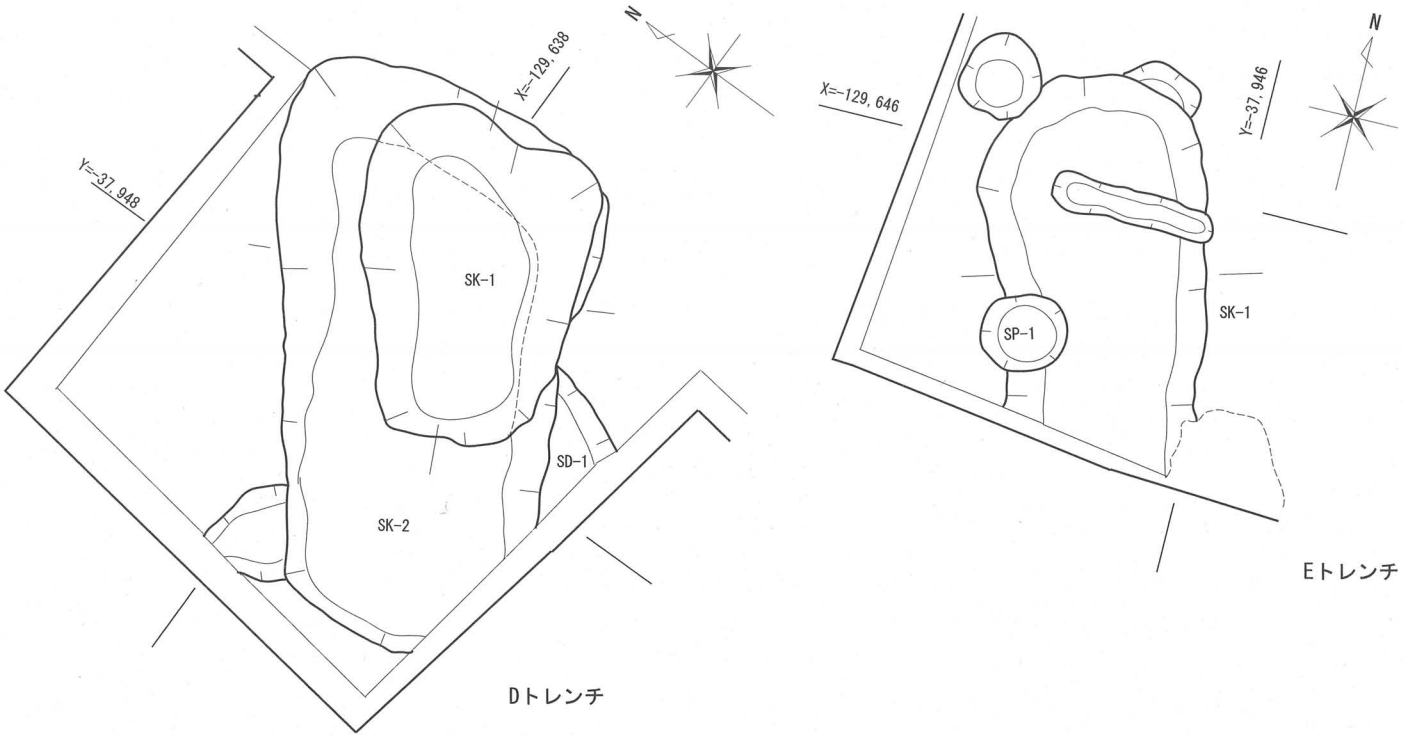
SP-51
A1:HC10YR5/1,Sil10YR4/6 粒 30% Sicl10YR3/2 粉 25% 中ー軟 密 3-5cm大レキやや多く含む。
A2:HC10YR4/1,Sil10YR6/1 粒 30% 軟 中ー密。
B1:HC10YR6/8,Sicl10YR3/2 粒 15-20% 軟 中ー密。
B2:HC10YR6/8,Sicl10YR3/2 粒 30% HC10YR7/1 粒～1cm大ブロック 25% 軟 中ー密。
B3:HC10YR6/1,Sicl10YR3/2 粒 5-10% 中ー硬 密。
C1:HCN7/0(層状),HC10YR6/1 30% 中ー硬 疎 1-3cm大レキおよび細砂多量に含む。
D1:HC10YR5/8,HC10YR6/1 1cm大ブロック 30-40% 中ー硬 密。

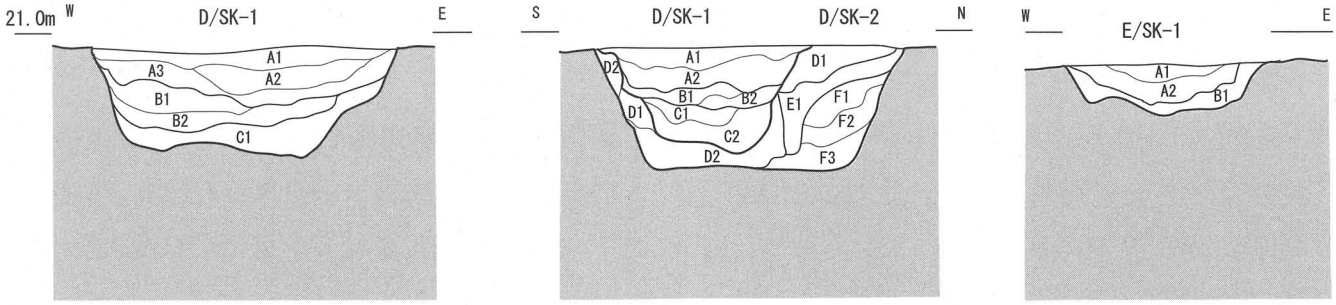
0 1/80 4m

第28図　総持寺遺跡（SJ05-1）柱列平・断面図（SC－4）



第29図　総持寺遺跡（SJ05-1）遺物出土状況図（SX-2・SP-88）





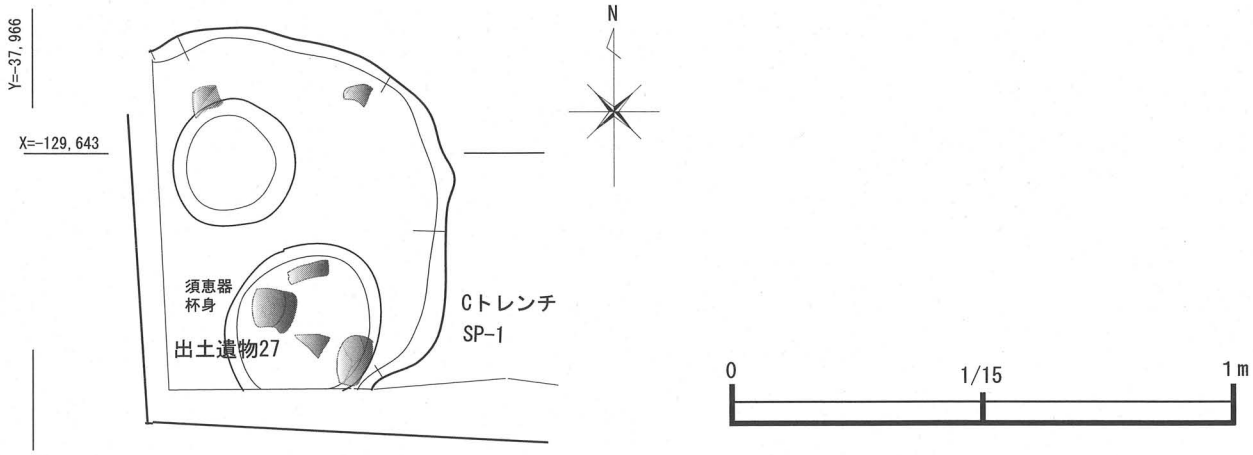
D/SK-1
A1:SicIl10YR2/2,SiI7.5YR5/8 ～3mm大 5-7% 中ー硬 密 2mm大マンガン少～中量含。
A2:SicIl10YR2/2,SiI7.5YR5/8 ～3mm大 3% 中ー硬 密 2mm大マンガン少～中量含。
A3:SicIl10YR3/2,SiIl10YR7/8 粉～1cm大 40-50% 中ー硬 密 2mm大マンガン少量含, ～0.5cm大炭化物少量含。
B1:SiIl10YR7/8,SicIl10YR5/3 粉 30% 軟 中ー密
B2:SiIl10YR7/8,SicIl10YR5/3 粉～粒 20% 中ー軟 中ー疎
C1:HCN3/0,SiIl10YR7/8 ～0.5cm大 15% 中ー軟 密
C2:HC10YR4/2,SiIl10YR7/8 ～0.5cm大 10% 軟 密

D/SK-2
D1:SicIl10YR4/3,SiIl10YR7/8 粉～粒 20-30% 中ー硬 中ー密 0.2-0.3cm大マンガン少～中量含。
D2:HC10YR2/1,HC10YR8/1 粉 30-40%,HC7.5YR6/8 1cm大 30% 軟 密。
E1:SiI2.5Y8/8,HC10YR8/1 粉 20% 中ー軟 密 ～0.3cm大マンガン少～中量含。
F1:SiIl10YR6/2～5/2,SiIl10YR8/1 ～0.5cm大 15% 中ー軟 中ー密 SiIl10YR7/8 粉 10%含。
F2:SiIl10YR6/2～5/2,SiIl10YR8/1 ～0.5cm大 20-25% 中ー軟 中ー密 SiIl10YR7/8 粉 5-10%含。
F3:SiIl10YR6/2～5/2,HC10YR8/1 ～0.5cm大 10-15% 軟 密 SiIl10YR7/8 粉 5-10%含。

E/SK-1
A1:SicIN2/0,SiIl10YR4/4 粉～0.5cm大 5-7% 軟 中ー疎。
A2:SicIN2/0,SiIl10YR4/4 粉～0.5cm大 10-15% 軟 中ー疎。
B1:HCN2/0,SiIl10YR3/3 粒 20% SiIl10YR7/8 ～0.2cm大 15% 軟 密 ～0.3cm大炭化物中量含。

0 1/40 2m

第30図 総持寺遺跡（SJ05-1）土坑平・断面図（D/SK1・2, E/SK1）



第31図 総持寺遺跡（SJ05-1）遺物出土状況図（C/SP1）

堀方長軸0.7～0.95ｍ、短軸0.6～0.9ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.3ｍ、柱の深さは0.2～0.35ｍを測る。SB3(SP18)を切る。SP20から土師器片が出土している。

SB3(第21図)は２間×１間～の南北棟で主軸はN11°Eである。平面規模は6.2ｍ×2.6ｍ～、堀方長軸0.7～1.0ｍ、短軸0.55～0.75ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.3ｍ、柱の深さは0.3×0.44ｍを測る。重複関係はSB2(SP26)に切られる。SP29から土師器片が出土している。

SC4(第28図)は３間～で主軸は正方位である。規模は7.2ｍ～、長軸不明、短軸0.7ｍ～、柱痕跡は直径0.2～0.3ｍ、柱の深さは0.2～0.6ｍを測る。重複関係はSD16を切り、SP37に切られる。SP39から須恵器坏・壷口縁部、土師器壷口縁部・皿が出土している。

SB5(第22図)は２間×２間～(南北棟？)の総柱で主軸は真北である。平面規模は2.8ｍ×3.4ｍ～、掘方長軸0.5～0.9ｍ、短軸0.4～0.6ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.33ｍ、柱の深さは0.3～0.5ｍを測る。重複関係はSC1(SP357B・416)を切る。SP356B・376から土師器片、SP377・358Bから須恵器坏身・土師器片が出土している。

SB6(第24図)は３間×１間～の総柱で主軸はN38°Wである。平面規模は4.0ｍ×1.6ｍ～、掘方長軸0.5×0.8ｍ、短軸0.5ｍ～0.6ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.3ｍ、柱の深さは0.06～0.4ｍを測る。重複関係はSB7(SP304・322・327・329)に切られる。出土遺物はない。

SB7(第25図)は２間×１間～の総柱で主軸はN38°Wである。平面規模は2.2ｍ×1.0ｍ～、掘方長軸0.6～0.7ｍ、短軸0.4～0.6ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.3ｍ、柱の深さは0.05～0.36ｍを測る。重複関係はSB6(SP300・303・328・331)を切る。SP304から土師器片、SP327から７世紀代の須恵器坏蓋・土師器片が出土している。

このことからSB7はSB6の建替えと思われる。

SB8(第17図)は１間×１間で主軸はN8°Eである。平面規模は2.6ｍ×2.5ｍ、掘方長軸0.5～0.6ｍ、短軸0.35～0.5ｍ、柱痕跡は直径0.15×0.2ｍ、柱の深さは0.3ｍを測る。重複関係はSD36を切り、出土遺物はない。

SB9(第17図)２間×？間～の東西棟で主軸はN12°Wである。平面規模は3.6ｍ×？ｍ～、掘方長軸0.75～0.8ｍ、短軸0.6～0.7ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.25ｍ、柱の深さは0.18ｍを測る。重複関係はSX(落込み)２を切り、SP88から７世紀後半以前の宝珠つまみが付く須恵器坏蓋・甕・土師器羽付長胴甕、SP120からは土師器片のほかにシジミ貝が出土している。

建物10(第26図)はセンター03-１調査区5トレンチで検出された建物と同一と思われ、２間×３間の東西棟で主軸はN84°Eである。平面規模は4.2ｍ×7.0ｍ(29.4㎡)、掘方長軸0.5～0.9ｍ、短軸0.4～0.8ｍ、柱痕跡は直径0.2～0.25ｍ、柱の深さは0.05～0.42ｍを測る。重複関係はなく、SP1・2から須恵器坏・甕片・土師器片、SP3から回転ヘラケズリの施された須恵器坏蓋・土師器片が出土している。

建物15(第27図)はセンター03-１調査および府教委平成12(2000)年度調査で検出された建物と同一と思われ、３間×３間の東西棟で主軸はN87°Wである。平面規模は、4.2ｍ×5.6ｍ(23.5㎡)、掘方長軸0.75～0.86ｍ、短軸0.6～0.8ｍ、柱痕跡は直径0.2ｍ、柱の深さは0.2～0.52ｍを測る。重

複関係はSD129を切り、SD128に切られる。出土遺物はないが、SD129出土の遺物が7世紀後葉～8世紀前葉頃、SD128出土の遺物が8世紀後半～9世紀前半頃であることから8世紀代の建物跡であることがわかる。

SB10(第17図)は1間×2間の東西棟で主軸はN88°Wである。平面規模は1.3m×3.2m(4.16㎡)、柱穴は円形で直径0.3～0.5m、柱の深さは0.1～0.16mを測り、出土遺物はない。SB11は(第17図)は1間×5間の東西棟で主軸はN88°Eである。平面規模は1.8m×7.8m～(14.04㎡ ～)、柱穴は円形で直径0.25～0.4m、柱の深さは0.15～0.2mを測り、出土遺物はない。

SC12(第17図)は6間～で主軸はN4°Eである。規模は10.7m～、間尺は1.5～2.3m、直径0.2～0.35m、深さ0.05～0.25mを測り、出土遺物はない。

SC13は2間～で主軸はN4°Eである。規模は3.0m～、間尺は1.5m、直径0.2～0.35m、深さ0.1mを測り、出土遺物はない。

SC14は6間～で主軸はN4°Eである。規模は7.8m～、間尺は1.2～1.7m、直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.26mを測り、出土遺物はない。

溝跡(第17図)

溝跡(SD)は100条以上検出されているが、大きく2つの特徴が指摘できる。

1つは方向性で、東西南北に則した溝と、北西ー南東方向に則した溝がある。

2つ目はAトレンチ東半部に鋤溝若しくは区画溝と思われる幅0.15～0.3m前後の狭い溝が集中して見られることがあげられる。しかし、D・Eトレンチでは溝の集中は見られない。

SD1はBトレンチ西側に検出された溝で、長さ4.1m～、幅0.5～1.2m、主軸はN30°W、深さ0.1～0.15m、埋土は2層で黒褐色土に黄褐色シルトを少し含む層と下層が褐灰色粘土層である。出土遺物は須恵器蓋・坏・甕・土師器高坏などで7世紀代のものと思われる。

Bトレンチ東側のSD5は長さ7.0m～、幅0.25～0.4m、主軸N15°W、深さ0.18m、埋土は2層で暗褐色土に黄褐色シルトを少し含む層と下層が灰黄褐色シルト層である。出土遺物は土師器片が出土しており、西側のSB2と主軸がほぼ同じである。

また、SD5と類似した溝がAトレンチ東側に多数検出されている。SD39・40～42・44・51・73・74・76・80～82等である。全長は長いもので10m以上あり、いずれも幅は0.2～0.4m、深さは0.1～0.2mほどで主軸はN8°W前後、埋土は黒褐色土主体である。遺物は須恵器坏・甕・土師器片等が出土しており、SD40からは須恵器甕以外に土師器鍋の把手部分が出土している。

さらに、これらやや西に傾いた溝を切って、ほぼ正方位の溝群が存在する。SD29・32・35～38・43・44・50・55～59・83～91・97・102・107・117・125・134等である。長さ・幅・深さ等の規模や埋土も黒褐色～暗褐色土主体で前述した溝群とほぼ同じである。

遺物はほぼ古代の須恵器坏・甕・土師器片等であるが、SD87・109には瓦器椀等が出土しているため、古代～中世の溝である。これら正方位を基調とする溝群とSB11・SC12・14との関連性にも注目したい。SC12・14の東側1～1.3m程あけて溝が並走することや、SB11の北側にSD107・108・117が並走し溝と建物・柵列がほとんど重複しないことから区画されていることは想像に難

くない。特に溝と柵列との空間は路であった可能性が高いと認識している。

Aトレンチ西端のSD128は全長12.3m～、幅0.75～1.0m、主軸N83°E、深さ0.12～0.18mを測る。埋土はA・B層の2層でA層は黒褐色土に黄褐色シルトを少し含む。B層は明褐色シルト質殖土に灰黄褐色シルトを含む。重複関係は建物15(SP362・406・407)とSD129を切っている。出土遺物はA層から須恵器坏蓋・身・甕・土師器片等があり、概ね8世紀後半～9世紀前半頃のものと思われる。

SD129は方形周溝状を呈しており、1辺4.0m、幅0.35～0.6m、主軸N83°E、深さ　8cmを測る。埋土は単層で黒褐色土に黄褐色シルトを含む。重複関係はSD128・建物15に切られる。出土遺物は7世紀後葉～8世紀前葉頃の須恵器杯蓋が出土している。

土坑（第30図）

土坑(SK)は今回の調査ではD・Eトレンチで3基検出されており、いずれも長楕円形の土坑である。

D·SK1は主軸N52°E、長軸1.82m、短軸1.0～1.3m、深さ0.47～0.6mを測る。埋土は大きくA～C層の3層に分かれ、A層は黒褐色土に明褐色シルトを含む。B層は黄橙色シルトににぶい黄褐色土を含む。C層は暗灰～灰黄褐色粘土に黄橙色シルトを含む。重複関係はD·SK2を切っており、出土遺物はない。

D·SK2は主軸N59°E、長軸3.1m、短軸1.33～1.76m、深さ0.65mを測る。埋土はD～F層の3層に分かれ、D層は黒色粘土・鈍い黄褐色粘土に黄橙色シルトや灰白色粘土を含む。E層は黄色シルトに灰白色粘土を含む。F層は灰黄褐色シルトに灰白色粘土を含む。古代の土師器片が出土している。

E·SK1は主軸N15°W、長軸2.0m～、短軸1.0～1.2m、深さ0.27mを測る。埋土はA・B層の2層でA層は黒色土に褐色シルトを少し含む。B層は黒色粘土に黒褐色シルトと炭化物を含む。遺物の出土はないが、Dトレンチの土坑と比較して埋土・深さ等に差異があり、南端も調査区外へ続き全長が長いことから溝の可能性もある。

落込み（第29図）

落込み(SX)は2か所検出されており、SX1はBトレンチ東端で検出され、大半が調査区外にのびるため、全体形は不明である。規模は4.9m×0.65m～、深さ0.06～0.12mを測る。埋土は単層で黒褐色土に黄褐色・暗褐色シルトと含む。重複関係はSI1を切り、遺物は須恵器ハソウ・甕が出土している。

SX2はAトレンチ北端部で検出され、調査区外にのびるため全体形は不明である。規模は1.8m×0.9m～、深さ0.15mを測る。埋土はA·B層の2層に分かれ、A層は黒褐色土に黄褐色シルトと褐灰色粘土を含む。B層は黄褐色シルトに黒褐色土を少し含む。重複関係はSB9(SP88·120)に切られ、遺物は完形の須恵器ハソウ・坏身・甕・土師器羽釜・高坏等が出土しており、概ね7世紀前半頃のものと思われる。

出土遺物(第32～34図)

1～8はすべて須恵器坏蓋である。

1はSB7(SP327)出土で、器高2.9cm、口径10.1cm、天井部径6.2cmを計る。

2はSI1、3はSB9(SP88)出土で、宝珠つまみが付くタイプと思われる。2は復元口径8.0cm、最大径9.8cmを計る。

4はSX2出土で復元口径9.1cm、最大径11.0cmを計る。

5・8はSD129出土で5はかえりが退化し、復元口径12.0cmを計る。

6はSD1出土でかえりがなく、復元口径13.4cm、最大径13.9cmを計る。

7はSD128出土でかえりがなく、器高も低く天井部が平らである。

9はSP358出土で須恵器坏身と思われ、底径6.2cmを計る。

10はSX2出土の須恵器瑞(ハソウ)で口縁部が破砕されており、残存高11.4cm～、体部高6.5cm、頚部径3.7cm、体部最大径9.6cmを計る。体部中程に径1.5cmの円孔が1か所あけられ、口縁部と体部に各1条リング(沈線)がめぐる。また、口縁部には回転ヘラケズリと墨書のような痕跡が見られる。

11はSP38が出土、12はSB7(SP327)出土の須恵器長頚壷の口縁部？と思われる。

13はSX2出土の須恵器甕の口縁部で、復元口径25.2cmを計る。

14はSD40出土の土師器鉢の把手である。

15・16は土師器羽付長胴甕と思われる。15はSB9(SP88)出土で残存高8.1cm～、口径19.6cm、最大径27.3cmを計る。

16はSX2出土で残存高7.4cm～、復元口径　17.2cm、最大径25.4cmを計る。外面羽部に噴きこぼれと思われる炭化物が付着している。

17はSP38出土で土師器坏片を転用したものであるが、用途は不明である。表面には炭化物もしくは漆？が付着している。

18はSB9(SP120)出土の蜆貝と思われる。縦1.7cm、横1.6cm、厚さ0.5cmを計る。

19はSC4(SP416)出土の刀子の中茎部分と思われる。残存長1.7cm～、幅　0.7～0.85cm、厚さ0.35～0.5cmを計る。

20～26は須恵器甕の体部片で各々SD39・41・SP87・119(SB9)・SI2・SX2　から出土している。

27以降はCトレンチの遺構から出土した遺物で、27～29は須恵器坏蓋で、天井部に回転ヘラケズリを施す。

27はSP1出土で器高3.5cm、口径9.8cmを計る。

28はSP4出土で器高3.2cm～、復元口径10.0cmを計る。

29はSP6出土で器高3.6cm、復元口径9.5cmを計る。

30はSP7埋土上層出土の須恵器すり鉢である。残存高2.6cm～、底径9.0cmを計る。底部外面の側縁に手持ちヘラケズリを施す。

31はSP2出土の須恵器甕である。残存高6.3cm～、口径18.9cm、頚部径16.2cmを計る。生焼け

で摩滅しているが、体部外面にカキメ、体部内面にタタキが見られる。口縁部の特徴から7世紀前半は降らないと思われる。

まとめ

今回の調査では総持寺遺跡東端部の様相の一端が垣間見えるものとなった。検出された建物群や溝を中心とする集落跡は概ね7世紀代～9世紀前半と11世紀以降に展開することが明らかとなった。

また、周辺既往調査との成果を比較検討することによって、新たな事実の発見やこれまでの調査成果の裏付けとなる調査でもあったともいえる。

第35図～第37図の既往調査区遺構配置図は、総持寺遺跡におけるこれまでの各調査機関による報告書をもとに作成した各時代の遺構を掲載している。

飛鳥時代の遺構配置図をみると、センター03-1調査では飛鳥時代の16溝や建物14等西に振れた遺構群が東部に集中する。今回の調査でもSB2・6・7・9、SI1、SX1・2、SD5・40・41を代表とする溝群も西に振れている。

また、平成16(2004)年度市教委調査においても西に振れた遺構群が多数を占める状況を呈している。等高線と比較すると概ね北西ー南東方向に地形が緩やかに下っていることから、センター03-1で指摘されたように地形に規制されて遺構群が西に振れた可能性は否定できないが、それ以外の要因も今後検討する必要がある。

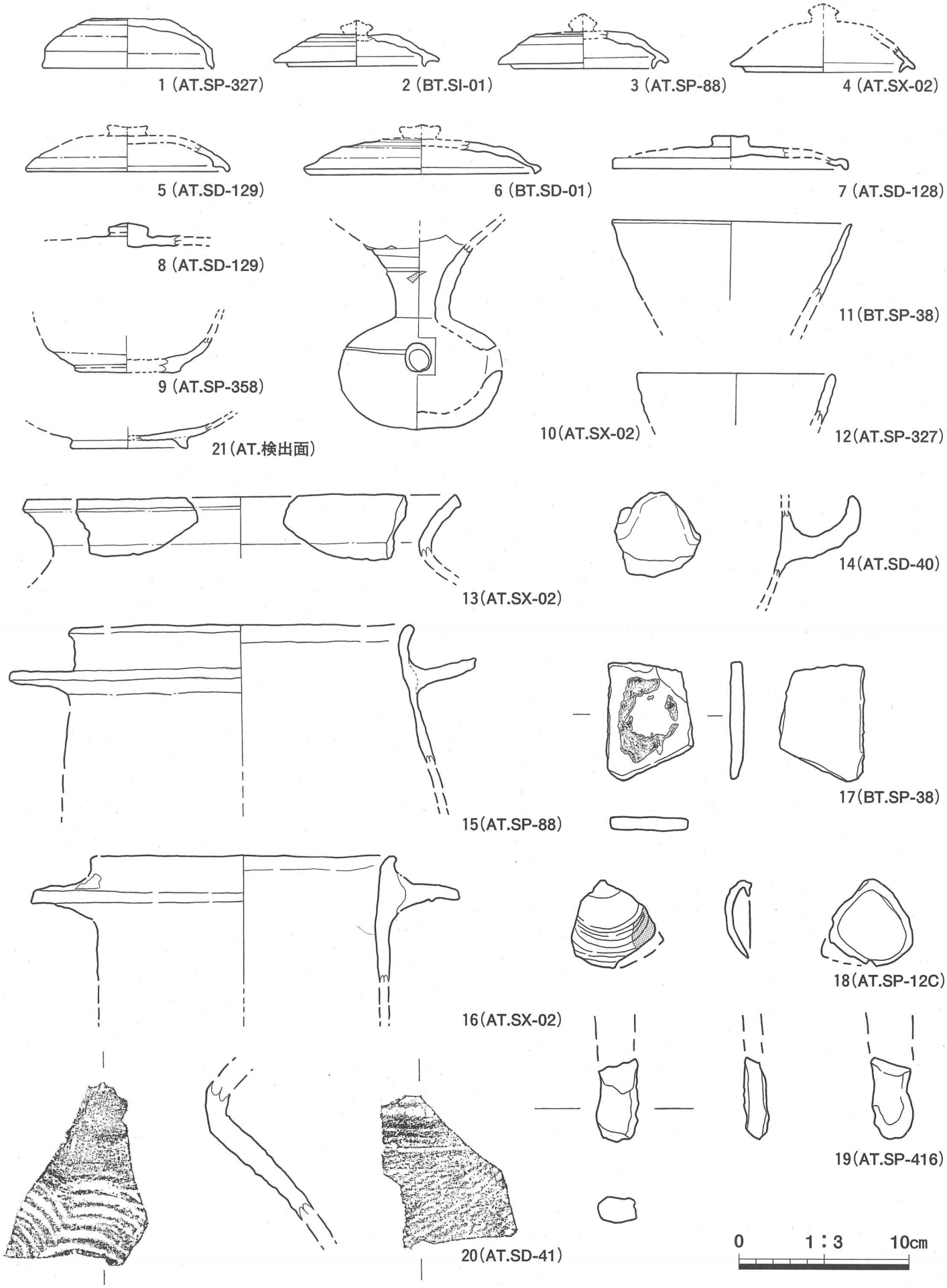
奈良時代～平安時代(前期)においてはセンター03-1調査では時代には言及しなかったものの「より新しい時期には正方位に近いものになったことが想定できる」としており、この傾向は平成6(1994)～8(1996)年度センター調査、平成16(2004)年度・17(2005)年度市教委調査でも顕著に現れている。

今回の調査でも建物10･15、SB5、Aトレンチ東側に集中する溝群がこれに対応する。この溝群はAトレンチ東側にのみ集中して見られ、西に偏った溝群と重複する。このことは、遺跡東端部の土地利用のあり方として注目されるとともに、7世紀～9世紀にかけて用途は変化しなかった可能性を示唆する。

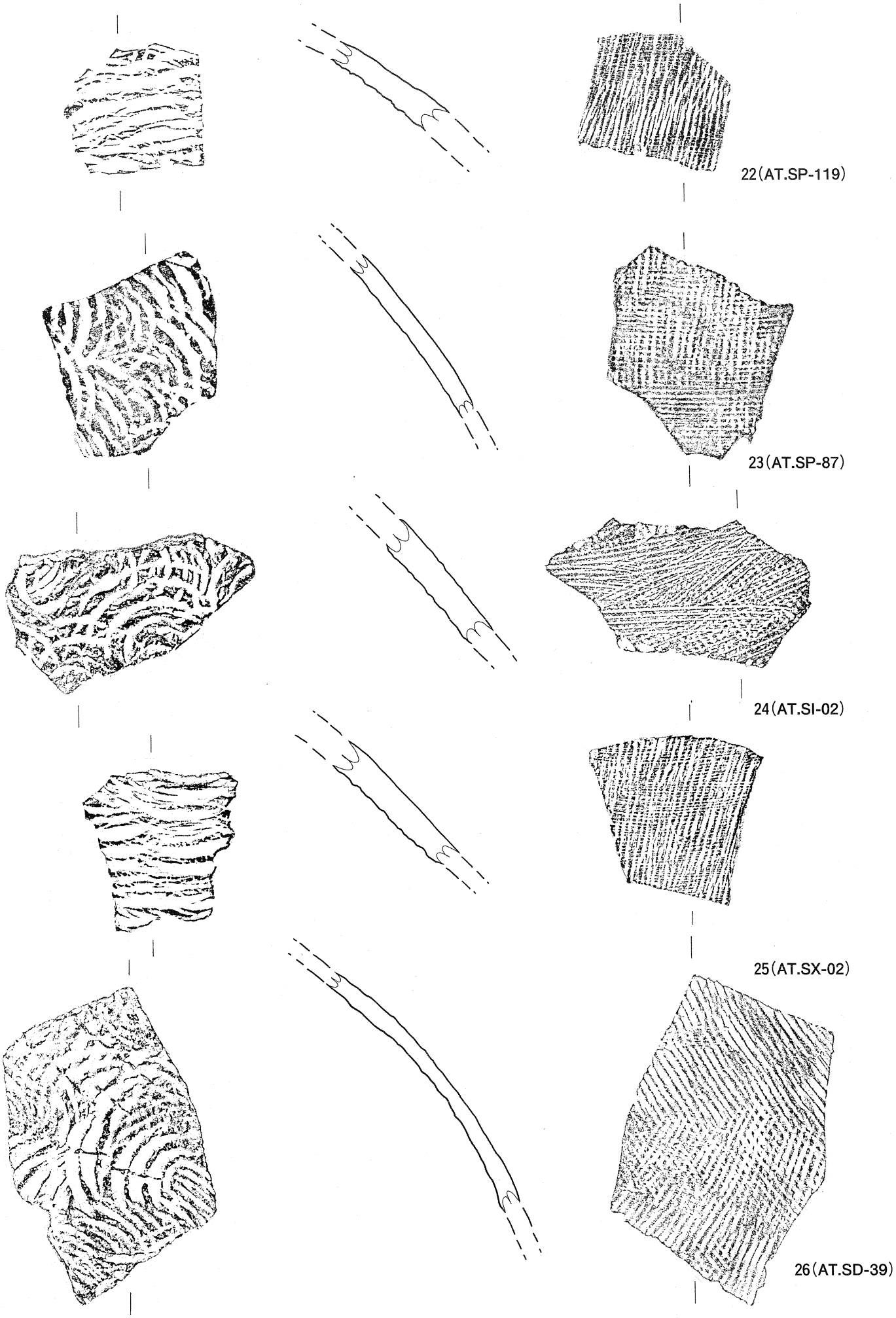
しかしながら、地形等の制約を排除した建物・区画溝等の正方位への転換の意味するところは時代の歴史的・社会的背景に何か大きな恣意を感じさせる出来事である。また、古代を遺構から概観するとこの時期に最も建物が数多く検出され、方位や区画といった意識が顕現している。

そのことはセンター平成6(1994)～8(1996)年度調査において「溝・柵列・空閑地により正方位を意識した方形区画を基に数グループにわかれ形成される」といった指摘と一致するところである。古代末～中世になると方位もさることながら、平成6(1994)～8(1996)年度府教委調査をみると、より区画を重視した集落構造となっていくことがわかる。

総持寺遺跡では(総持寺北遺跡も含む)遺跡の14%が発掘調査され、飛鳥時代～平安時代前期に属すると見られる建物跡だけでも既に200棟以上存在していることが判明している。このことから考えると、すべての遺跡を発掘調査した場合にはその棟数は面積に比例して倍増するものと考

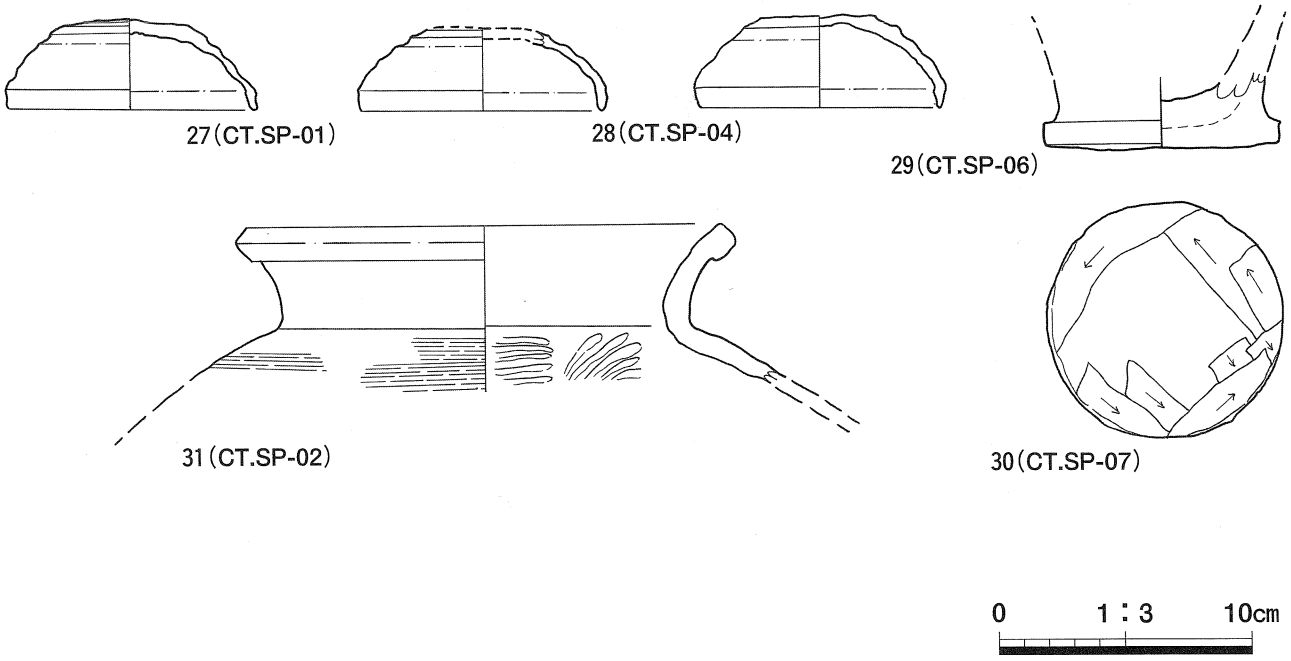


第32図　総持寺遺跡（SJ05－1）出土遺物（1）



第33図　　総持寺遺跡（SJ05－１）出土遺物（２）

0　1：2　4cm



第34図　総持寺遺跡（SJ05－1）出土遺物（3）

えられ、実際にはそう単純ではないにしろ数百棟規模の建物が当該期間に存在したことが推測される。

また、現代においても古来から人々の信仰の対象である伊勢神宮では20年に1度、宮の建替えを行なっており、『皇太神宮儀式帳』には延暦23年(804)に遷宮の記載がある。少なくとも平安時代初頭には建替えに関する記述がなされており、これをもって仮に建物総数600棟とし20年単位で建替えするならば、7世紀～9世紀には14回の建替えが必要となり、1小期に40棟ずつ存在したことになる。当然、時代によって建物の棟数は変動し、また、耐用年数ももっと短い可能性もあるが、イメージとして提示した。

しかしながら、かつて『三島』と謳われた富田台地上の遺跡を見渡すと弁天山古墳群・芥川廃寺・嶋上郡衙・郡家今城遺跡といった一連の流れが確認できる三嶋県主の勢力圏とされる地域以外に、律令制が崩壊するまでにこれだけの存続期間・集落規模で展開された遺跡は皆無である。果たして、これだけの集落規模を長期間維持・統括できた首長とは一体どんな一族であるのか、また3郡に編成された後、どの郡郷に比定されるのかといった当該期のこの地域の実態への解明が待たれ、課題は山積である。

さらに、条里制についても「総持寺遺跡発掘調査概要Ⅱ」(府教委1997)で富田台地における条里地割について嶋上郡側には顕著に認められるが、嶋下郡には認められないとされ、嶋下郡側の台地上にのみ条里制が施行されなかったものと考えられる、としている。

このことは、逆にとらえれば条里制を阻む要因が当該地域にあったにほかならず、その要因が

不必要であったのか、地形上によるものなのか、首長による作為的なものなのか興味のあるところである。

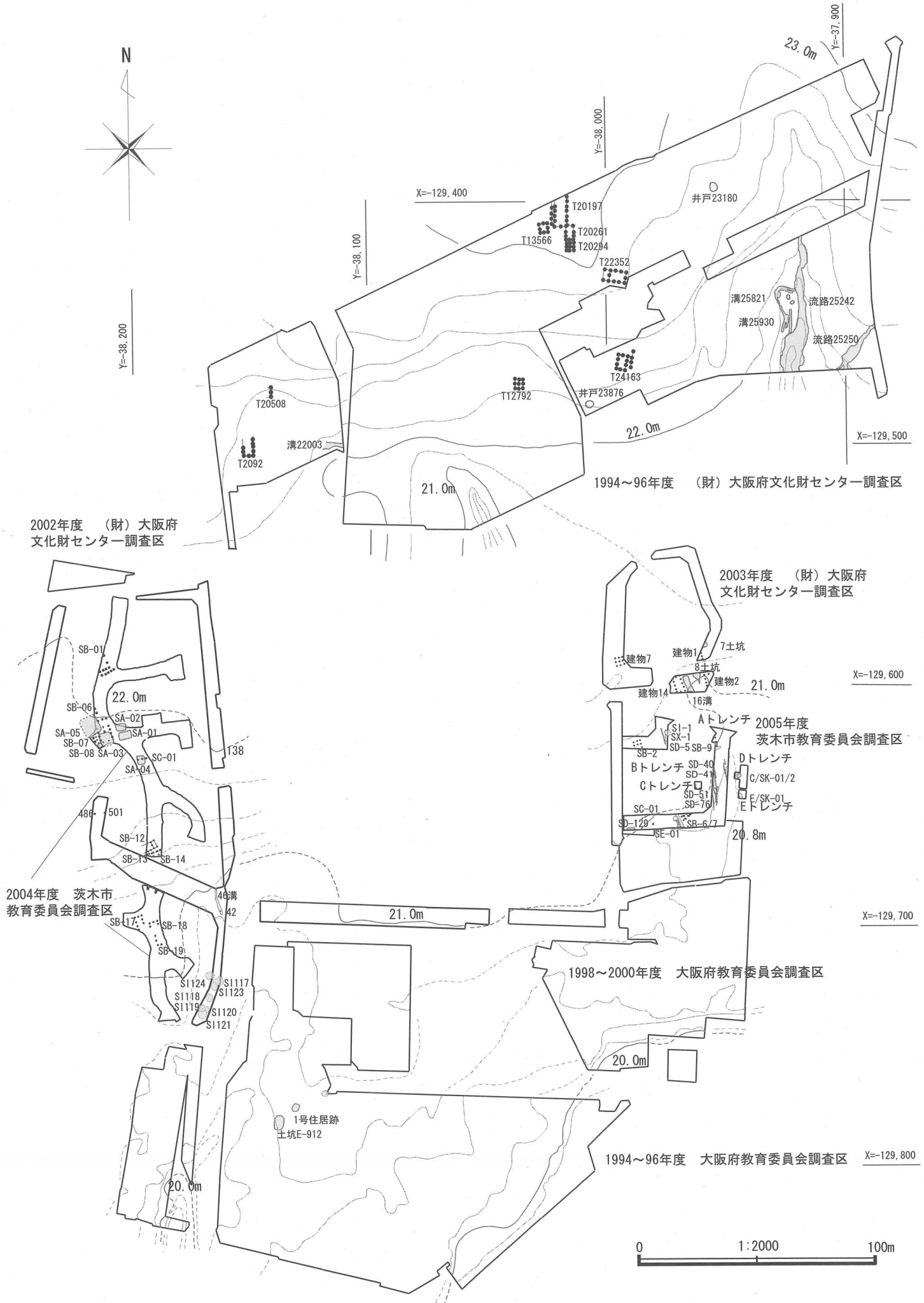
「総持寺遺跡」{(財)大阪府文化財センター調査報告書第30集1998} では科学分析による古代(平安時代)の環境復元がなされ、「人里植物ないし畑作雑草が分布し、樹木が少なく日当たりがよく、排水のよい比較的乾燥した環境であったと推定される」とされ、森林の二次林化が進行し、水田が近接して分布しオオムギ、ヒョウタン類、モモ、ウメ、スモモ等が栽培されていたことが判明している。

前述した集落規模とこのような環境を総合的に考え合わせるとこの地を拠点とした有力な豪族の存在が不可欠である。

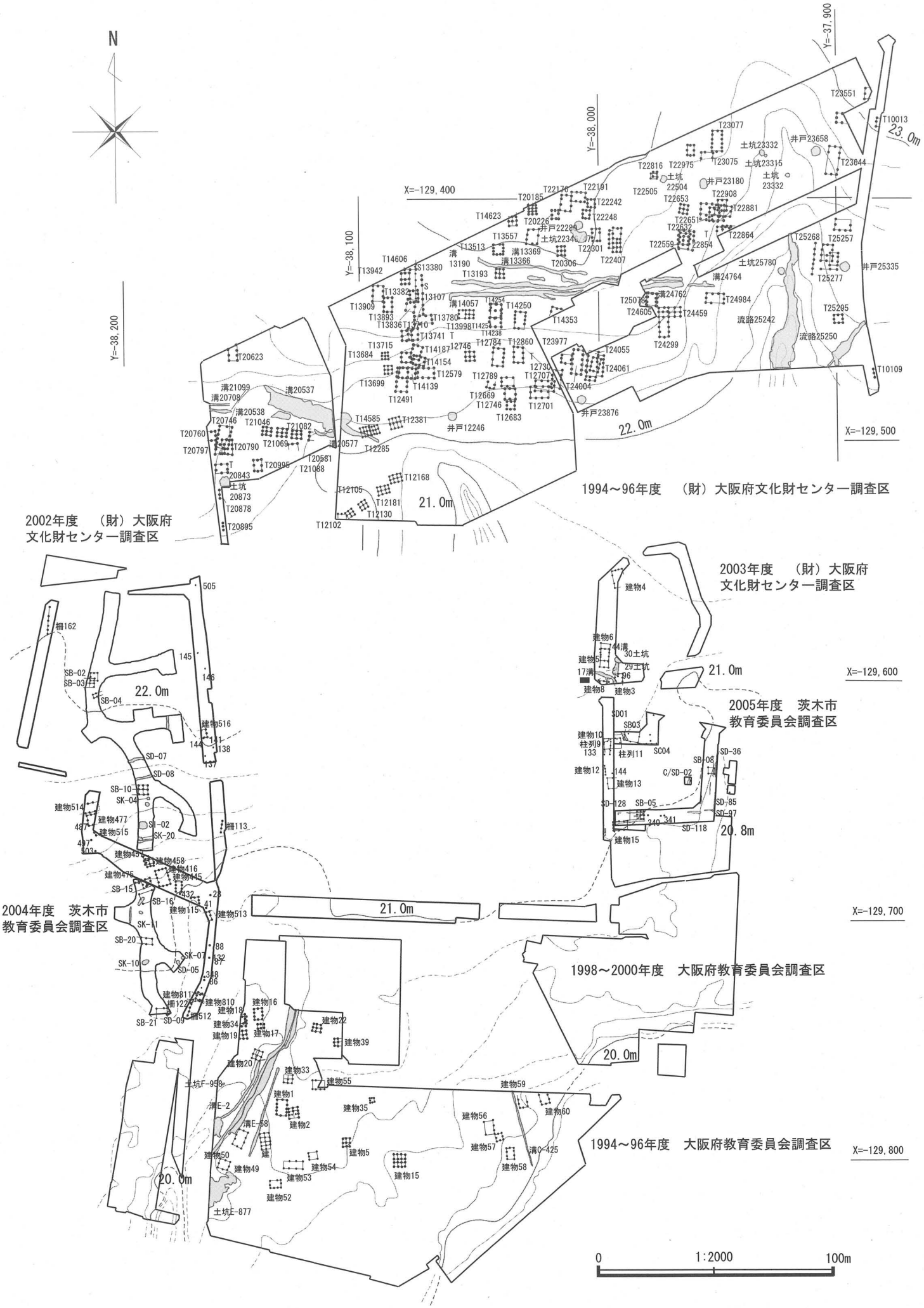
文献には中臣鎌足の叔父国子の曾孫意美麻呂の子、大中臣清麻呂が天平12年(740)に嶋下郡寿久郷(宿久庄)に蟄居していること(『神宮雑例集』)や天児屋根命系譜をひく中臣藍連、中臣太田連が安威や太田に蕃居(『新撰姓氏録』)に見られるなど古代〜中世にいたるまで何かと藤原氏による影響力が大きく及んでいる地域である。

参考文献

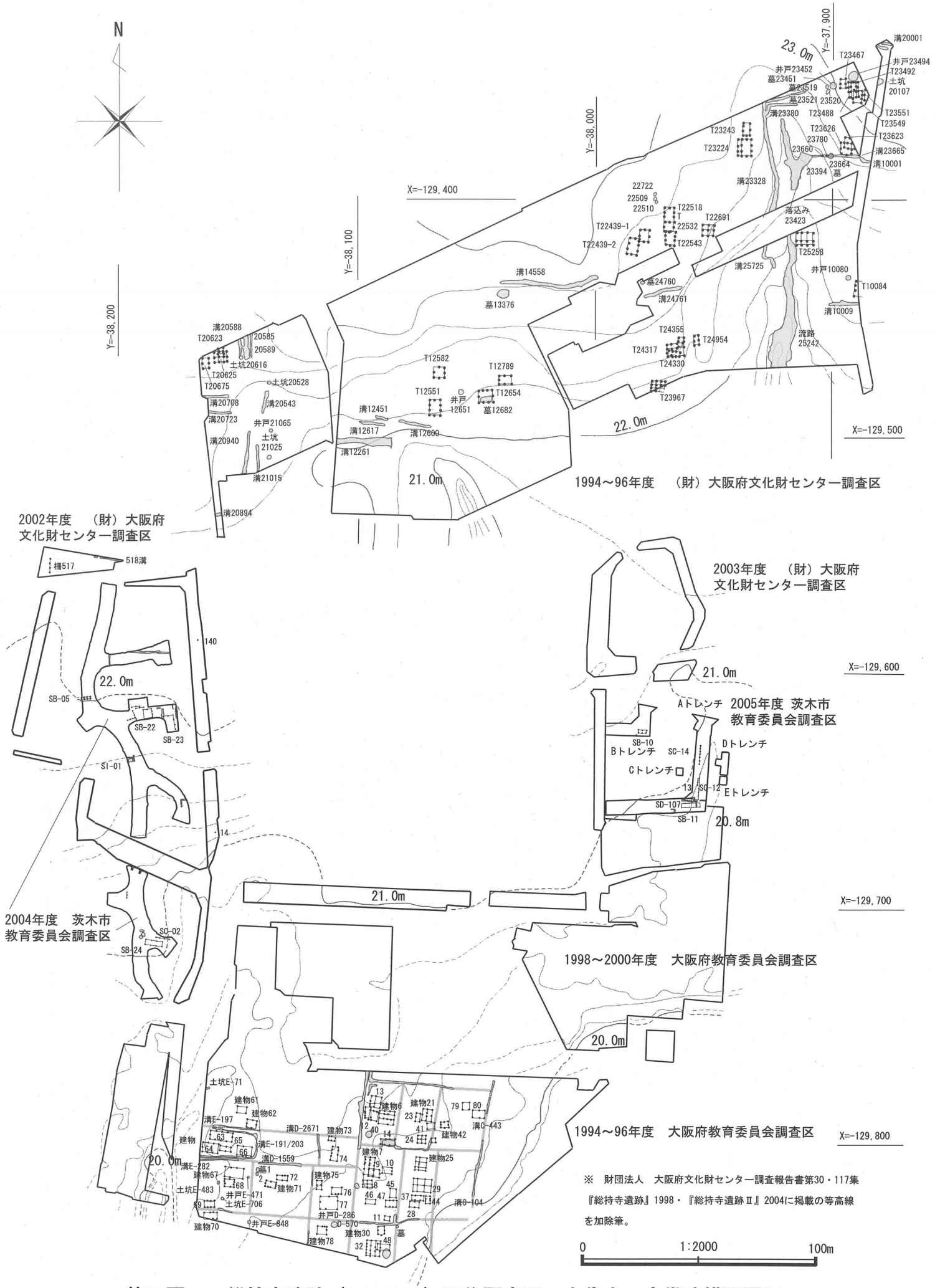
1995 『総持寺遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
1997 『総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 大阪府教育委員会
1998 『総持寺遺跡』「センター調査報告書　第30集」 現(財)大阪府文化財センター
2004 『総持寺遺跡Ⅱ』「センター調査報告書　第117集」 現(財)大阪府文化財センター
1997 『平成８年度発掘調査概報』「総持寺北遺跡」 茨木市教育委員会
2002 『平成13年度発掘調査概報』「総持寺北遺跡」 茨木市教育委員会
2005 『平成16年度発掘調査概報』「総持寺遺跡」 茨木市教育委員会



第35図　　総持寺遺跡（SJ05－１）既往調査区　飛鳥時代遺構配置図



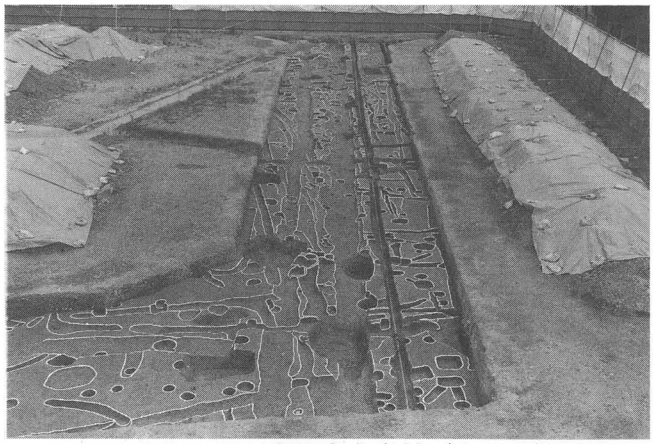
第36図　　総持寺遺跡（SJ05－１）既往調査区　奈良・平安時代遺構配置図



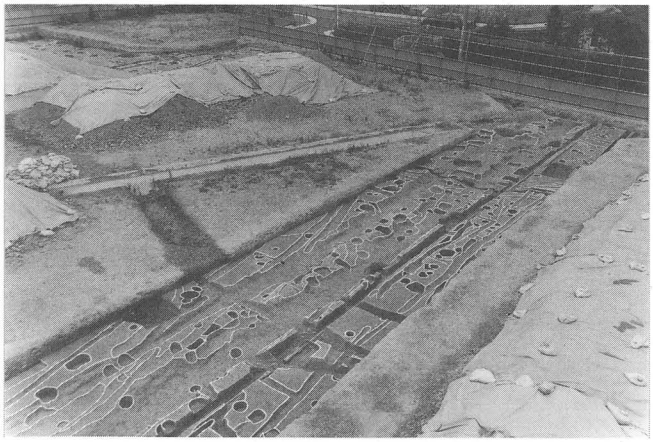
※　財団法人　大阪府文化財センター調査報告書第30・117集『総持寺遺跡』1998・『総持寺遺跡Ⅱ』2004に掲載の等高線を加除筆。

第37図　　総持寺遺跡（SJ05－1）既往調査区　古代末～中世遺構配置図

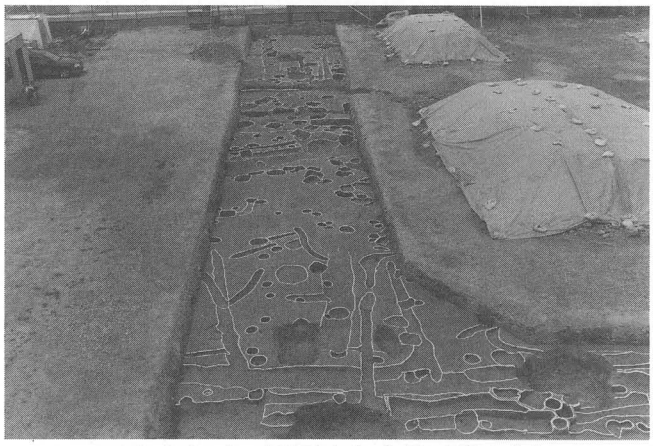
調査地全景（南東から）



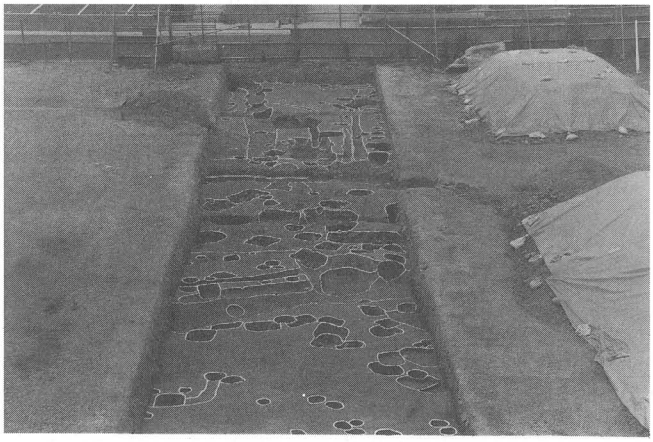
Aトレンチ　南北方向全景（南から）



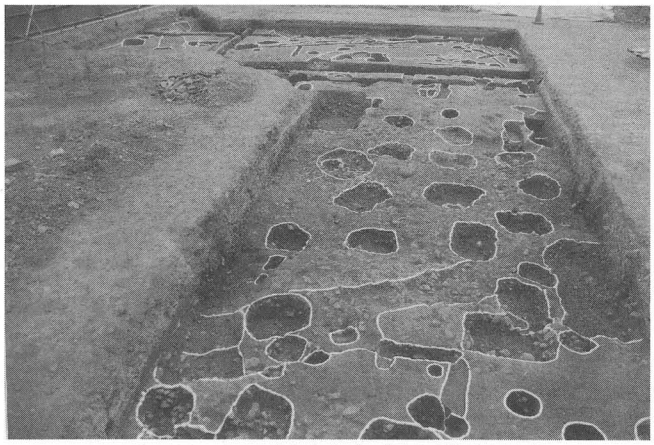
Aトレンチ　南北方向全景（南東から）



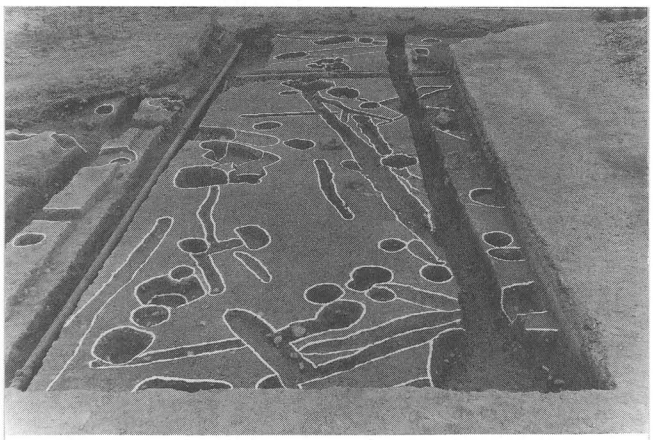
Aトレンチ　東西方向全景（東から）



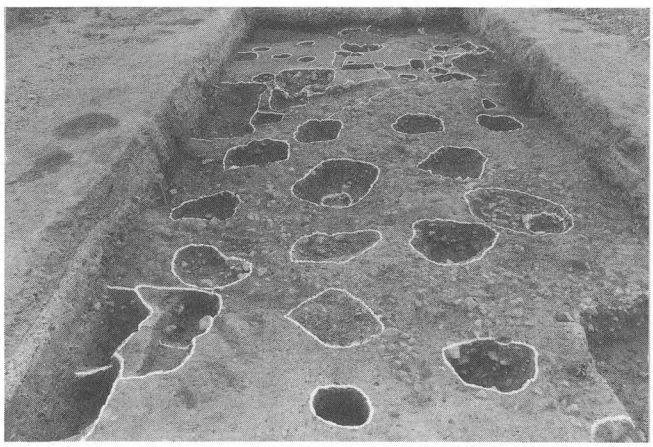
Aトレンチ（東西）　西部全景（東から）



Bトレンチ　東西方向全景（西から）

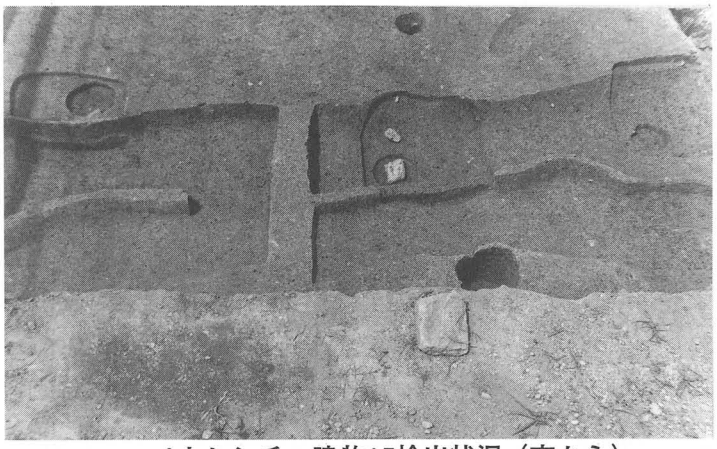


Bトレンチ　南北方向全景（南から）



Bトレンチ（東西）　建物跡（東から）

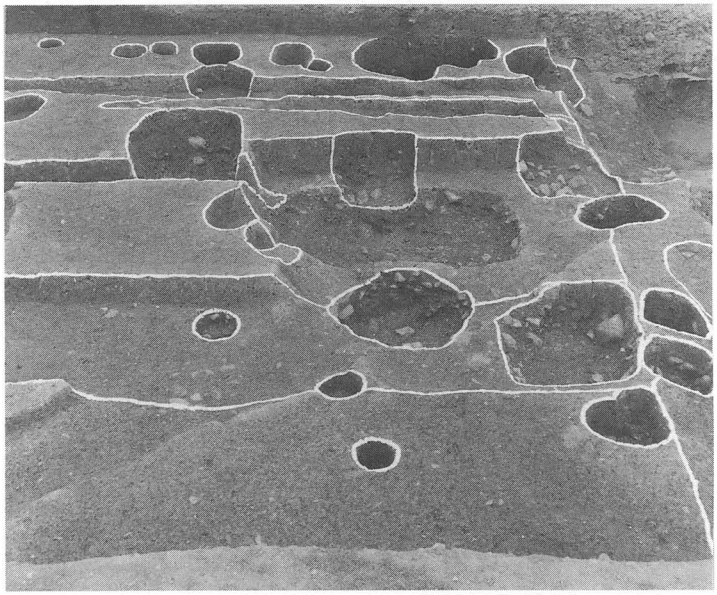
第38図　　総持寺遺跡（SJ05－1）No.1



Aトレンチ　建物15検出状況（南から）

Aトレンチ　建物15検出状況（南東から）

Aトレンチ　SB-05検出状況（南から）

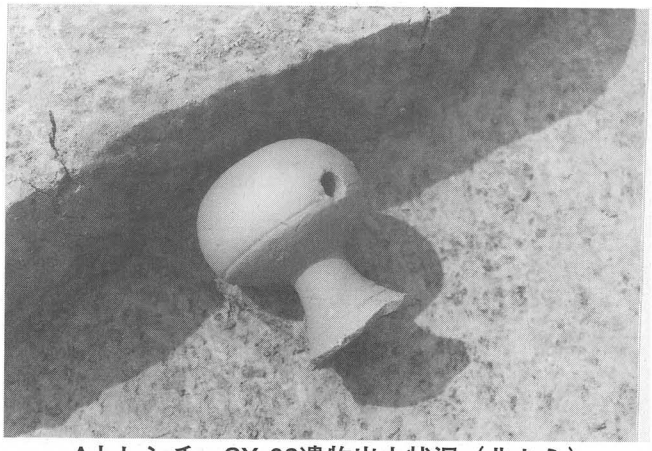


Aトレンチ　SB05全景（南から）

Aトレンチ　SB-09全景（南から）

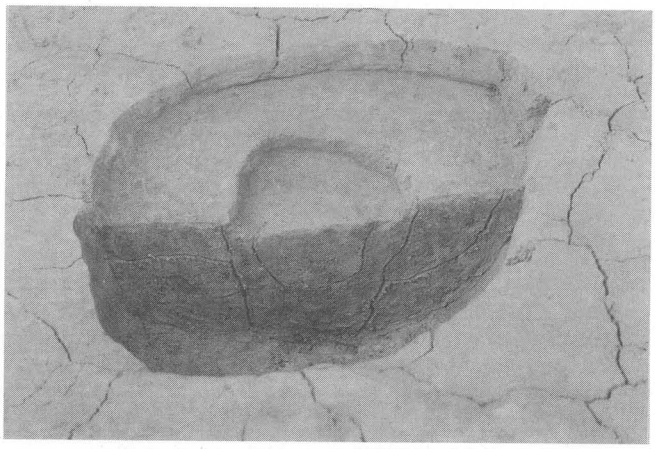
Bトレンチ　建物10全景（北から）

第39図　　総持寺遺跡（SJ05－１）No.2

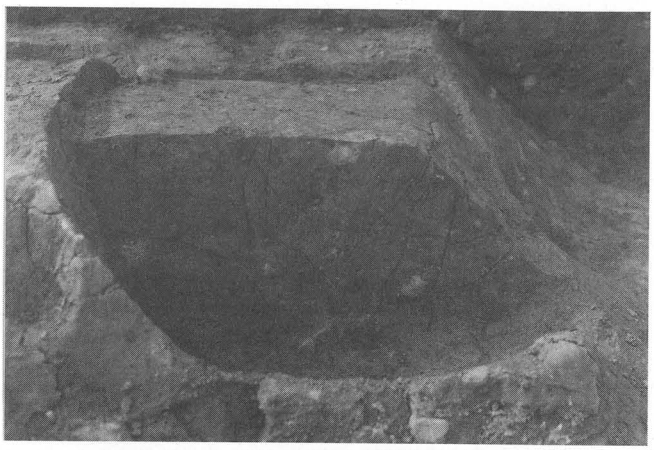


Aトレンチ　SX-02遺物出土状況（北から）

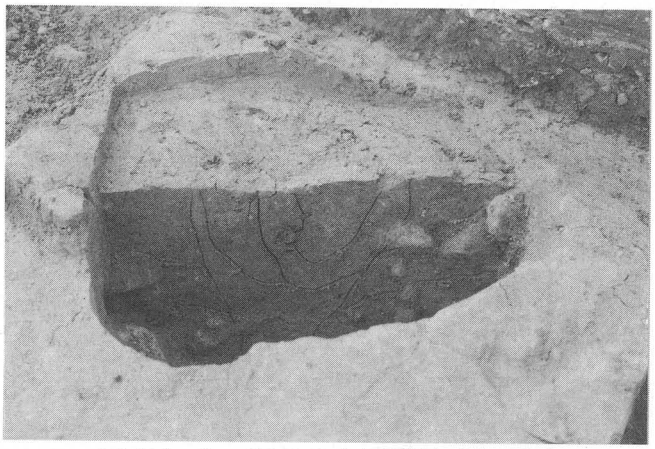
Aトレンチ　SP-88遺物出土状況（南から）



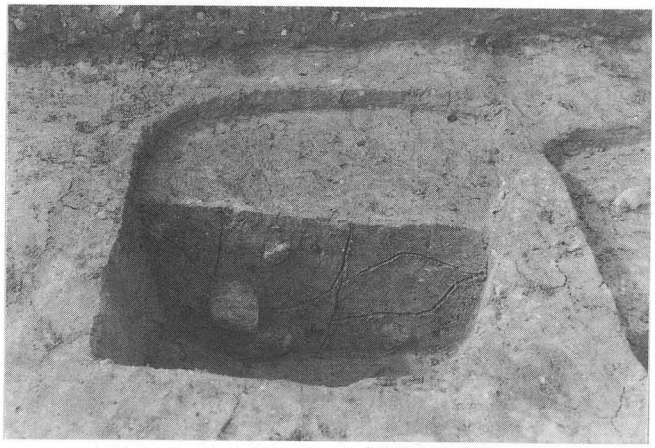
Aトレンチ　SP-84土層断面（南から）



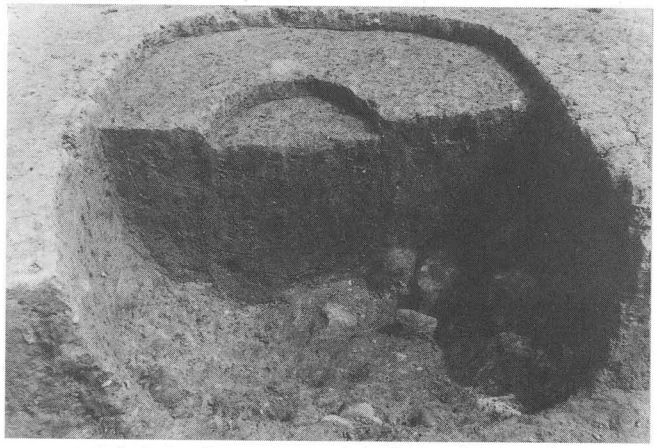
Aトレンチ　SP-307土層断面（南から）



Aトレンチ　SP-308土層断面（南から）



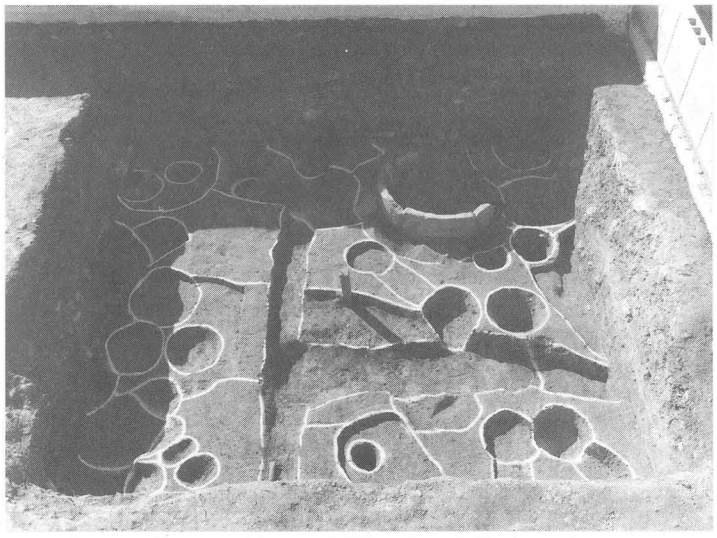
Aトレンチ　SP-321土層断面（南から）



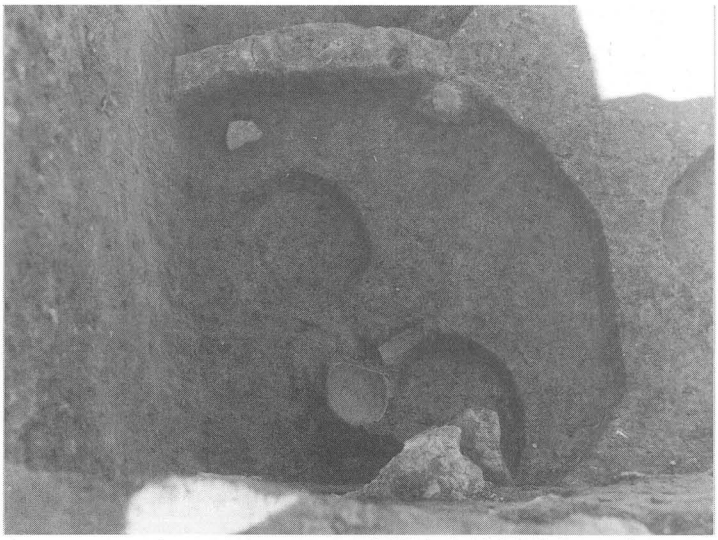
Aトレンチ　SP-358土層断面（南から）

Bトレンチ　SP-01土層断面（南から）

第40図　　総持寺遺跡（SJ05－1）No. 3

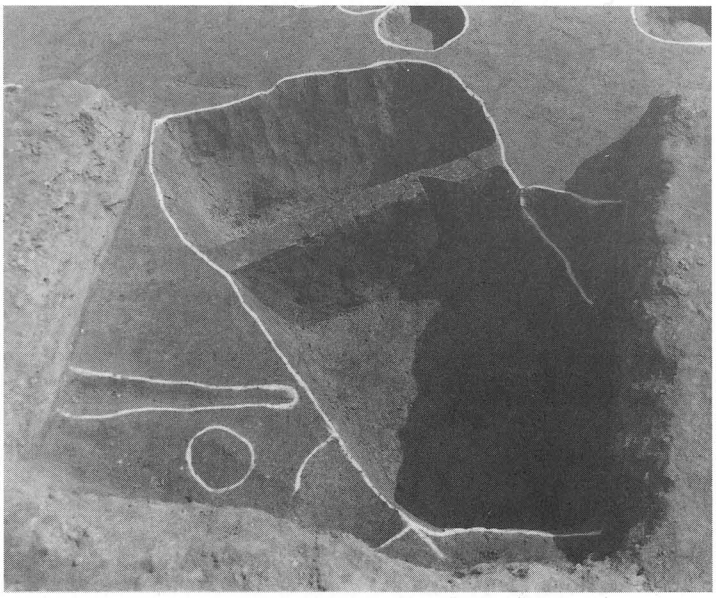


Cトレンチ　完掘全景（東から）

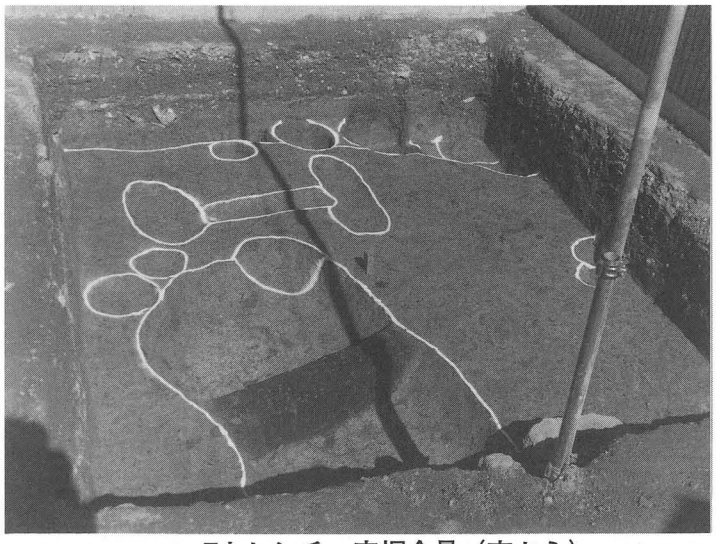


Cトレンチ　SP-01土器出土状況（南から）

Dトレンチ　完掘状況（北から）



Dトレンチ　SK-01・02全景（西から）



Eトレンチ　完掘全景（南から）

Eトレンチ　検出状況全景（南から）

第41図　　総持寺遺跡（SJ05－１）No. 4